

582

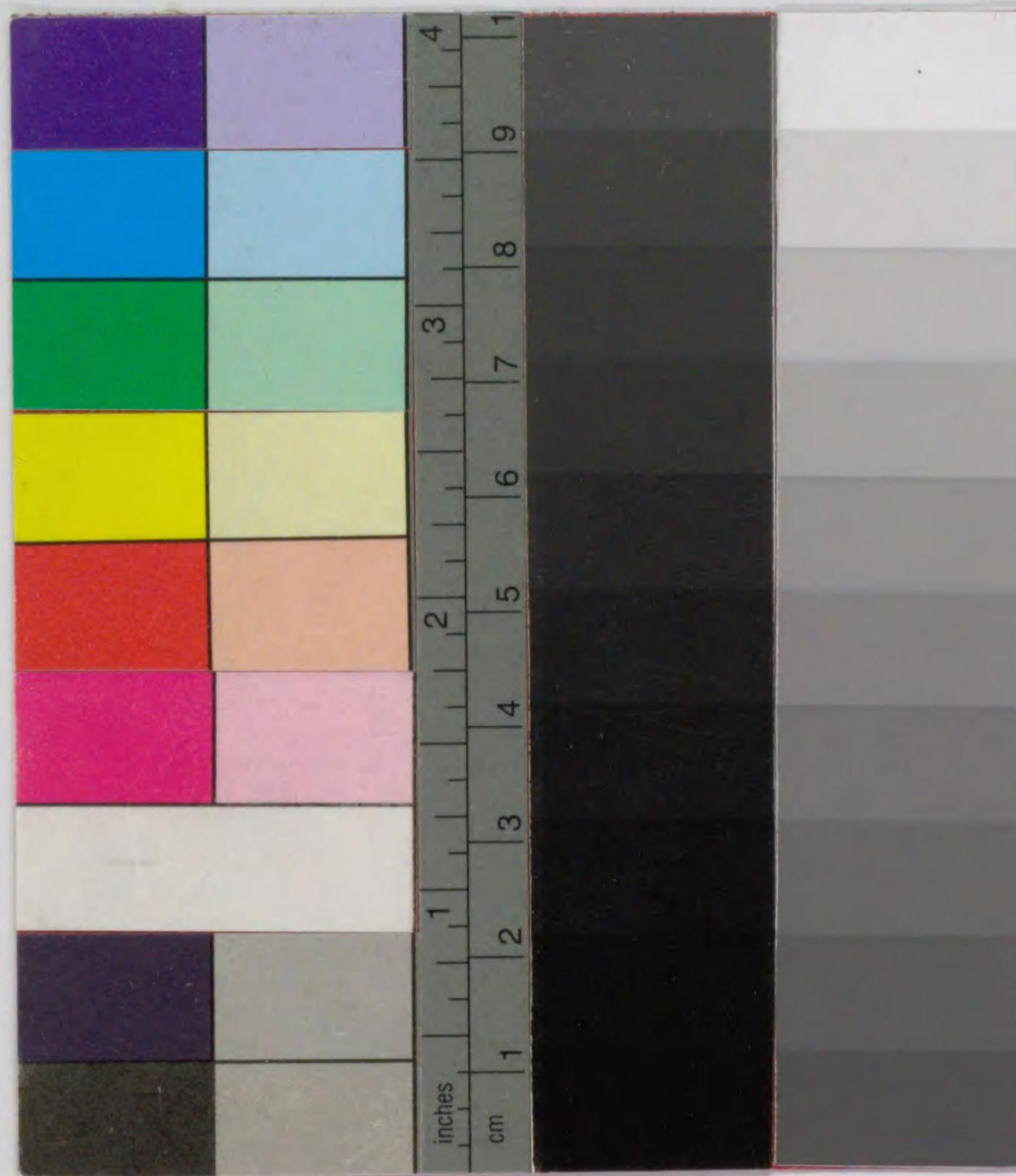
582-91

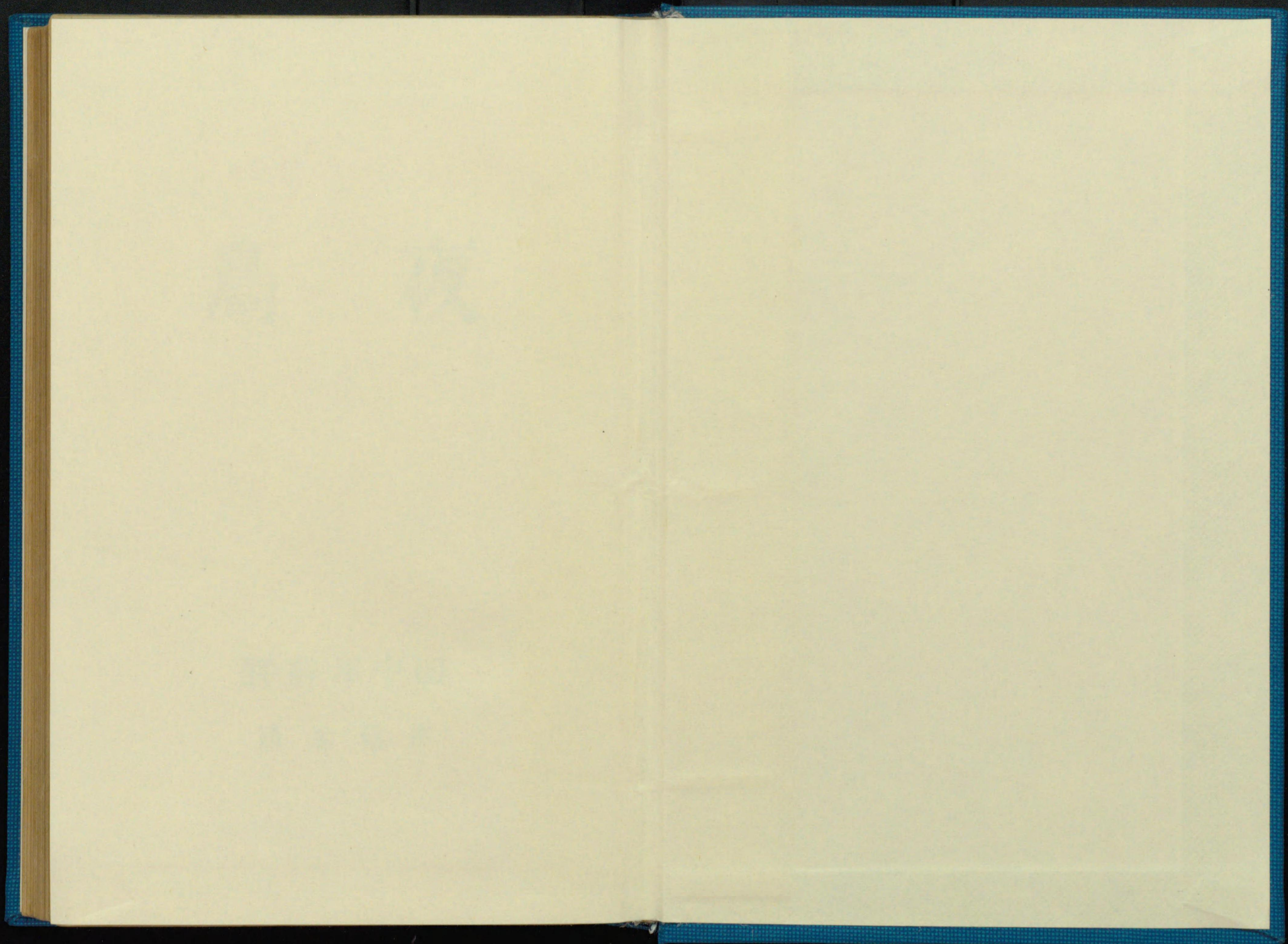


1200501522589

71

〇
複
写





トエ-2N-14

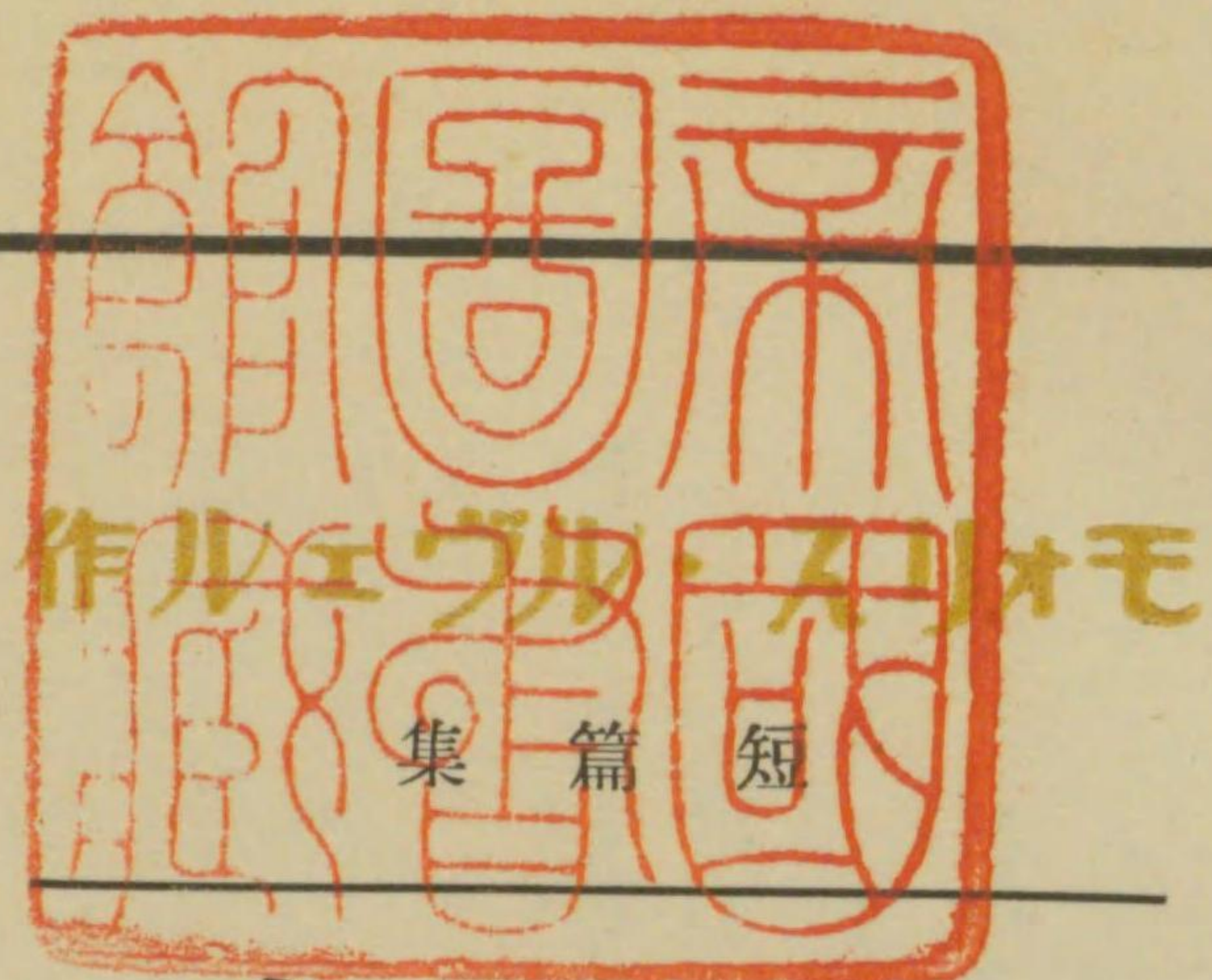
作ルエヴル

鳥 夜

⋮

譯 苗 早 中 田

版 堂 陽 齋

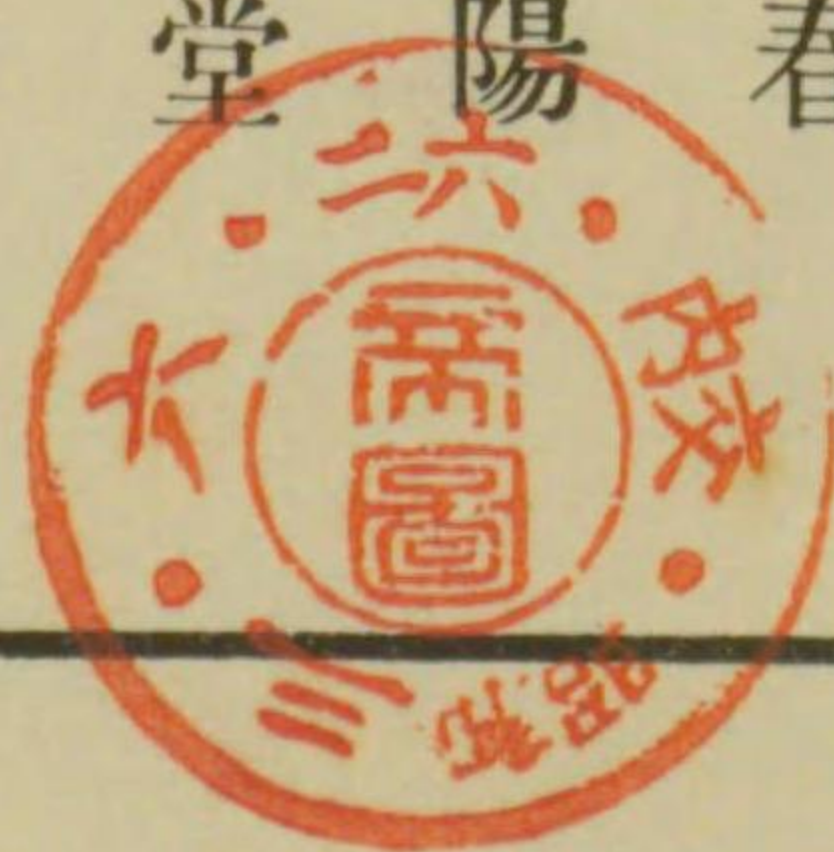


鳥 夜



譯 苗 早 中 田

京 東
版 堂 陽 春



序

モーリス・ルヴェル (Maurice Level) は、佛蘭西現代作家のうちで特殊な、そして相當に高い地位を占むべき一人である。

彼の作品については、『現代短篇作家集』の編者アンドレ・ファーチ (André Fage) がもつとも理解のある、行きとどいた批評をしてゐる。それによれば、

「ルヴェルは何よりもまづ短篇作家である。多くの長篇作家が短篇小説といふものを第二義的に考へて、漫然と書きなぐるのとはちがつて、コントは彼の本質にしつくりと當嵌つた必然の形式なのである。

「彼は簡潔に纏まつた説話の形で人生を観る。さうして彼の眼に映るそれらの事象は、悲劇味や喜劇味や小説味や現實味などをそれぞれに含有してゐて、しかも總じて意表外の結末をつけるのである。

「彼は現代のコントに最も輝かしい光彩を添へた作家の一人であるが、それは畢竟、コントは佛蘭西文藝の偉大なる傳統から生れた最上の形式であるといふ信念の下に彫心鏤骨する彼の眞摯な

態度から來てゐるので、その傑出した作を讀んだなら、自から高く矜持したモオバツサンでさへ喜んで署名したい氣持になつたゞらうと思はれる。」

なほ、英吉利の名優で文藝家で取りわけ怪奇文學の愛好者だつたアーヴィング(H. B. Irving)も、彼の作について次のやうな感想を書いてゐるが、これは主として怪奇譚の方面から見たのである。

「ルヴェルの作は、他の誰よりもボオに似通つてゐる。彼は怪奇譚といふものに文藝的に最高の表現を與へた作家であつて、この種の題材の取扱において、彼はたしかにオリヂナリチをもつてゐる。そして彼の作はボオのそれよりも現實的で、一層人生に接近してゐて、より簡潔で、より物凄い。且つその中の幾つかの作品には、ボオなどに見られない一種の至純な哀憫がある。

「ルヴェルは従來の怪談とまったく行きかたの異つた、一の新しい戦慄を提供するので、多くの怪談に食傷してゐる讀者でも一度ルヴェルを讀めば、従前に會て知らなかつた疎動を感じるにちがひない。

「諸君はグラン・ギニョール座へ見物に出かけたつて、いつも満足が得られるとは限らぬ。怪奇劇は演出が生硬だとしばしば無效果に終るものなのである。それよりも書齋の肱掛椅子に坐りこ

んで鬼オルヴェルのコント集を一冊手にすれば、それこそ間違もなく諸君の恐怖慾が充たされるであらう。」

人としてのルヴェルについて書かれたものはたんとないので、詳しいことはまだ知られてゐないが、何でも父はアルザス出身の將校で長いこと阿弗利加守備隊に勤務してゐた關係から、彼も少年時代の大部分を父親とともにアルゼリアの方で送つた。それから巴里へ遊學して、醫學を勉強して、業を終へるとやがて巴里の或る病院に住込醫員として就職したが、その間に彼は、醫師といふ職業を通じて種々なる人間苦を具さに見聞したのであつた。

彼の作はどんなに凄い話を書いてゐるときでも、底の方に溢るゝばかりのヒューマン・タッチがあるのは、勿論作者自身の性格の現はれに相違ないが、さうした經驗に伴つてそれが培はれて來たものとも見られやう。

深刻な話は大てい初期の作で、この住込醫員時代の宿直の夜々に執筆したものであつた。彼はその原稿をアカデミシアンでその時分「ル・ジュルナル」の文藝部長だつたジョゼ・マリア・ド・エレチア(José Maria de Heredia)に見て貰ふと、エレチアはいたく激賞して、早速紙上に載せて

くれた。ルヴェルが文壇に乗りだしたのは、これが最初の機縁だったのである。

この『夜鳥』などの諸作を通して考へると、彼はおそろしく憂鬱な、救ひがたい厭世家としか思へないが、実際に會つてみると、極めて快活で、瀟洒として、いかにも巴里つ子らしい感じがしたといふことである。それに、彼はあらゆる種類のスポーツに興味をもつてゐて、一九一〇年に瑞西で氷滑スケートをやつてひどい怪我をする以前までは、随分敢爲なスポーツマンであつた。

半面にさうした明るい快活さがあつたことは、『Mado』の二巻によく現はれてゐる。スケッチ集ともいふべきこの二巻は、極めて輕妙な氣持のいゝ筆致で、若い巴里女の晴れやかな生活を描いたものである。

あの大戦がはじまると同時に、彼は瑞西の療養所を飛びだしてそのまゝ従軍し、モロッコ民兵第二聯隊に屬して各地に轉戦したが、一度こはした體をあまり無理に使つたゝめにすつかり健康を損ねてからは、已むなく後方勤務に廻つて、軍醫として戦争の終局まで働いてゐた。

戦争後は専ら續きものゝ長篇を執筆してゐたらしいが、思ひもかけず、彼が死んだといふ通信電報が都下の新聞に載せられたのは、一昨年の初夏の恰度今時分だつた。齡はたしか五十であつたと思ふ——私はその以前から可成り熱心に彼の作を翻譯したり彼のことを方々に書いたりして

ゐたので、その訃報を讀んだときは何となく軽い寂しさを感じないわけに行かなかつた。

ルヴェルの著作は次の通りである。

コント集又は連續コント集

Les Oiseaux de Nuit.

Les Portes de l'Enfer.

Mado ou la guerre à Paris.

Mado ou les mille joies du Ménage.

中篇集

Les Moris étranges.

Colette Paradis.

長篇

Le Manteau d'Arlequin.

La Cité des voleurs.

L'île sans nom.
 L'Ombre.
 Vivre pour la Patrie.
 L'Alouette.
 L'Épouvante.
 Les Printemps morts.
 Les Beaux Jours.
 Lady Harrington.
 L'Âme de Minuit.
 Le Marchand de Secrets.

彼のやうな多作家になると、すべての作を通じて同じ値打に評價しがたいのは已むを得ないことである。けれども、この青白い寶石の断面のやうに、怪しくも美しく光つてゐる彼のコントの特異性は、誰だつて認めずにはゐられまい。

とにかく短篇作家としてのルヴェルは、今よりもつと／＼尊重されていゝと思ふ。

この本には、*L'Oiseaux de Nuit* から十六篇と、他の集や雑誌に掲載されたものゝ中から十四篇と、都合三十篇を選抜したが、これで、彼のコント中の佳作と云はれてゐるものは略遺憾なく取入れたつもりである。

一九二八年五月二十五日

譯者

夜鳥

目次

或る精神異常者	一
○麻酔劑	九
幻想	二〇
犬舎	三
孤獨	四
誰?	五
○闇と寂	六
生さぬ兒	七
碧眼	八
麥畑	一〇〇

乞食……………二〇

青蠅……………二三

フエリシテ……………二九

ふみたば……………四〇

暗中の接吻……………四一

○ペルゴレーズ街の殺人事件……………四九

老嬢と猫……………五三

小さきもの……………五八

情状酌量……………六五

集金掛……………六九

父……………七〇

十時五十分の急行……………七三

ピストルの蠱惑……………七四

二人の母親……………七五

蕩兒ミロン……………七九

○自責……………七四

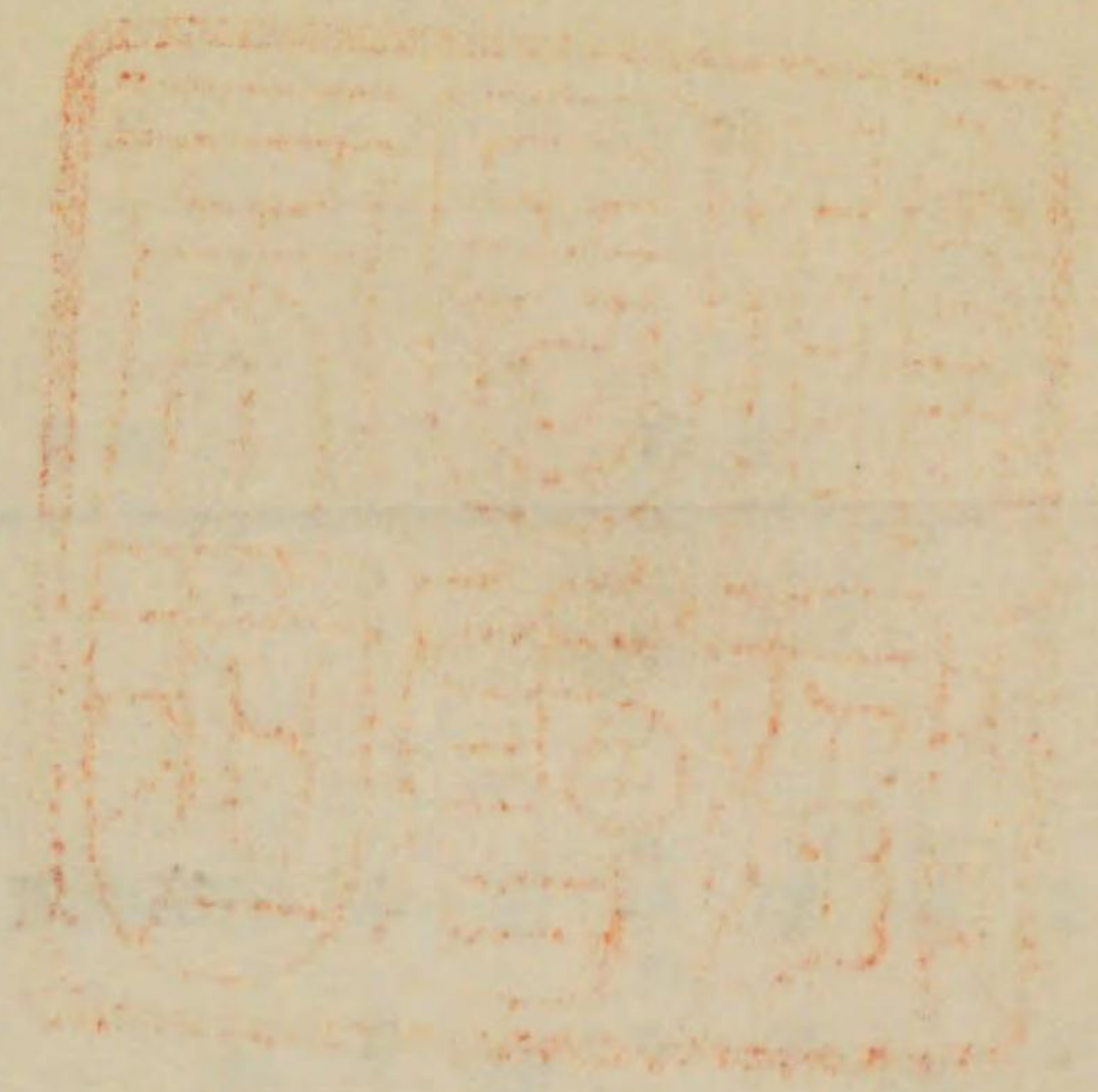
誤診……………八五

見開いた眼……………九六

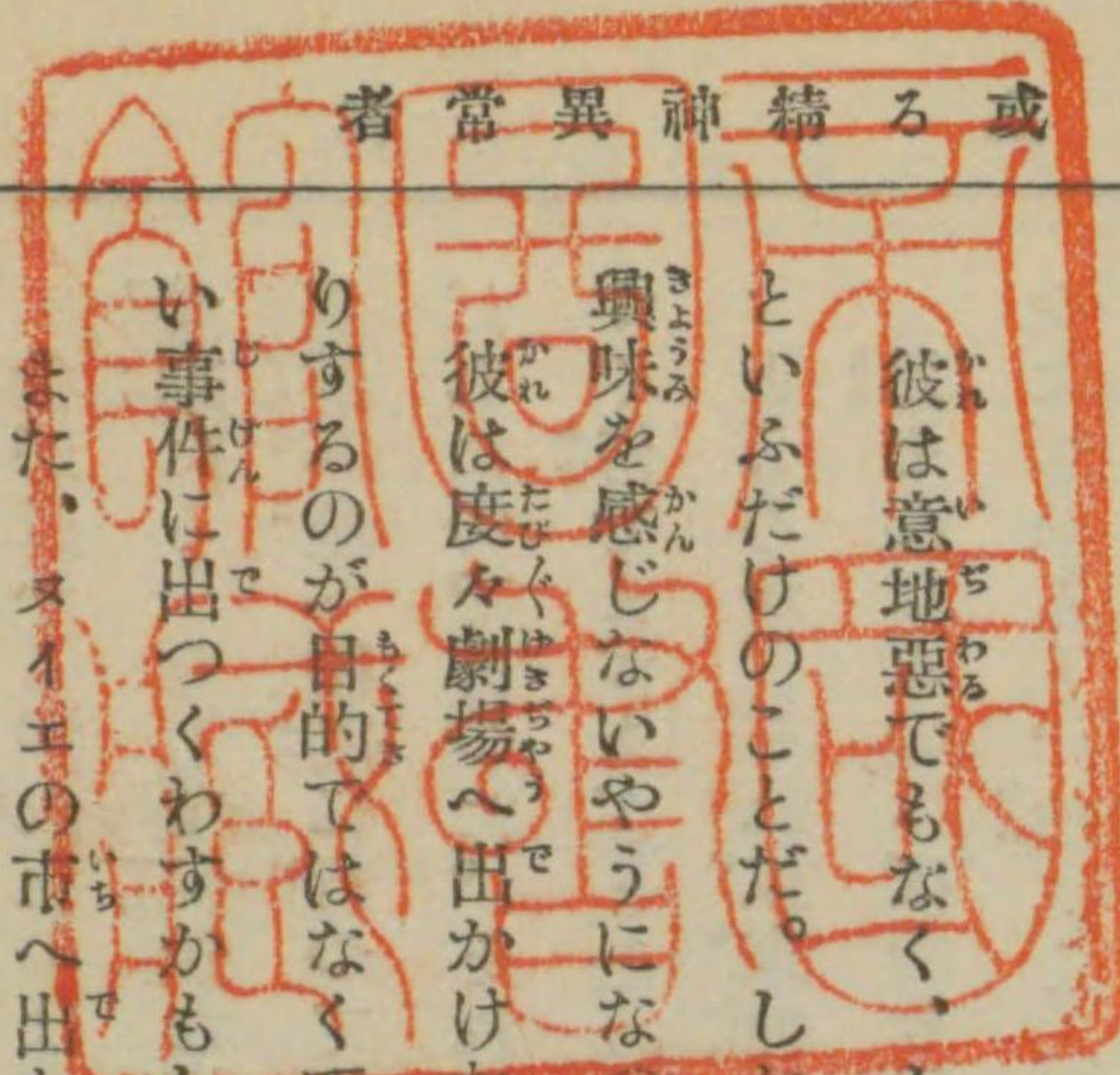
無駄骨……………一〇六

空家……………一三七

|| 終 ||



或る精神異常者



彼は意地悪でもなく、といつて、残忍酷薄な男でもなかつた。たゞ非常に變つた道樂をもつてゐたといふだけのことだ。しかしその道樂も大抵やりつくしてしまつて、今では、それにも何等潑刺たる興味を感じないやうになつたのである。

彼は度々劇場へ出かけた。けれど、それは演技を観賞したり、オペラ・グラスで観客席を見廻したりするのが目的ではなくて、さうして度々行つてゐるうちに、突然に劇場の失火といふやうな珍らしい事件に出つくわすかも知れぬといふ、一種の期待からであつた。

また、ヌイエの市へ出かけては、種々な見世物小舎を片つばしから漁りあるいたが、それも或る突発的の災難、例へば、猛獸使ひが猛獸に噛みつかれるといふやうな珍事を豫期してのことであつた。

一頃、闘牛見物に熱中したこともあつたが、直きに厭いてしまつた。牛を屠殺するあの方法があま

りに規則正しく、あまりに自然に見えるのが飽足らなかつた。それに負傷の牛の苦悶を見るのも嫌であつた。

彼が真から憐れたのは、思ひもかけぬときに突然湧きおこる惨事、或は何か新奇な事變から生ずる潑刺たる、そして尖鋭な惱みそのものであつた、實際、オペラ・コミック座が焼けた大火の晩に、彼は偶然其座へ観劇に行つてゐて、あの名状すべからざる大混雑の中から不思議にも怪我一つせずに遁けだしたのであつた。それから、有名な猛獣使ひのフレッドがライオンに喰ひ殺されたときは、檻のすぐ傍でまざまざとその惨劇を見てゐたのだ。

ところが、それ以來彼は芝居や動物の見世物に全然興味を失つてしまつた。

元そんなものにばかり熱中してゐた彼が急に冷淡になつたのを、友達が不思議におもつてその理由をたづねると、彼はこんな風に答へた。

『あんなところには、もう僕の見るものがなくなつたよ。てんで興味がなね。我れ人ともにアツといふやうなものを僕は見たいんだ。』

芝居と見世物といふ二つの道樂——しかも十年も通ひつめて漸と渴望を充たしたのに、その樂みが無くなつてからといふものは、彼は精神的にも肉體的にもひどく沈衰してしまつて、その後數ヶ月間、

滅多に外出もしないやうになつた。

ところが或る日、巴里の街々に、何度刷りかの綺麗なポスターが貼りだされた。そのポスターの圖案は、くつきりと濃い海碧色を背景にして、一人の自轉車乗りを點出したものであつたが、まづ一本の軌道が下へ向つてうね／＼と幾重にも曲りくねつて、終ひの方はリボンを垂れたやうに垂直に地面へ落ちてゐた。そしてその軌道の頂上には、自轉車乗りが今まさに駆けださうとして合圖を待つてゐるのだが、軌道があんまり高いものだから、その自轉車乗りは、ほつちりと打つた一つの點ほどにしか見えなかつた。

このポスターは自轉車曲藝團の廣告だつたのである。

その日の各新聞は、この際どい離れ業の提灯記事をかゝけて奇抜なポスターの説明をしてくれてゐたが、それによると、かの曲藝師は、その錯綜した環状の軌道をば非常な快速力で風のごとく乗り廻して最後に地面へ飛ぶのだが、彼は大膽にも、その危険きはまる曲乗りの最中に、自轉車の上で逆立ちをやるといふことであつた。

曲藝師は新聞記者を招待した際に、軌道と自轉車を實地に検査させて、種も仕掛もないことを證明した。そして自分の離れ業は、極度に精確な算數によるものであつて、精神集中作用が完全に行つ

佐佐木

Opera
cum

てゐるかぎり、萬が一にも仕損じる氣つかひはないと斷言したさうだ。しかし苟にも人間の生命が精神集中一つで保たれてゐる場合、それは随分不安定な懸釘にかゝつてゐるものだといふことも出来るのだ。

さてこの貼りだされたポスターを見ると、わが精神異常者は少し元氣が回復して來た。彼はそこに何等か新しい刺戟が自分を待つてゐるにちがひないといふ確信をもつて、「今に見ろ。」と友達に公言もした。で、彼は初日の晩から観客席に陣取つて、熱心にこの曲乗りを見物することになつた。

彼はちやうど軌道の降り口の真正面に座席を一つ取つて、そこをたつた一人で占領した。他人がまじると注意力が散漫になるのを恐れて、わざと獨り占めにしたのである。

最も際どい曲乗りは、たつた五分間で終つた。初め、白い軌道の上に黒い點が一つひよつこり現はれたと思ふと、それがおそろしい勢で驀進し、旋回し、それから大跳躍をやつた。それですべてが終つてゐた。まるで電光石火ともいふべき神速な、そして潑刺たる感激を彼に與へた。

だが彼は歸りぎには、大勢の觀客と一しよに小舎を出ながら考へた。「こんな感激は、二三度はいゝが、結局芝居や見世物と同じやうに厭が來るだらう。」と。

彼はまだ、自分のほんたうに求めてゐるものが見つからなかつたが、ふとこんなことを思ひついた

——精神集中といつても、人間の氣力には限りがある。自轉車の力だつて謂はゞ比較的のものだし、軌道にしても、いかに完全に見えてゐたつて何時かは駄目になる筈だ——と。そこで、一度はきつと事故が起るにちがひないといふ結論に彼は到達した。

この結論から押して、その起るべき事故を見守るといふ決心をするのは、極めて手近い一歩なのだ。「毎晩出かけよう。」と彼は心にきめた。「あの曲乗りの男が頭蓋を破るまで見に行かう。さうだ、パリで興行中の三ヶ月間に事故が起らなければ、おれはそれが起るまで何處までも追かけて行くんだ。」

それから二ヶ月間といふものは、一晩も缺かさずに、同じ時刻に出かけて行つて、同じ側の同じ座席にすわつた。彼は決して、この座席を變へなかつたので、座方の方でも直きに彼を見知るやうになつた。が、座方の連中は、高い料金を出して毎晩根氣よく同じ曲乗りを見物にやつて來る彼の道樂がどうしても解りかねた。

ところが或る晩、曲藝師は常よりも早くその曲乗りを終つたが、ふと廊下で彼に出つくわした。言葉を交はすのに紹介の必要などはなかつた。

「お顔は迅うから見覚えてゐます。」曲藝師が挨拶した。「貴方は入りびたりですね。毎晩いらつしやいますね。」

すると彼はびつくりして、

「僕は君の曲乗りには非常な興味をもつてゐるのだが、毎晩来るつていふことを誰に聞いたんだね？」

曲藝師はにつこり笑つて、

「誰に聞いたのでもありません。自分の眼で見てるのです。」

「それは不思議だ。あんなに高いところから……あの危険な藝をやつてゐながら……君は観客の顔を見かける餘裕があるかね。」

「そんな餘裕があるもんですか。私は下の方の観客席なんかで見て見やしません。しよつちう動いたり饒舌つたりしてゐる観客に少しでも氣を散らしたら、非常な危険ですからね。だが私どもの職業では、技藝や、理窟や、熟練のほかに、もつとく大切なことがあります……謂はゞトリックのやうなもんですがね……」

「えつ、トリックがあるかね。」

彼はまた吃驚した。

「誤解しないで下さい。トリックといつても、私のは詭計ぢやありません。私のトリックは、観客のまつたく氣づかないことで、しかもそれが一等呼吸のむづかしいところです。云つてみると、かうな

んです……實際、私どもは頭を空っぽにして只一つの考へしか持たないといふことは中々難かしいことで、つまり一つのことを精神を集中するといふそのことが困難なのです。しかし離れ業をやる時は何のみち完全な精神集中が必要ですから、私は何かしら観客席に目標をきめて、そればかりをちつと見つめて、決して他へ氣を散らさぬやうにします。そしてその目標の上に視線をすゑた瞬間から、他のあらゆるものを忘れてしまふのです。

鞍に上つて両手をハンドルにかけると、もう何も考へてゐません。バランスも、方向も考へません。私は自分の筋肉を頼みます。それは鋼鐵のやうに確かです。たつた一つ危いのは眼ですが、今もいつたやうに、一旦何かを見ずゑるともう大丈夫です。

ところで、私は初日の晩に曲乗りをはじめるとき、偶然にも貴方の座席へ視線がおちたので、ちつと貴方のお姿を見つめてゐました。貴方は御自分で氣づかずに、私の眼を捉へたのです。

かうして貴方は私の目標になりました。二日目の晩にもやはり同じ座席にゐる貴方に眼をつけました。それからといふものは、軌道の頂上に立つと、眼が本能的に貴方の方へ向ひます。つまり貴方は私を助けてゐらつしやるので、今ぢや、貴方は私の曲乗りに缺くことの出来ない大切な目標になります。これで、毎晩お見えになることを私が知つてゐる理由がお解りになつたでせう。」

その次の晩も、わが精神異常者は例の座席にすわつてゐた。観客は鋭い期待をもつて、例のごとくざわ／＼と動いたり饒舌つたりしてゐた。

と、突然、水を打つたやうにいいんと静まりかへつた。観客が呼吸を殺してゐる深い沈黙なのである。曲藝師は、自轉車に乗つて、二人の助手に扶けられながら、出發の合圖を待つてゐるのだ。彼はやがて完全にバランスをとつて両手にハンドルを握り、頸をしゃんとあけて正面に視線をつけた。

『ホオツ！』

曲藝師が一聲叫ぶと、支へてゐた二人の助手がさつと左右に分れた。

その瞬間にかの精神異常者は、もつとも自然な仕方であらうと、つと後退りをして、座席の他の一端へ歩いて行つた。と、遙か上の軌道で恐ろしい事件が起つた。曲藝師の體が突然宙に跳ねとばされて眞倒さまに墜落し、同時に空つ走りした自轉車がもんどり打つて、観客席の眞只中へ落ちこんで来た。

観客はアツと叫んで總立ちになつた。

そのとき精神異常者は、規則正しい身振りを一つやつて、外套を着て、袖口でシルクハットの塵をはらひながら左も満足けに歸つて行つた。

麻 醉 劑

「わたしなんか、麻醉劑をかけなければならぬやうな手術をうけるとしたら、知らないドクトルの手にはかゝりたくありませんね。」

と美しいマダム・シヤリニがいひだした。

『そんなときは、やつぱり戀人の手で麻醉らせて貰はなければね。』

老ドクトルは、自分の職業のことが話題にのほつたので、遠慮して黙りこんでゐるが、そのとき初めて首をふつて、

『それは大變な考へ違ひですよ、マダム。そんなときは、滅多に戀人なんかの手にかゝるもんぢやありません。』

「何故ですか？ 戀しい人が傍についてくれたら、どんなに心強いかしれませんわ。さうした生

命にもかゝらうといふときは、思念をすつかりその人の上に集めますと、精神の脱漏を防ぐことが出来ずからね。戀人の眼でちつと見つめられながら麻酔に陥ちてゆくなんて、どんなにいゝ氣持でせう。それから、意識にかへるときの嬉しい心持を思つても御覽なさい。「覺醒」の嬉しさをね……」

『ところが麻酔の醒め際なんか、そんな詩的なものぢやありません。』ドクトルは笑ひながら「麻酔からの醒め際は厭な氣持のするもので、そのときの患者の顔といつたら、見られたもんぢやありません。どんな美人だつて戀人から愛想をつかされるにきまつてゐます。』

といつたが、暫く押黙つたあとでつけ加へた。

『そればかりでなく、迂闊に戀人なんかの手にかゝると、頗る危険なのは、覺醒しないでそれつきりになることがあります。』

これには皆が反對説を唱へたので、ドクトルも後へ退けなくなつてしまつた。

『そんなら、私の説を證據立てるために、皆さんにごく舊いお話を一つお聴きに入れよう。實は、私がおその悲劇の主人公なんですがね、今はお話ししたつて誰に迷惑のかゝる氣つかひもありません。といふのは、關係者がみな死んでしまつて、生き残つてゐるのは私獨りなのです。但し關係者の姓名は秘しておきますから、皆さんが墓場をお探しになつても無駄ですよ。』

私は今は七十の聲がかゝつて、御覽のほとりの老ほれなんだが、その時分は二十四になつたばかりで、若い盛りでした。

私は病院の助手をやつてゐたが、恰度その頃、或る婦人と戀に陥りました。私としてはこれが後にも前にもたつた一度の、そして熱烈な戀でした。

彼女と逢引をするためなら、どんな愚劣な眞似でもやりかねなかつたのです。そして彼女の平和のためや、世間の誹謗を防ぐためなら、どんな大きな犠牲をも拂つたゞらうし、また、萬一われゝの戀が暴露かけて、彼女に疑ひがかゝるやうな場合には、私は直ちに自殺をしようといふ意氣込でした。われゝは何方も若かつたのです。女は、その時分、二十も年上の男と無理強ひに結婚をさせられてゐました。それに、老人の口からかう申しちやお恥かしい次第だが、われゝはお互ひに眞から惚れ合つた同士でした。

數ヶ月間はこの上もなく幸福でした。慎ましくしてゐたので、誰一人感つた者もなかつたけれど、或る日、良人なる人から私の許へ急狀があつて、細君が大病だから來て診てくれといふことです。私はすぐにその家へ飛んでゆきました。

彼女は床ついでて、眞蒼な不安な顔をして、眼のふちが黯ずんで鼻が尖がり、唇は乾ききつて、

髪はぐつたりと崩れてゐました。すべての様子が、病院でしばしば見る重病患者にそっくりでした。前の晩、突然、腹部に激烈な疼痛が起つたので、家人が寢臺に寝かしたさうですが、それ以來間断なしに呻いてゐて、とき／＼吃逆がまじつて、人が手でものべると、觸られるのを嫌がつて、一生懸命に押しつける身振りをする。そして決して觸つてくれるなといふことを、眼付で歎願してゐるのです。

診ると、一時間も、いや一分間も猶豫の出来ない状態なので、早速院長を招んだところ、院長の診断もやはり、すぐその場で手術をしなければ可けないといふのです。

サアかうなると、知らない患者のために落ちついて手術の準備をするのと、最愛の女のために怖々その準備をするのとは、心持に於て非常な相違があります。

隣りの室で人々がせつせと手術の仕度をやつてゐる間に、哀れな戀女は、私を傍へ呼んで、そつと囁きました。

「わたし平氣よ。どうぞ心配しないで……貴方の御手で麻酔をかけてね。」

私は手眞似で反對したが、彼女はどうしても肯きません。

「きつとね。貴方に眠らせて頂くわ。」

私は「可けない」と云はうとしたけれど、それを云つてゐる隙も、勇氣もありませんでした。そのうちに、もう人々がやつて来て、彼女を隣室へ運んでゆきました。

私の苦難はこれから始まるのです。

院長や、醫員や、看護婦たちが容易ならぬ氣勢であちこちと立ち廻つてゐる間に、私はクロロフォルムの壘と、マスクの用意をしました。

女が麻酔剤を數滴吸入しかけたとき、何だか厭がる風だったが、ふと私の顔を見るとにつこり笑つておとなしく、私のするがまゝに任せました。しかし、そのときは、まだ麻酔が不完全だったので、といふのは、私が感動のあまり度を失つて、マスクをぴつたりと口へ當てなかつたために、その隙間から空氣が入りすぎて、クロロフォルムの吸入量が少なかつたからです。

なほ、私は突發し得るさまざまな危険を考へてゐました。たび／＼見聞した麻酔死の場合なども豫想しました。その際、私の眼が常のごとく鋭敏でなく、手先が不確であつたのも、實に已むを得ないことなのです。

院長はシャツの袖を高々とまくりあげ、にゆつと伸ばした腕に波をうたせながらやつて来て、

「麻酔はいゝかね？」

その聲を聞くと、私は神経がぐつと引きしまりました。急に病院気分になつて緊張して答へました。

「まだです。」

「早くしたまへ。」

私は病人の上にかゝりこんで、

「聞えますか。」

と訊ねると、女は二度瞬きをしました。「聞える」といふことを眼付で答へてゐるのです。

「耳の中で何かブン／＼いつてゐるでせう。どんな音がしますか。」

「鐘……」

微かにつぶやきながら、一二度痙縮しました。そして片一方の腕をだらりと卓子に垂れ、呼吸はだんだん平らになつて、顔色はしだいに蒼ざめ、鼻の側に青筋が現はれて來ました。

私はまた、ぢつと身をかゞめました。女のすう／＼いふ呼吸がクロロフォーム臭くなつて來て、もうすつかり麻酔におちたのです。

「よろしうございます。」

と私は院長に報告しました。

が、やがて院長のメスが白い皮膚の上を颯と走つて、そこに赤い一線が滲んだとき、私はまた不安に襲はれました。彼女の肉が切られたり、摘まれたりするのを見ると、まるで自分の身體を切りさいなまれてゐるやうな氣がするのです。私は機械的に手をのべて女の顔に觸つてみました。と、彼女は突然、本能的に防禦でもするやうに脚を折りまけて、うーんと一つ呻きました。

院長は立ちすくんで、

「おい、麻酔が十分でないよ。」

といひます。私は大急ぎでマスクへまた数滴のクロロフォームを垂らしました。

院長はもう一度患者の上に屈みました。が、彼女は又もや呻いて、今度は何かわけのわからぬことを口走りました。

私は早くこの手術を終らせてしまひたいと思つて、どんなにやきもきしたことでせう。一刻も早く覺醒する彼女を見たい、恐ろしい夢魔を追ひ拂つてしまひたいと、そればかり念じてゐました。彼女はもう身動きはしないがやはり呻いて、何かぶつ／＼いつてゐた、と思ふと突然に男の名——しかも「ジャン」といふ私の名前を判然呼びかけたのです。

私はぎよつとしました。しかし彼女は夢でも見てゐるらしく、つゞいてこんなことをいひました。

「心配しないで、ね……わたし平氣よ……」

サア今度は、此方が平氣でゐられない。

彼女が覺醒しないで、そのまゝ私の腕に死んでゆくかも知れないといふ心配よりも、讒語の中で兩人の祕密をいひ出しはせぬかといふことが、むしろやうに恐ろしくなつて來ました。

やがて、彼女はほんたうに危つかしい讒語をはじめました。私ははらくして、

「院長、麻酔が十分でないやうです。」

「何かしやべつたつて……構はんぢやないか……もう暴れアしないから大丈夫だよ。」

そのとき、女ははつきりと聲を張りあげて、

「わたし平氣よ……貴方がついてゐて……眠らせて下さるんですもの……」

と一語々々を明瞭にいつてのけたのです。私は更にクロロフォームを四滴、五滴とつゞけざまにマスクへ垂らして、それを女の顔へひしと押し當てました。彼女のしどろもどろな聲が、私の手でしつかと抑へつけてゐる布へ打つかつて來ます。

「わたし眠るのよ……あら、鐘が聞えるわ……今に癒つたら、また兩人で、散歩をさせうね……」
私はもう夢中でした。隣室で、多分戸口に耳を押しつけてゐた彼女の良人がそれを聞いたとらうし、

他の人々も感づいたにちがひないと思ひました。彼女は不斷ごく慎ましくて、幸ひに只の一度もそんな浮き名を立てられたことがなかつたけれど、今度はけちがつくだらうと思つて、慄然としました。何にしても、もつとよく麻酔らせて、彼女を黙らせなければならぬので、私は矢つぎ早にクロロフォームを垂らしました。マスクがだらくに濡れて、指先にしつとりと重さを感じるぐらゐでした。

「會ひませうね……晩に……二人つきりよ……そしたら、また抱擁してね……」

まだやつてゐます。私は頭がぐらくぐつとしました。今度は何を云ひだすか知れたもんぢやない——さう考へるといよく堪らなくなつて、また一滴々と藥液を垂らしました。自分でも夢中で何をやつてゐるかわかりませんでした。

ふと氣がつくと、壘が空つほになつてゐます。サア大變、麻酔劑の量が多すぎた。愕然としてマスクを投げだし、あわて、女の眼瞼をあけると瞳孔が散大して、虹彩が殆んどなくなつてゐるではありませんか。私は「待つた！」と叫ぼうとしたが、言葉が咽喉に塞へて出て來ません。

その瞬間に、院長が、簡單だけれど心配さうな聲で、

「はてナ、血壓が馬鹿に低くなつたぞ。」

と、いきなり私を押し除けて、患者の顔へ身をかがめると。

「呼吸が止まつてるぢやないか……酸素吸入か……エーテルを……早く……」
 けれども、もう手遅れでした。可哀さうに、彼女はぐつたりと仰のけに首を垂れ、その碧眼は、眼
 瞼をあけられたまゝ、きよとんと私の方を見てゐます。

われ／＼は有らゆる手段をつくしたけれど、何の効もありませんでした。麻酔死——あの恐ろしい
 麻酔死といふやつが、彼女を私の手から永久に奪つてしまつたのです。』

かう語り終つて、ドクトルは五分間もぢつと黙想に沈んでゐたが、やがて次のやうにつけ加へた。

「かうした事故はしば／＼起るもので、誰だつて、絶対に麻酔劑の危険がないといふことは云へるも
 のぢやありません。が、あの場合、私が彼女の戀人でなくて、冷靜に仕事の出来る立場にあつたなら、
 そして、彼女の生命を自分の手に握つてゐるといふ重大な責任と、彼女を破滅させる恐ろしい秘密を
 讒語に聞くといふ、二重の苦悶で頭が惑亂することがなかつたならば、私は決して彼女を死なせはし
 なかつたでせう。』

それつきりドクトルは黙りこんだ。

冷たい秋風が、濡れた窓硝子をはたはたと鳴らしてゐた。そして、その秋風に誘はれて來たやうな
 一脈の哀愁が、しんみりと室中に沁みわたつた。

マダム・シヤリニは肱掛椅子の背にぐつたりと頸を凭せて、夢見る女のやうに、ほんやり空間を見
 つめてゐた。

人々はその晩に限つて、常よりも早く散り／＼に歸つて行つた。

幻想

乞食は、その日、辻馬車の扉を開け閉てして貰ひためた僅かの小錢を衣囊の底でしつかと握り、寒さで青色になつて、首をぢめて、身を切るやうな寒風を避ける場所を探しながら、急ぎ足の人々とともに往來を歩いて行つた。

すつかり草臥れてしまつて、「どうじや一錢」を云ふさへ憶劫だし、手をのべたくても、手套なしの手は我慢にも衣囊から出せないほど凍かんでゐた。

横つちよに吹きつける粉雪が髭にたまり、頸筋へ溶けこむのにも氣づかずに、彼はひたすら或る瞑想にふけつた。

「たつた一時間でいゝから、金持ちになりてえなア。さうすると、おれは何を措いても馬車を一臺買ふぜ。」

彼は立ちどまつて、思案ありけにちよつと首をふつたが、

『さて、それから何を買はうか。』

と心に問うてみた。さまざまな榮耀榮華の幻影が後からくと頭にちらついた。が、詮じつめると、どれもこれも缺點があつて面白くなかつた。その度ごとに彼は肩をゆすぶつて、

『いや、こいつも駄目だ……して見ると真正の幸福つてものは無えもんだなア。』

そんなことを考へながら、とほとほ歩いてゆくと、或る家の軒下にもう一人の乞食がぶる／＼慄へながら立つてゐるのが眼にとまつた。

その乞食はしかめつ面をして、手をさしのべて、

『お助けなされて下さりませ、お願いでござります……どうぞや、どうぞ……』

と呻つてゐるけれど、聲があまりにかほそいもんだから、街の物音にかき消されて些しも人の注意をひかない。

傍には、泥まみれになつた惨めな雑種犬が一疋、身をふるはせて微かに吠えながら、一生懸命に尻尾をふつてゐた。

前の乞食はそこに立ちどまつた。犬は主人の同類がやつて來たのを見ると、嬉しがつて、少し元氣

幻滅。此の裏

よく吠えて鼻頭を摺りつけるやうにした。で、乞食は注意ぶかくその犬の主人の様子を見ると、ひどい襦袢を着て、破れ靴を穿いて、あはれな手首は寒さでぶす色になり、眼を閉じた顔は眞蒼で、胸には「めくら」と書いた灰色の板をぶらさけてゐた。

盲乞食は人の立ちどまつた氣配がすると、哀れつほい聲を振りしほつて、

「お助けなされて下さりませ、旦那さま……哀れな盲でござります……」

前の乞食は身じろきもせずに、そこに突立つてゐた。

往來の人々は顔を背けてさつさと通りすぎた。温かさうな毛皮の外套を着こんだ一人の貴婦人が、定服の召使に傘を翳させながら、その廣い戸口から出て來たが、乞食どもを見るとマツフで口を庇ふやうにして、素早く拾ひ歩きをして、待つてゐた馬車の中へすつと消えてしまつた。

盲は例の單調な哀願をつづけた。

「お助けなされて下さりませ……どうぞ一錢與つて下さい……」

しかし誰一人振りむきもせなんだ。暫くして前の乞食は、自分のかくしから幾枚かの銅貨を摘みだして、盲乞食にくれてやつた。犬はそれを見ると嬉しうに吠え立てた。盲は貰つた銅貨をばふるへる指に握りしめて、

「お難有うござります、旦那さま……お難有うござります……」

乞食は「旦那さま」といふ敬稱を聞くと、

「おれは旦那さまぢやねえんだよ、兄弟。お前と同じ慘めな乞食さ。」

と口まで出かゝつたのを、ふと思ひかへして引つこめた。そして自分がこんな場合に散々聽かされてゐる言葉で答へた。

「いや些しばかりでお氣の毒だな。」

「恐れ入ります、旦那さま。お寒いのに、わざ／＼お手をお出しなすつて……お難有うござります。」

こんな日は、私のやうな病人はまことに難澁いたします。その苦しみといふものは、とても／＼お話しになつたものぢやござんせん。」

乞食は聞いてゐるうちに、あゝ氣の毒なといふ感じが胸一杯にこみあけて來た。

「わしは解つてゐる。よく解つてゐるよ。」

自分以上に悩んでゐる者を見た彼は、もう自分の貧苦などをうち忘れて、

「お前は生れつき眼が見えないのか。」

「いゝえ、齡を老りしだいに悪くなりましたので、お醫者は老齡のせんだといひます。白内障とかい

ふ眼ださうでございます。けれど、老齡のせるばかりではございません……あまり度々不幸な目に遭つてあまり酷く泣かされたせいでございます。』

『ぢや、随分不幸つゞきだつたんだね。』

『はい、旦那さま、一年のうちに女房と、娘と、男の子を二人死られました。かうして私を愛してくれるべき可愛い者達にすつかり先死たれ、おまけに大病に取憑かれて、すんでのことに彼世へ行くところでございます。幸ひ癒りはしましたものゝもう體が弱つて仕事が出来ませんので、年中貧乏で不自由をしてをります。何日も物を食べずに暮らすことが珍らしくありません。昨日少しばかりの麵麴屑を、この犬と二人で預けて食べてから、まだ何も口に入れません。今旦那さまに戴いたこのお錢で、今晚と明日の食べものを求める積りでございます。ハイ。』

乞食はこの旨の述懐を聴きながら、自分の衣囊の中で銅貨をいぢくつてゐた。手探りで數へるとそれが四十八錢あつた。

『来いよ、わしと一緒に。此處はあんまり寒いから、そこいらへ行つて何か御馳走しよう。』

『それは、旦那さま、どうも恐れ入ります。』

と盲は嬉しさに上氣して、吃りくいつた。

『さア出掛けよう。』

乞食は、盲の手を執つて、自分の服の濡れてゐることや、薄つぺらなことを覺られぬやうに用心しながら歩きだした。犬は首をあけ、耳をしゃんと聳て、雜間の中を進んで行つた。交通の頻繁い街を横ぎるときなどは、鎖をピンと張るやうにして、機敏に主人を導くのであつた。

彼等はかうして稍しばらく歩いて行つたが、やがて裏街の或る小さな飲食店の前に立ちどまると、乞食は戸をあけて、盲に聲をかけた。

『さアお入り。』

暖爐の前の食卓を擇んで盲を坐らせ、自分もその前に腰をかけた。

四五人の勞働者風の客が、黙りこくつて、めい／＼に小さな厚い皿のものを食るやうに搔込んでゐた。

盲は犬の鎖を解いてやつて、爐の方へ手をかざしながら、ほつと溜息をして、

『大そう氣持のいゝところでございますね。』

乞食は女中を呼んで、盲のために肉菜汁とふかし肉を誂へた。

『そして旦那は何を召上ります？』

女中が訊くと、

『わしは何も要らない。』

やがて、ふん／＼美味さうな匂ひのする肉菜汁と、肉の皿がはこばれた。盲は無言で緩くり／＼それを平らけた。乞食は傍でちつとその様子を見てゐたが、自分の食料として持つてゐた小さな麵麩片をば、食卓の下でそつと割つて犬にやつた。そして、盲が肉菜汁と肉をすつかり食べ終つたときに、彼はいつた。

『何か一杯お飲み。さうすると脚に力がつくぞ。』

それから間もなく女中を呼んで、

『ねえさん、何程。』

『四十四錢頂きます。』

彼はその勘定を支拂つて、別に四錢のチップを女中にくれて、それから盲に腕を貸した。

やがて街へ出ると、彼は訊ねた。

『お前はこれから遠方へ歸るのか。』

『こゝは一體何處でございませう。』

『サン・ラザール停車場の近所だよ。』

『では、可成り遠うございますな。私は河向うの或る小舎に寝泊りしてをりますので。』

『そんなら途中まで送つてあげよう。』

『難有うござります。御親切に、どうも難有うござります。』

『いや、いや、そんなに禮をいふほどのことでもないさ。』

何といふ理由もなく、彼は幸福を感じた。むしろやうに嬉しい氣持になつた。何が愉快だつてこれほど愉快を感じたことはなかつた。彼は歩きながら恍惚と夢見るやうな思ひに浸つてゐた。自分こそ食べ物もなく、今宵の寢所にも困つてゐる體であることも忘れ、その上に困苦も、襤褸服も、自分が乞食であることすらも忘れてしまつたのであつた。

彼はとき／＼盲の方へ振りかへつては訊いた。

『わしの足が早すぎはしないか。随分草臥れたらう。』

その度に盲はひどく恐縮して、

『ど、どういたしましたして、旦那さま。』

そんな風に挨拶されると、乞食はまた嬉しくなつて莞爾々々した。彼は急に金持ちの慈善家になつ

たといふ不思議な感じがすると同時に、此方をさう思ひこんでしまつた相手の幻想によつて探ぐられるのであつた。

濕つほい河風にあたると、盲は早くも河岸へ來たのを感じて、

『こゝまで來ればもう一人で歸れます。犬がついてゐますから大丈夫です。』

『さうかい。では、氣をつけて行けよ。』

と乞食は寛濶な口調でいつた。

彼は今、或る妙な思ひに浸つてゐるのだ。その妙な思ひといふのはかうだ——おれがあんなに度々あんなに熱心に憬がれた夢が、今實現された。おれはつひに申し分のない幸福な心持を味はつたのだ。不斷狂人になるほど希つてゐたやうに、實際の金持になつたり、美味いものをたらふく食つたり、美人から戀はれたりするよりも、今のこの歡びの方がどんなに尊いか知れない。この盲人は、同じ仲間の手を引かれてゐるとは夢にも知らないで、おれのことを親切な金持ちの旦那さまだと信じきつてゐる。して見ればおれは、ほんたうの金持ちになつたも同様だ。何といつたつて、今夜のやうな深い混りつ氣のない歡びといふものは、おれとしては、二度と再び味ふことの出来ない心持なんだ——しかし、かうした大歡喜も長くはつゝかなかつた。ふと氣がつくと、彼はもう現實にかへつてゐたのである。

『では、こゝでお別れだ。』

二人は恰度橋の中央へ來てゐた——乞食は立ちどまつて、もしや銅貨一枚でも残つてゐはしないかと思つて衣囊へ手をやつたが、もう空つぽだつた。

彼は盲とかたく握手をした。盲はもう一度感謝をくりかへして、

『お難有うござります、旦那さま。どうぞ御姓名を伺はせて下さい、貴方さまの御幸福をお禱りするために。』

『名乗るほどのこともないさ。寒いから早くお歸り。わしこそお蔭で大變い、心持になつたよ。左様なら。』

すた／＼歸りかけたが、やがて立ちどまつて、橋の上から漫々たる河面の闇をぢつと覗きこんだ。

『左様なら。』

一聲高くさういつたかと思ふと、彼は不意に欄干へ上つた——つゞいてざぶりッ——とはけしい水音。

『身投げだ。救ける。』

「橋からぢや駄目だ。」

「河岸へ行け、早く〜。」

大勢の人がたちまち右往左往に駆けだした。盲乞食はその騒ぎに揉まれながら、
「どうしたんですか。何かありましたか。」

問ひかけると、

「乞食が河へ飛び込みやがったんだ。」

威勢のいゝ彌次馬が、擲り飛ばしさうな勢ひでかう吠鳴りながら、どんく〜駆けて行つた。
すると盲乞食は氣倦さうに肩を一つゆすぶつて、獨りごとをいつた。

「其奴なんかは、とにかく勇氣があつたんだな、それだけの勇氣が。」

それから彼は空でも見上げるやうに顔を仰向け、背中を丸めて、靴の爪尖で犬をさぐり、杖で地面を叩きながら、とほとほと歩いて行つた——何も知らずに。

犬 舎

十一時が鳴ると、アルトヴェル氏は麥酒の最後の一杯をぐつと飲み乾し、ひろけてゐた新聞をたたんで、うんと一つ伸びをやつて、欠伸をして、それからゆつたりと起ちあがつた。

吊り飾燈の明るい光りは、彈丸や藥苞の散らばつてゐる卓布の上をあかく〜と照らしてゐた。そして暖爐のそばには、肱掛椅子に深々とうづまつた婦人の横顔がくつきりと影繪のやうに見えてゐた。

屋外では、はげしく吹き荒れてゐる風が窓をゆすぶり、しぶきはその窓硝子を騒々しく叩いて、ときん〜犬舎の方から犬どものウ、と唸る聲が聞えた。犬どもはその日朝から終日騒ぎ立つてゐたのであつた。

その犬舎には、四十頭からの猛犬が飼つてあつて、口元の不氣味な巨犬や、ヴァンデイ産の毛のもじやく〜した粗毛獵犬など、いづれも獵に伴れてゆくと、獐猛な勢ひで野猪に喰ひつく奴等である。

そして夜になると彼奴等の猛しい唸り聲を聞いて、遠近のさかりのついた野良犬や、狂犬どもが盛んに吠え立てるのだ。

アルトヴェル氏は、窓掛をあけて、眞暗な庭園の方を覗いてみると、濡れた樹々の枝は刃のやうに光り、秋の木の葉が風に吹きまわられて、ばらばらと壁を打つた。

「厭な晩だな！」

彼は呟くやうにいつた。そして両手をかくしに突込んだまゝ、五六歩あるいて暖爐の前に立つて、燃えさしの薪を靴の爪尖で踏みつけると、眞赤な焚きおとしが灰の上にくづれて、新しい焔がまつすぐに尖がつて燃えあがつた。

夫人は身じろきもしない。薪の火光は彼女の顔を照らし、頭髮を金色に染め、その蒼白い頬を生々した薔薇色に見せ、彼女の周囲をちよろ／＼とダンスをやりながら、額や、眼瞼や、唇のあたりに氣まぐれな陰影を投げかけた。

一時ひっそりしてゐた獵犬が、また吠えだした。その吼聲と、風の呻りと、樹々を打つ雨の音を聞く、静かな室の内部が一しほ暖かさうに思はれ、そこにちつと黙してゐる婦人の姿が、何となく懐かしい感じをさへも與へるのであつた。

アルトヴェル氏は少し變な氣持になつて來た。獵犬どもの暴れもがく聲と室の暖もりとで唆られた或る情慾が、だん／＼體內にひろがつて來た。で、彼は夫人の肩を軽く押へて、

「もう十時だよ、寢ようぢやないか。」

「えゝ。」

彼女は残り惜しさうに椅子を離れた。

アルトヴェル氏は、暖爐の薪架に片足をかけて、もぢ／＼しながら傍をむいて低聲でいつた。

「お前の寢室へ行つていゝだらう。」

「駄目よ、今夜は。」

アルトヴェル氏はしかめつ面をして、しかし一寸腰をかゝめて、

「御隨意になさいだ。」

彼は兩脚をひろげて肩で暖爐棚へもたれたまゝ、夫人の出て行くうしろ姿をぢつと見送つた。夫人はいかにも優美な、なよなよした身のこなして、衣物の裾がさゝ波の動くやうにさやく／＼と絨毯の上を這つていつた。それを見てゐると、彼は癪が高ぶつて來て、あらゆる筋肉が鯁こぼるのを感じた。アルトヴェル氏は元々夫人に對する嫉妬のために、此邸で彼女を嚴重に監視してゐるのであつた。

彼は以前妻といふものについてこんな理想を描いてゐた——妻は何でも良人たる自分と二人つきりで暮らすことを楽しんで、よく自分の望みに添うて、いつも機嫌よく、黙つてあらゆる要求を受入れてくれなくてはならぬ。自分が日中獵に出て、手が寒さで藍色になり、さすがに強健な體もぐたくに疲れて、日が暮れてから野原や沼地の清氣と、乗馬や獲物や獵犬の臭ひを満身に浴びて家に歸つて來たならば、妻は優しい言葉でいそぐと出迎へて、良人の接吻をうけるために熱い唇を向ける。さうして、良人は吹き荒ぶ風を物ともしずに終日馬上に駆けめぐり、或は冬の乾ききつた大氣を息づまるほど満喫し、或るときは徒歩で畝や畦を涉り、樹の枝に髭を撫でられさうな森林の中を、大驅けで馬を飛ばしたりした後で、戀の長い夜が來ると、互ひの愛撫で魂も蕩けるやうな悦樂をしみぐと味はふことが出来るのだ——

ところが、理想と現實とはかうも違ふものか。

戸口がしまつて、夫人の寢音が廊下の向うへ消うてしまふと、彼も仕様事なしに自分の寢室へ行つたが、やがて寢床に入つてから、讀書でもしようと思つて、一冊の本を引きだした。

雨の音が一きは騒がしくなつて、風が煙突に呻り、庭園の方では木の枝の斷切れて飛ぶ音がする。

それに、獵犬どもが間斷なしに吠え立てるので、暴風雨の叫びや樹々の軋る音も氣壓されるくらゐだ。

彼奴等が巨大な體で打突かるものだから、犬舎の扉が今にもはち切れさうな音がする。

彼は窓を開けて、大聲で唸鳴りつけた。

『いらつ。』

すると犬どもは少しの間鳴りを鎮めた。

冷い雨走がさつと顔へかゝると、彼は清々しい氣持になつた。が、大がまた吠えはじめたので、彼は拳骨で鐙戸をどん／＼叩いて、

『こらつ、靜かにせい。』

そのとき、ふと或る聲を聞いたやうな氣がした。それは唄とも、囁きとも、響きともつかぬ聲であつた。と、こんなときに犬どもを滅多打ちに打ち据ゑて、拳の下に肉塊の顛へを感じたいといふ欲求が、むらく／＼と込みあけて來た。

『ようし、待つてゐろ。』

窓をびしやり閉めきると、鞭をさけて廊下へ出た。

莊邸中の者が寢靜まつてゐるといふやうなことは、一向氣にも止めないで、大跨にどん／＼歩いて行つたが、夫人の寢室の前へさしかつたときは、彼女の眠りを妨けまいとして歩調をゆるめて靜か

に歩いた。ところが、戸の下の隙間から燈りが洩れてゐて、室内に人の聲音——やはらかい絨毯でさへも消すことが出来ないほど慌てた聲音がしたので、彼は聴耳をたてた——やがてその聲音が止んで、燈りが消えた。

彼は戸の前にちつと佇立してゐたが、ふと或る疑念におそはれて、そつと聲をかけた。

「マリー・テレーズ。」

答へがない。

今度は少し高く呼んでみた。好奇心——いや、判然と云ふのを憚る或る疑ひで、彼は一瞬間、呼吸もつげなかつた。

戸を鋭く二度叩くと、室内から、

「誰？」

と答める聲。

「わしだよ。此所を開けなさい。」

戸が細めに開いて、一陣の生温かい温氣が、婦人部屋に特有な匂い匂ひの中にエーテルのらしい臭氣をまじへて、むつと彼の顔へ吹きつけた。

「何か御用ですの。」

室内の聲が問ひかけた。

黙つて入つてゆくと、夫人が恰度闕際に立ちはだかつてゐたものだから、その呼吸が彼の顔にかゝり、衣物のレースが彼の胸にふれた。衣囊を探したけれどマッチがないので、

「燈火を點けなさい。」

と彼は命じた。夫人はすぐにランプを點けた。室内の様子を見ると、窓にはすつかり窓掛がおろしてあつて、絨毯の上には襟巻が一本落ちてゐて、寢床の眞白な廣布團は、はだけたまゝになつてゐた。そして一人の男が、暖爐の傍の長椅子の上に横はつてゐたが、その男は襟をひろけたまゝ、頭をぐつたり下け、両手をだらりと垂れて眼をつぶつてゐた。

アルトヴェル氏は、夫人の手くびを押へつけて、

「こら、何といふ汚らはしいことだ。わしに情ない理由がわかつたぞ。」

夫人は良人の手を振り離さうともしないで、ぢつとしてゐた。その蒼ざめた顔には些しも恐怖の陰影がない。彼女はしやんと顔をあけて、

「貴郎は何を仰しやるんです。」

アルトヴェル氏は夫人を突離すと、現ない男の上へのしかつて、拳を振りあげながら呶鳴つた。
 『此奴、他妻の寢室へ忍びこんだ姦夫……や、何といふことだ、わしの友人でしかも子供のやうに齡の若いこの男を……淫婦奴が。』

すると、夫人は良人の言葉をさへぎつて、

『この人、何でもありませんわ。』

『はア、そんなことでわしが欺せると思ふか。』

彼はぐつたり横はつてゐる男の襟くびを攫んで、ぐいと手許へ引きよせた。が、顔は眞蒼で、唇がゆるんで、白い齒並や齒齦がむき出てるばかりでなく、手をふれると異様な冷さを感じたので、愕然として突離した。すると男は、體がどたりと椅子へ仆れる拍子に、額が他愛もなく二度もその脰掛に突きあたつた。

アルトヴェル氏は堪へがたい憤りを夫人の方へ向けた。

『この有様はどうしたのだ。さア云つて御覽。』

『何でもありません。』と彼女は説明した。『わたしが寢床へ入らうとしてゐますと、廊下で何だか蹠蹠けるやうな蹠蹠音がして、間もなく「戸を開けて、戸を開けて。」といふ聲がするものですから、きつと

貴郎が御氣分でもおわるいかと思つて、戸を開けますと、この人が入つて來ました。いえ、仆れこんだのでございます。何だか急に心臓がわるくなつた様子ですからこゝへ臥かしておいて、それから貴郎を探しに行かうと思つてゐるところへ、丁度貴郎がいらしたのです。それだけでございますわ。』
 アルトヴェル氏は倒れてゐる男をちつと覗きこんでゐるが、やがて冷靜に立ちかへつたらしく、屹然した語調で問ひかけた。

『この男が入つて來たことを、家の者は知るまいな。』

『誰も知りません、獵犬があんなに騒いでゐるものですから。』

『それにしても、此奴何でこんな時刻にやつて來たんだらう。』

『不思議でございますね。だけど、何ぢやないでせうか、急に氣分が悪くなつたものだから、この人は獨りほつちで、不安になつて、助けて貰ふために來たのではないでせうか。今に氣分が癒つて物が云へるやうになつたら、自分で説明するでせう。』

『多分お前のいふ通りだらう。が、その話はこの男の口からはもう聞けないんだよ。此奴死んでしまつたからな。』

夫人はそれを聞くと、齒の根も合はぬほどふるへだして、吃り／＼いつた。

「そ、そんなことがあるものですか、この人が。」
 「いや、死んでゐる。」

さういつて、アルトヴェル氏はちよつと考へこんでゐたが、やがて前よりも落ちついた聲で、
 「しかし、よく考へると何も不思議はないさ。この男の父親も、叔父も、こんな風に突然亡くなつたのだ。心臓病の血統なんだよ。急激な感動——非常な歡び——さうしたことに気づくわすと、何といつても人間は脆い生物だからなア。」

と、椅子を引きよせて暖爐の方へ手をかざしながら、

「だが、それだけの單純な出來事だとしても、他の男が夜中にお前の寢室で死んだといふ事實は打消すわけに行かんぢやないか。」

夫人は兩手に顔をうづめたつきり、何の答へもない。

「今のお前の話でわしの疑念は解けたとしても、他人にまでそれを信じさせることは出來ない。召使どもは勝手な憶測で何のかのと云ひふらすだらう。さアさうなると、お前の不名譽だけでは濟まん。わしの顔にもかゝるし、家名にも疵がつくといふものだ。どのみち放擲つておける問題ではないから何とか方法を考へにやならんが——さうだ、わしに一つ考へがある。今夜のことは幸ひお前とわしの

外に知つた者はなし、此奴が入つて來たところを見かけた者もないから、誰も勘づく筈がない。そこで、お前ランプを持つてわしについて來い。」

さういつて、彼は屍體を抱きあげたが、

「さアお前が先きに立て。」

「貴郎、どうなさるの。」

「心配せんでもいい。先きへ行つてくれ。」

兩人は徐々と階段を降りていつた。夫人のかざしたランプの灯が壁にちらついた。アルトヴェル氏は屍體を抱へて、注意ぶかく一步々踏みしめるやうにして階段を降りた。そして庭園の方へ出る戸のところで、

「音がしないやうに此戸を開けなさい。」

夫人が戸を開けたとたん、さつと吹きこんだ風でランプは消え、しぶきが横つ倒しに來ると、熱した火屋が破裂してその破片が闕に散つた。

仕方がないからその消えたランプをそこへ置いて、それから庭園へ踏みだした。砂利が靴の下でざく／＼鳴つて、篠つく雨が兩人を叩いた。

「徑が見えるかい。見える？ そんならわしの傍へ来て、屍體の足を持つてくれ。重いぞ。」

兩人はしばらく黙つて歩いた。やがてアルトヴェル氏は、とある低い戸口の前に立ちどまると、

「わしの右の衣袋を探してくれ。鍵があるだらう。それだ……それをだせ……さア足を離していよ。まるで墓場のやうな暗さだ。鍵穴が分るかい……いよか……分つたら鍵を廻せ。」

犬どもはその音を聞きつけると、亢奮して俄かに吠え立てた。と、夫人はびつくりして跳びのいた。「怖いかな……さア鍵を廻せ……もう一度……それでいよ……退いてくれ。」

彼は扉に膝をあてゝぐいと押し開けた。獵犬どもが外へ出られると思つてむやみと脚へ打突かつて来るのを、彼は靴で蹴かへしながら、突然ヤツといつて屍體を頭上に高く擔しあげたと思ふと、一つはすみをつけて犬舎の眞只中へ擲と投げこむが早いか、ぴしやり扉を閉めきつた。

猛犬どもは物凄い唸りと、もに一齊にその餌食に跳びついた。と、

「助けてくれい。」

一聲けたゝましい叫びが獸等の咆哮の中から聞えて來た。それは實に、この世のものとも思はれぬ凄惨な聲であつた。

あとにはまた獐猛な唸りが入り亂れた。

夫人は何ともいひやうのない恐怖に襲はれた。そして、稻妻の閃めくやうにその真相がわかると、狂ほしい眼付をして、矢庭に良人へ跳びかゝつて、めちやくちやに顔を引掻きながら、

「悪黨……あの人は死んでゐたんぢやない……死んでゐたんぢやない。」

アルトヴェル氏は突立つたまゝ夫人を手の甲で押しつけて、蹶るやうな口調でいつた。

「左様だとも。」

孤獨

その年老つた事務員は、一日の單調な仕事に疲れて役所を出ると、不意に蔽かぶさつてしだいに深くなつてゆく、あの取止めもない哀愁に囚はれた。そして失へる希望と仇に過ぎた光陰を歎く舊い悩みを喚びおこしながら、珍らしくも、ほんやりと門前に立ちどまつた。それまでは、毎日脇目もふらずに宿へ歸つてゆくことが、二十五年もつゞけて来た習慣だつたのに。

街は賑はつてゐた。店舗にはみな煌々と燈りがついて、通りかゝる女たちも、人も、物も、すべてこの春の黄昏の幸福な安逸と、生の樂しさを物語つてゐた。

老事務員は考へた。

『おれも今夜は人並に楽しんでみたいな。』

金は衣囊にある。宿へ歸つたつて、誰も待つてゐてくれる者もないのだ。

彼は辻馬車を呼びとめた。

『ボア公園へやつてくれ。』

馬車はシャンゼリゼーをまっすぐに驅けて行つたが、幾組となく睦まじく連れだつて歩いてゐる男女のさゝめきが彼の耳に聞え、多くの馬車が彼の馬車とすれちがつた。彼は初めてさうした華やかな群の中へ入つたのだが、何といふわけもなく、沁々寂しさと遺瀨なさを感じた。それは、役所から閑かな街を通つて行く宿へ歸つて行くときよりも、もつとく深い寂しさ、遺瀨なさであつた。

ボア公園で馬車を降り棄て、やがて或るレストオランへ入つて空席をさがしてゐると、給仕がやつて来て、

『お二人の御席でございますか。』

『いや、僕は一人だ。』

『では、どうぞ此方へ。』

燈りの漲つてゐる賑やかな廣間であるにも拘らず、彼は何だか遠く懸離れた、暗いところへ島流しにでもされたやうな氣持がした。歡樂は、彼の坐つてゐる小卓から數歩のところまで立ちどまつてゐるらしかつた。四邊を見ると、他の連中のいかにも樂しさうなのが不思議だつた。

陽氣に躁ける齡でないことは、自分にもよく解つてゐた。そのくせ、昔の思ひ出の中にそれを探し求めたつて、彼の思ひ出には、今宵目のあたりに見るがごとき光景に似寄つたものは何もなかつた。彼は上の空で食事をしながら、

『おれは只の一度だつて楽しい思ひをしたことがない。おれには青春といふものがなかつたんだな。』
そんなことを考へた。

それから頰杖をついて、きよとんとした眼付をして、取止めもない思ひを辿つてゐるうちに、空気が人いきれで重くなつて、人々のさ々めきや、皿の音や、酒杯に肉又の觸れる音や、さては煙草の煙りのために朦朧と燈りの暈つた中から音楽がはじまつた。

その音楽は、どうも度々聴いたことがあると思つた。何處で？ それははつきりしないが、兎に角それを聴いてゐると、曲の名も歌詞も知らぬながらに、その折返の一つが早速お馴染になつて、思はず口吟みたくなる類のものであつた。

突然、いろいろな幻影が想像にうかんで來た。まるで別人になつたやうな氣持がして、魂ひの奥に眠つてゐた數々の野心が急に目ざめ、感覺が極めて鋭敏になり、そして明るい考へが頭をもたけて來た。彼は思つた——おれは有力だ——おれは強いぞ——

さう思つてゐるうちに、ふと或る切願に彼は囚はれた。打解けてみたかつた。話相手がほしかつた。それは、肉體も魂ひもしつくりと融け合つて、細君であると同時に情婦らしい感じのする女、つまり理性と享樂を兼ねてゐて、沁々と話がわかつて、夜は温々とした室で、打解けた寢床に心ゆくまで語り明かすやうな女——を探し求める心であつた。彼は空想でさうした漠然たる、しかし已みがたい欲求に思ひ耽つてゐた。

いつの間にか音楽が歌んで燈りが暗くなつたので、彼はふと眼をあけると、何だか非常に遠いところから歸つて來たやうな感じがした。先刻まであんなに明るく輝いてゐた廣間も今はどうしたことかめつきり暗くて、汚くさへ見えるのだ。眞白できれいだつた卓子掛は薄よごれて、半ば片づけられた食卓には、盛花がしをれ、皺くちやなナフキンが床にちらばつてゐた。今、最後の男女づれの客が出て行くところであつた。

彼も起ちあがつて勘定をはらつてそこを出たが、ひどく倦怠いやうな氣持になつて、けつそりしてゐた。

暫くの間何處といふ當てもなく歩いて行つた。暗さは一層彼を寂しくした。ひつそりとした夜の静けさの中を歩きながら、彼は何だか厭な氣持になつた。やがて公園の門をぬけて、明るい雜圍の中へ

出ると、漸と倦怠をふり落したやうに思へたが、孤獨の感じだけはどうすることも出来なかつた。彼は、ぞろぞろ連れだつて高聲に語りながら行き過ぎる、見も知らぬ人々の上に、妬ましうな視線を投じた。そんなことは、彼としてそれまでに曾てないことであつたのに。

彼は友達も持たないし、情婦が出来たこともなく、一人ほつちで世の中をわたつて来た男だ。元からそんな風で、嚴格だつた青年時代から、利己主義や習慣や偏執に支配される齡になつても、結婚をしないといふ決心に變りはなかつた。かうして彼は、自分に接近してはまた遠のいてゆく人々の一人一人を眺めて来たのだ。不和になつたわけではないが、彼等は新しい氣苦勞や新規な楽しみが出来ると、彼を去つてその方へ移つて行つたといふだけのことだ。こんな風で友達がしだいに疎くなつて行つた。彼も、もとは友人の不在の静かでないと思つてゐたけれど、今ではそれが寂しさそのものとなつたのである。

大時計の傍を通るとき、時間を覗くと恰度十二時で——人通りが稀になつて、どこのカフェも店仕舞をやつてゐた。外氣が冷々として、細かい雨が降りだした。それがまた冷いので彼はぞつと寒氣を覚えながら、歩調を早めて宿の方へ歸つて行つた。

彼は、歩きながら、自分の將來をどうしようかと考へた。しかもその想像の大部分は、何も重大な

問題ではなくて、些末なことばかりであつた。まづ食堂は、雪白な食卓掛で卓子を蔽ひ、天井には節燈をつるして、そこから大きな丸い明りが落ちるやうにすること。夜は暖爐のそばで新聞を讀むこと。左右に幕をあける式の寢床。そして家の中は出来るだけ陽氣にして、「つまらない」近親を大勢集めること。つまらないといつても、さうした者達を缺くことの出来ないのが即ちその幸福な場所、「家庭」といふものなんだ——

彼は低聲で獨りごとをいつた。

『どうせ立直しをやるなら、おれは細君を持たう。細君を持てば子供が出来る。さうすると、家へ歸つてもそこは愉快な住居で、おれの家族——おれを愛してゐる者達がおれを待ちかねてゐて、ちやほやしてくれるんだ。』

ところが宿の前まで来ると、瓦斯が消えてゐて、街が眞暗だつた。彼は自分の室の窓を見あげたが、今まで浸つてゐた幻想の名残で、ふと其窓に燈りを探し求めるやうな眼付をしながら、肩をすほめて呟いた。

『さアお前の家へ歸つたぞ、憐れな老人！』

彼はそのときほど廊下を暗いと思つたことはなかつた。變な臭氣がそこらにたゞよつてゐた。それ

は食餘しや、穴倉のむつとする臭ひや、酒樽の微臭さであつた。

彼は徐々と階段を登つて行つて、ふと立ちどまつた。何階登つたか數へてもなかつたので、自分の昇框を通りこしはせなんだか？ さう思つて軒窓の明りで判断しようとしたけれどあまりに暗くて中庭の白壁さへ判断しないくらゐだつた。で、衣囊からマッチを出して振つてみた。

『畜生、心細いぞ。』

マッチ函をあけて、

『一本しか残つてゐやしない。』

手をかざして注意ぶかくそのマッチを摺つてみると、そこは六階目だつた。

『一階よけいに登つたな。』

階段を逆戻りして、戸の錠前へ鍵を突こんだとたんにマッチが消えて、再び眞の暗だ。

廊下から自分の寢室へ入つて行つたが、家具に突當るまいとして、そつと手をひろけたまゝ立ちどまつた。それから小卓へ行つてマッチ函を探ると、それも空つほなので、すつかり當惑した。

『どうしたらいゝだらう……マッチがない……下へ降りたつても店はもう仕舞つてゐる……燈りなしで寢床へもぐりこまうか……どうせ眠られやしまい。』

森閑とした寂寞が彼を押しつゝみ、たゞ時計のチクタクばかり、闇の中で忙しげに時を刻んでゐたが、彼にはその時刻もわからなかつた。

それまでは、どんなに悲しい時だつて、これほど痛切に孤獨を感じたことはなかつた。

燈りも點いてゐないこの惨めな室へ歸ると、遠い過去の種々な思ひ出が蘇へつて來て、直きにしんみりとした氣持になつた。

それはあまりに遠くて、消え／＼になつてゐるやうな思ひ出であつた。ごく小さい子供の時分には、両親の家で、密閉した室の中に温々と寢かされて、眠入る前に母親が接吻をしに來てくれるのを待ちかねてゐたものだが、時として、あまり咳でもすると、その懐かしい聲が隣りの室から呼びかけた。

『どうしたの、坊や。』

記憶の中のこの聲は、大變やさしい抑揚をもつてゐて、それをおもひ出すと、接吻でなごまされるやうな氣持がするのであつた。

しかるに今は、どんな感懷が彼の心を占めてゐるのか。

戀をさゝやく男女の群にまじつて、歡樂と華やかな雑鬧の中に數時間を送つた後、こんな眞暗な室へ歸つて獨りほつちになつてみると、自分といふものが可哀さうで、しみ／＼悲しくなつて來た。彼

は顔に両手を押しあて、しく／＼泣きだした。

それまで隠れてゐた或る悶えが、ふと疲れた頭に浮んで来た。そして、それは外から呼び醒されるのを待ちかねたやうに、恐る／＼口へ出てしまつた。

「おれが室を空けたつて誰も氣づきはせなんだ。探しに来てくれる者もありはしない。かうしておれは寝るのだ。」

それから彼は考へた。

「おれはもう老境に入つてしまつた。何をやつたつて駄目だ。家庭なんか持つまい。決して持つまい。死んだ後には何一つ残るんぢやなし、思ひ措くことも更がない。明日も、明後日も、また首輪をかけるられて、同じやうな日を送るのだ。そして遅かれ早かれ貧しい犬のやうに死んでゆかねばなるまい。人はおれの棺が通るのを見て、「會葬者もないこの死人はどんな人か」と怪しむだらう——それも瞬間だが——」

彼は悲しくなつて、しきりに泣いた。涙は止め度もなく髭を傳はつて唇へ流れこんだ。

しまひに疲ひれてしまつた。徹宵さうしてゐるわけにも行かなかつた。

彼はかゝみこんで寢床を開けた。が、棚の傍にあつた筈の椅子へ上衣をかけるつもりで其方へ行き

かけたとたんに、何かの道具に膝をしたゝか打衝けて、あまりの痛さにアツと聲をあけた。

壁に倚りかゝつて足を浮かしながら、

「おゝ、痛い、痛い。」

と叫びてゐるが、その痛みはやがて絶望に變つていつた。獨りほつちで、慰めてくれる者もないといふことが、千倍も辛く苦痛だつた。氣が遠くなりさうで、全身汗びつしよりになつて、手さぐりで椅子に觸るとぐつたりと腰をおろし、額を小卓へおしつけて、

「おゝ、痛い、痛い。」

その聲は空ろにひびいた。

當てもなく卓子の上を拂ふと、何か圓味のもものが冷りとふるへる手先に觸れた。彼はそのまま握りしめたが、それは毎晩傍へおくピストルだつた。そして不思議なことに、それを握つても、些しも恐怖を感じないので、むしろ氣が鎮まるのであつた。

握つてゐるうちに銃身が生温くなつて来て、いゝ氣持がした。晝間だつたら、不氣味な銃尾や凶々しい銃身など随分ぞつとする代物にちがひないのだが、今この暗闇と、孤獨と、惱みの中では、まさしく探し求めてゐるものに打つかつたやうな氣がした。で、單に涯しれぬ哀愁と倦怠のほか何の理由

もなく、彼はそのピストルを額へもつていつて、押しつけて、引金をひいた。
 棒をへし折るやうなバリツといふ音がした。
 と、一瞬間さわめいた室内は、すぐにまた静寂となつた。時計のチクタクもちよつと息どまつた
 が、又も忙しげに無限の彼方に向つて、例の小エゴイストの小刻みな歩みをつづけて行つた。

誰？

その日、私は遅くまで仕事をやつて、漸と卓子から顔をあげたときは、もう黄昏の仄暗さが書齋に
 迫つて來てゐた。私はそのまゝ數分間ちつとしてゐたが、ひどく根氣をつかつた仕事の後なので、頭
 がほうつと疲れて、たゞ機械的に四邊を見まはした。

室内のあらゆるものが、薄れゆく光線につままれて、一様の灰色に見え、物の形は朦朧にほやけた
 けれど、夕陽の最後の名残が箆笥や額縁の硝子へかすかに映つてゐた。さうして、書架の上において
 あつた一箇の髑髏が、くつきりと浮きあがつたやうに見えてゐた。

私は顔をあげたとたんに、偶とこの髑髏に眼をつけたが、その頬骨の尖端から、顎骨の不気味な角
 度にかけて、あらゆる細部がはつきりと眼に映つた。

すべてのものが暮れ足の早い陰影に吞まれてゆくのに、獨りこの髑髏だけは、徐々と確實に生命を

喚びかへして、看る／＼肉が付いて来るやうな気がした。齒の上に唇がかぶさり、眼窩に眼球が据つた。と、やがて不思議な幻覺の力によつて、一個の人間の顔がそこに浮びだした。そして、それが私の方を見まもつてゐるのだ。

その顔は、少し皮肉に口元を歪めながら、ぢつと私を睨みつけた。それは、我々が妄想の裡に見る漠然たる面影とはちがつてあまりにまざ／＼と、まるで現實の人間を見るやうなもので、私は思はず手を伸べて觸らうとすると、忽然、頬の肉が落ち、眼窩はもとの空洞となつて——薄い靄のやうなものが、ふんはりとその顔を押しつゝんでしまつた。と、それはやはり一箇の生命なき骸骨に過ぎないのであつた。他の骸骨とすこしも異るところがなかつた。

私は燈火をつけて、また書きものをつゞけた。それでも何だか氣になるので、變化を見た書架の上を二三度覗くやうにしたが、何時とはなしにその些細な興奮も消えると、またすべてを忘れて、仕事に没頭してゐた。

それから四五日経つた或る日のこと、私は外出したが、家の前で出合がしらに一人の青年とすれちがつた。その青年は私に途をゆづつてくれたので、私が會釋すると、青年も同じやうに會釋をかへしながら行き過ぎた。

が、何だか見覚えのある顔だ。知つた人にちがひない。先方でもきつと立ちどまつて私を見てゐるだらう。さう思つて後ろをふりかへつたが、青年は知らん顔で、ぐん／＼歩いて行つた。それでも私はぢつと立ちどまつて、彼が人込の中へ隠れて見えなくなるまでその後ろ影を見送つてゐた。「見違へたのだ。」と思つたが、その後からすぐにまた心に問うた。「何處だつたかな、あの顔を見たのは。何家ぞの客間か、病院か、それともうちの診察室だつたのか。いや左様でもない……」

多分直接に會つたのではなくて、誰か似た人と間違へたのであらう——かう決めてしまつて、そのことはそれつきり他の考へに紛れてゐた。いや努めて紛らすやうにした。といふのは、忘れようとしても、内實しきりにそれが氣になるからであつた。

どうも見覚えのある顔だ。凹んだ眼で、しかも嚴つく人を見据ゑる眼光、髭のない鼻の下、眞一文字にむすんだ口、角ばつた顎——それ等はあまりに著るしい特徴で、滅多に間違へることのあり得ないものだ。しかし、一體何處で見た顔だらう。その晩徹宵記憶をたどつたけれど、つひに判らなかつた。その顔は、思ひだせない姓名や懐かしい面影のやうに絶えず眼先きにちらついて、その後も随分長く、何週間となくその不審が頭にこびりついてゐた。

ところが或る日、私は再びこの青年と街でめぐりあつた。そのとき私は彼の顔を殆んど凝視した。

しかし彼は、以前に逢つたときと同じやうに、冷たい眼付で私の方を見かへした。その眼付は、私にとつてお馴染のものだつた。それなのに、彼はちつとも私を知つてゐるやうな風を見せないで、一秒間も躊躇することなく、すぐに右へ避けてすれちがつた。

そこで、私は手取り早くこんな風に考へた。「私が本統にあの青年を知つてゐるのなら、彼もまた私を見覚えてゐるべき筈だ。そして今は二度目に出會つたのだから、眼付でなり、立ちどまるなりして、その心持を表示しなければならぬわけだが、彼は些ともそんな氣振りを見せない。してみると、やはり私の思ひ違ひとするより外はないのだ。」と。

それつきり、私はこの青年のことを忘れてゐた。

すると或る日の午後、診察が終りかけた時刻に、一人の男が戸口に入つて來たのを見ると、私はびつくりして、挨拶すべく起ちあがつた。その男といふのは、即ちかの青年であつたのだ。私は彼を見つた瞬間、たしかに見覚えのある人と思つたので、親しげに手をのべて、つか／＼と彼の方へ歩いて行つた。彼も驚いたやうであつた。

「失禮だが、貴方はどうも、よく似てをられますよ……」

私は吃り／＼いひかけたが、相手が冷たく此方を見据ゑてゐるものだから、

「それは左様と、何處か悪いんですか。」

と言葉をそらした。

青年は身じろきもしずに、椅子の脇掛に両手をおいたまゝ、すぐには返事もせなんだ。私はまた「何處でこの男に會つたかなア。」としきりに例の記憶をたどつてゐるが、そのとき突然に或る考へ——といふよりは、寧ろ一つの幻影が胸にひらめいた。而もそれがあまりに瞭然してゐるので、危く大聲で「解つた！」と叫ぶところだつた。私が長い間取り憑かれてゐた「何時？」「何處で？」といふ記憶をば、そのとき漸と探してあてたのであつた。外でもない、會て夕闇の中で、書架の上に見た變化の顔——それを今まざ／＼と、この生きてゐる男の肩の上に認めたのである。

それは單なる相似ではなくて、完全な一致だつた。その暗合のあまり不思議なのに呆れて、私は青年の言葉も耳に入らなかつたが、ふと氣がつくと、彼は私のさうした驚きも知らずに、喋つてゐるのであつた。

「……僕は子供の時分から、友達と異つてゐるといふことに氣ついてゐました。とき／＼突然に家を飛びだして、何處かへ隠れて、獨りほつちで暮さうとしました。さうかと思ふと、めちやくちやに友達に戀しくなつたり、頭がほうつとして馬鹿のやうになることもありました。また時としては、急に

癪癪が起つて来ると、今にも絞め殺されるほど苦しくなりました。そんなときは、大抵海岸とか静かな田舎へ轉地しましたが、ちつとも効果がありませんでした。それは子供の時分のことですが、この頃はまた些しの物音にも驚くせがついて、それに、強い光線を見るのが非常な苦痛です。そのくせ體は何處が悪いといふところもありません——あらゆる醫師の診察をうけました——たゞ全體に苦しいのです。それから夜も可けません。朝眼覺めたときは、徹宵放蕩でもしたやうに體がぐたぐたに疲れてゐます。とき／＼懊惱煩悶して頭がぐら／＼します。それに睡眠が不足で困ります。たまに眠つたかと思ふと魘されるので……」

「酒はお飲みですか。」

「葡萄酒も、他の酒も大嫌ひで、僕の飲みものは水だけです。ところで、もう一つ、一等可けないことをお話するのを忘れてゐました。これには我れながら閉口してゐますが、僕はどんな詰らんことでも、他人から反對されると、それが口に出して云はれた場合は無論のこと、眼付なり、仕草なり、その他どんな微かな仕方でも、自分の意に逆らつたことをされると、嚇然となるのです。だから僕は決して武器を携帶しないやうに氣をつけてゐます。夢中になつてそんなものを振りまはしたら大變ですからね。そんなときに限つて、僕の意味といふものが留守になつてゐます。他の人格が僕の頭の中

へ入つて来て、僕を追ひ使ふので、まったく正氣ぢやないんです。だから正氣にかへつたときは、何だか人殺しがやりたかつたといふ記憶だけ頭に残つてゐて、その外はまるつきり覺えがありません。家にゐるときにかうした発作が来ると、すぐ自分の室へ閉籠るから安全ですが、これまでも度々あつたやうに、ひよつと戸外でそれが起りますと、何處をどうほつつき歩いて、どんなことをやるんだか、まったく夢中なんです。夜半に、見も知らぬ場所の共同椅子の上なんかで、ふと目が覺めたりします。そんなときは、もしか夢中で何か犯罪をやつたんぢやないか、と思ふと急に恐ろしくなつて、飛ぶやうに家へ歸つて引籠りますが、早鐘を打つやうに動悸がして、怖々して、些しも落ちつきがありません。しかし四五日何事もなく経過すると、やつと解放されたやうな氣がしてほつとします。こんな状態ですから、先生、どうも放抛つておけないんです。僕は今に體を損すばかりでなく、頭も狂ひさうです。一體どうしたらいいでせうか。」

「そんなに心配することはない。」と私はいつた。「軽い神経症状に過ぎないんだから、直きに癒りますよ。だが、第一にその原因を發見しなければならぬ。貴方は仕事が酷過ぎるんぢやありませんか。そんなこともない？ そんなら、特に神経を惱ますといふやうな心配事でもあるんでせう。それもなにか？ その他何も原因がないつて？ しかし醫者には、何もかも正直に打開しなければなりません

ぞ。」

「僕は有りのまゝに申し上げたのです。」

「何か他に事情がありませんか。貴方は御兄妹はおありですか……無い？……御母さんは御達者ですか……さうですか……御母さんは神経質な方でせう……さうぢやないつて？……そんなら御父さんも、やはり御健全ですか。」

「父は亡くなりました。」

青年はごく低い聲で答へた。

「若死の方でしたか。」

「若死？ え、僕が二歳のときに死んださうです。それについて、先生は何か噂でもお聞きでしたか。」

「御病氣は何でしたかね。」

青年はこの質問がよほど神経に觸つたと見えて、さつと顔色が蒼ざめた。その瞬間に、私はかの變化にそっくりな顔を見たと思つた。

「實は、僕がこんな惨めな状態になつた原因もそれなんです。」と彼は暫く考へてから、「僕は父の死

因を知つてゐます。父は、斬首臺で果てたのです。」

あゝ、私はこゝまで穿鑿した心無さをどんなに後悔したことか。私はあわてゝ話しを他へそらさうとした。

しかしもうお互ひに胡魔化しは利かなかつた。で、私は語氣もしどろに大體の養生法を話した上に、夢中で何か處方を書いてやつた。そして兎に角確かりせねばならぬことゝ、近いうちに再診をうけに来るやうに注意して、彼を送りだした。

そのあとで私は召使にいつた。

「今日はもう患者は斷るんだぞ。」

私は實際、患者の話を聴いたり、診察の出來さうな気分ではなかつた。頭が混亂してゐた。曾てまざまざと見た變化——それにそっくりの顔——今の青年の身の上話——私は靜かに坐つて、考へまゝとめようと努めたが、眼はひとりでに書架の上の髑髏の方へ惹つけられてゐた。私はそれによつて、長い間悩まされたあの不思議な似顔の謎を解かうとしたけれども、そこには依然として例の不氣味な形のものゝが据わつてゐるばかりで、何等的確な暗示にはならなかつた。

しかし私はどうしてもその髑髏から眼を離すことが出來なんだ。で、たうとう書架の前へ行つて髑

體を手に取つてみると、それまで氣づかなかつた或ることが眼に止まつた。それは髑髏の後頭部の下の方が、廣く、嶮しい切り口に終つてゐることであつた。疑ひもなく激しい斧の一撃を喰つた痕だ。斬首臺で刃の下らんとする刹那、囚人が本能的に頸を縮めるはずみに、よくこんな風に傾斜した切り傷が出来るものだ。

それは單に偶然の暗合だつたかも知れぬ。多分私は前にあの患者と街の何處かで偶と出會つたことがあつて、記憶に残つてゐた彼の面影をば、私が幻想的にこの髑髏にかぶせたのだと説明することも出来よう。多分そんなことかも知れぬ。

しかし諸君、世の中には、解決などせずにおきたい秘密が幾らもあるものなのだ。

闇と寂寞

彼等は三人とも老ほれ、衰へて、見るも慘めな有様であつた。

女は二本の撞木杖にすがつて、やつとのことと歩いてゐた。一人の男は、兩手を前へ突きだして、指をひろけて、眼は堅くつぶつてゐた。盲目なのだ。もう一人の男は、頑固な相好で顔をうつむけ、身内の方々に苦しいところでもあるらしく、不安な眼つきをして、いつも黙りこんで二人のあとにとほとほとくつついてゐた。これは嘔なのだ。

噂によれば、撞木杖の女は姉で、盲と嘔はその弟で、大變に仲のいゝ姉弟ださうな。この姉弟は何處へ行くのにも必ず三人一緒だつた。

彼等は同じ乞食でも、白晝に教會堂の入口に出しやばつて、否應なしに參詣人の施しを狙ふやうな汚い乞食の仲間には入らなかつた。彼等は強請るのではなくて、單に哀願するだけであつた。彼等は

いつも薄ぐらい路地などを歩いてゐた。不思議な三幅對——もつと適切にいへば、老衰と、闇と、寂

寞。ところがこの姉は、或る晩、町はづれの見附門のそばの荒ら屋の中で、二人の弟の手に抱かれながら、聲も立てないで静かに呼吸を引きとつた。そのとき、啞は姉が斷末魔の苦しうな眼つきを見た。盲は握つてゐた手首にはけしい痙攣を感じた。それだけであつた。彼女は無言のまゝ、永久の沈黙に入つてしまつたのである。

その翌くる日、町の人々は珍らしく、この乞食が男の兄弟二人つきりで歩いてゐるのを見た。

二人は終日方々をさまよひ歩いた。麵麩屋の前で立ちどまりもせなんだけれど、麵麩屋では例日のやうに少しの麵麩を恵んでくれた。日が暮れて、暗い街々に燈りがつき、閉まつた鎧戸の蔭では、どの家もランプの灯でばつと陽氣になる時分、二人は貰ひあつめた銅貨で貧弱な蠟燭を二本買ひ求めて寂しい小舎へ歸つて行つた。そこには粗末な寢床の上に、姉の遺骸が、枕頭にお禱りをする者もなく寂然と横たはつてゐたのである。

兄弟は死人に接吻をした。間もなく、世話をする人々がやつて来て、遺骸を棺へ納れてくれたが、棺桶の蓋をしめて、それをば木でこしらへた二つの臺の上に載せてから、皆んな歸つて行つた。後は

兄弟が二人ほつちになると、一枚の皿に黄楊の小枝を供へ、買つて来た蠟燭をともし、最後のあわただしい通夜をするために、棺の前へ坐つた。

屋外では、北風が建てつけのわるい戸の間へ吹きつけ、内では、二本の蠟燭の短くふるふる灯影が、黄色い二つの汚點のやうにほつかりと闇をつらぬいてゐた。

夜は森閑と更けてゆく。

兄弟は長いことぢつと坐つて、お禱りをしたり、いろくな思ひ出をたどつたり、恍惚と考へこんだりしてゐた。

泣くだけ泣いてしまふと、二人とも、うつら／＼と居眠りをはじめた。

眼がさめても、依然として夜であつた。二本の蠟燭の燈りは、まだちろ／＼してゐたが、燃えて可成り短くなつてゐた。黎明に近いので、ぞくぞく寒氣がした。と、その瞬間、二人はふるへあがつてさつと身をかゞめた。幽霊が現はれるか、でなければ何か物音が起りさうな氣勢がしたからだ。それでぢつと様子を窺つてゐたが、格別何事もなさうなので、今度は寢床へもぐりこんでお禱りをはじめた。

間もなく、彼等は又もぎよつとして起きあがつた。これが一人だつたら、つまらぬ幻想に欺された

と思つたかしのれない。盲ばかりとか、啞ばかりだつたら、氣のせるといふことも云へるだらう。が、かうして二人を驚ろかした以上——眼と耳を同時に惹きつけた以上は、てつきり何か異常な事件が起つたに違ひないのだ。二人はそこまでは合點が行つたが、さて實際に何が起つたかは判らなかつた。彼等は、二人揃へば何事もはつきりするけれど、離れぐになると、まるで不完全な、惱ましい考へしか起らぬのであつた。

啞はむつくり起ちあがつて歩きはじめた。と、盲は恐怖でしめつけられたやうな聲で、弟が啞であることも忘れて、問ひかけた。

『どうした、どうした。何故起きたんだい。』

啞の聲にぢつと耳を澄ましてゐると、行きつ戻りつときぐ立ちどまつては、歩きだして、また思ひだしたやうにびたりと立ちどまる。盲は耳で判断するだけなので、妙に怖氣が出て、齒の根ががたがたふるへだした。そしてもつと何か云はうとして、漸と氣づいた。

『駄目々々。彼は金聲だつて、だが、一體何が見えたんだらう。』

ところが啞は眼をこすりながら、なほ暫く歩き廻つてゐるが、別段怪しいこともないので、また寢床へもぐりこんで、そのまゝ眠てしまつた。

盲は、あらゆる物音が杜絶えて森閑となると、ほつと安心して、またお禱りをはじめた。それから單調な聲で聖歌を唱へてゐるうちに、頭がぼうとして、やがて睡りが落ちて来て、自然と身内の闇が明るくなつてゆくやうであつた。

うとくと夢に入りかけたとき、何だかさわくといふ物音がしたと思つて、假睡からさめた。それは今のさき彼等を愕然とさせた、あの物音に相違ないのだ。

何か引掻いてゐるかと思ふと、板を軽く叩くやうな刻み音が入つて、また怪しく擦る音がする。それに、息づまるやうな忍び聲がまじつてゐる。

盲は思はず跳びあがつた。が、啞は相變らず眠つてゐて動かない。

盲はひし／＼と恐ろしくなつて來た。

「おれは何だつてあの物音で狂人のやうになるんだらう。暗がりでもやみと音がする……弟はよく眠てゐるらしい。だが、たつた今、彼がおれの傍を歩いてゐる聲音がしたつけ……彼の呼吸がおれの顔にかゝつたではないか。してみると、彼は起きてゐたんだ……それ、あの音だ……風だらうか？……風だけかな？……いや左様ぢやない。風の音ならおれもよく知つてゐるが、あの音はこれまでに聞いたことがない……何だらう……はてな……」

彼は拳を噛みながら、ふと考へた。

「ひよつとすると？ そんな筈はないんだが……いや左様かもしれないぞ……そら来た……又だ……だんく大きくなつて来る……今度は確かだ……そら、引掻いてゐる……叩く……お、呻いてゐる……呼んでゐる……聲だ……姉の聲だ。姉が泣いてゐる……助けてくれい。」

彼は寢臺の脚のところへころけこんで呶鳴つた。

「フランソア、起きて助けてくれい。たゝ大變だ。」

恐怖がひしと彼を攫んだ。彼は髪をかきむしりながら喚き立てた。

「大變だ……お前は眼があるんだ。見てくれい。」

例の怪しい呻き聲がはつきりして、叩く音がだん／＼荒々しくなつて来た。盲は弟の方へ行かうとして、手さぐりで壁に觸りながら、家具の代用に使つてゐる破れ箱に突當つたり、でこぼこな土間の凹みにつまづいたりした。

幾度も轉けては起きあがり、方々に傷をこしらへて、血だらけになつて泣きながら、

「おれは眼が見えない。おれは眼が見えないんだ。」

まご／＼してゐるうちに、黄楊を浸した皿をひつくりかへしたが、彼はその陶器が地面に碎けた音

で、かつと逆上してしまつた。

「助けてくれ。おれは何をやつたんだらう。助けてくれい。」

そのとき例の物音がまた起つた。今度は一層はつきりと不氣味に聞えた。それに、けたましい叫びが一聲聞をつん裂いたので、いよく只ならぬ事件が起つたのを確かめた。盲はその見えない眼の蔭で、恐ろしいことを占斷つた。いや、彼はそれをあり／＼と見たのだ。

經帷子を着た年老つた姉が、棺桶の横木を破らうと藻掻いてゐる有様を彼は見た。この世のものでない恐怖、あらゆる死人より千倍も惨らしい姉の苦患を彼は見た。姉はそこに生きてゐた。さうだ、すぐ傍のやうだが、さて何處だらう。彼の登音も、聲も、姉には聞えてゐる筈だ。それなのに、盲目の彼は、姉のために奈何してみやうもなく、ひたすら哀訴歎願するばかりであつた。

「お待ち、今助けに行けど。しつかりして……お、神様！ たとへ一分間でも、一秒間でもよろしうございますから、この眼を開けて下さい。その代り、様子を見とゞけた上は、すぐに元の盲にして下さればよろしいのです。それとも私は罪障の深い者で、さういふ資格がないと思召すなら、せめて弟の目を覺まして下さい……神様！ 啞が盲よりも役に立たないなんてあんまり情けないではありませんか。」

右左に手をひろげたとたんに蠟燭が倒れて、生血のやうに暖かい蠟が手の上にたらりと流れた。そのとき例の音がますます大きく、躍起になつて、それが物をいつた。たしかに言葉を發したと思つた。が、力が萎えたのか、やがてその聲は苦しさにきれくになつて行つた。盲は這ひだした。

『しつかりして！ おれがこゝにゐるぞ……助けてやるぞ。』

しかし答へはなくて、たゞ、腕のはり裂けるやうな呼び聲が聞えるばかりであつた。その呼び聲にぐうぐう眠つてゐる弟の寢息がまじつてゐるが、盲は突然くるりと廻つたはずみに、寢臺にぶつつかつて、手探りをする、弟の體に指先が觸れたものだから彼は弟の肩を押へて、力一杯にぐいぐいゆすぶつた。

啞はびつくりして眼を覺ましたが、四邊を見ると蠟燭が消えてゐて眞暗なので、彼はわつと叫んで跳びあがつた。あやめも分かぬ闇、妖怪變化が跳梁する闇の中では、視力は何の役にも立たなんだ。啞は盲よりもよつほど暗闇が不氣味だつた。彼はもう夢中で、半狂亂になつて、やたら滅法に兩手を打ちおろした。

盲は弟に厭といふほど押へつけられ、苦しい息をふりしほつて、

『助けてくれい。たゞ大變だ。』

と叫んだとき、啞は彼の喉を絞めあげた。それから二人は土間にころがつて、組みつき、搦み合ひ爪や歯で死物ぐるひに肉を裂いたり、噛み合つたりしつゝ、そこいら中をのたうち廻つてゐるが、その呻きもしだいに微かになつて、盲の聲が或は遠く、或は近く、果ては末期のらしいしやつくり變つて行つた……やがて、めりくつと物の折れる音がした……と、懸命に藻掻いてゐる體がつくりと陥入つた氣勢で……それに何か軋むやうな音が聞え……ひくく微弱い呼吸づかひが暫くつゞいてゐるが……もう一度軋む音がして……それつきり寂然となつた。

外では、郊外の樹々が突風に撓んで、ひゆうくと呻り聲をあけ、雨が壁の面に舞ひ狂うてゐた。そして曉けなやむ冬の陽は、まだ地平線の彼方にうづくまつてゐた。荒ら屋の中は闇寂として、もう何の物音も聞えない。吐息もない。

闇と寂寞……

生さぬ兒

男は腰掛に腰を据ゑる卓子に片腕ついて、肉汁をさも不味さうに、一匙つゝのつそりくと口へはこんでゐた。

女房は爐のそばに突立つて、薪架の上に紅く燃えてバチ／＼爆ねる細薪をば、木履のつま尖で蹴かへしながら頼りに何か話しかけたが、男はむつとり黙りこんでゐて滅多に返事もしない。

「シヤブーの家では、あの老ぼれの牝鶏を皆んな片つけたつて、眞實かね？ それからリゾアの家では、乳酪がすつかり溶けてしまつたつていふぢやないの。」

「そんなことをおれが知るもんか。」

と男は顔もあけずに、口の中でいつた。

「それはさうと、お前さん、仕事の方はどうだつたの。好い手間になつて？」

「何を云ふんだい。」

「あら、大層御機嫌がわるいのね。何うしたつていふの。」

男は匙をおいた。そして兩腕をつきだし、卓子の上に拳骨を構へて、大きな小麦袋でも抜き取らうとする時のやうに、ふうつと深い溜息を一つ吐いたが、

「それはな……それはな……」

と云ひかけてふと口を噤んだ。そして一度押しかけた皿をまた手許へひきよせ、麵麩を小さく切つてからナイフを閉めて、それから手の甲で口を押拭ひながら、

「何でもねえんだよ。」

「お前さん、何か怒つてるんだね。」

「何でもねえよ、煩さいつ。」

二人は沈黙した。外では雨が屋根瓦をたゞき、風は樹々の枝に吹き荒れて、煙突にまでも呻りこんでゐた。爐の火は威勢よく燃えさかり、その大きな焰の舌がへらくと壁に舞ひあがつてゐた。

「スーブはもう済んだの？ もつと何かあけようか。」

男は首をふつて、

「澤山だ。」

素氣ない返事をして、眼をしばたゝいてゐた。女房は何だかちつとしてゐられないといった風で、また村の噂話をやりだした——まるで何ヶ月も家を空けて村の噂をば何くれと聞きたがる人にでも物をいふやうな調子で、

「お前さん知らないの？ ウールトオの家の犬ね、あの大きい赤犬よ。彼犬が狂犬になつたんだとさ。それでね、射殺さうとして鐵砲を取りに行つてゐるうちに、彼犬が逃げだして、それつきり何處へ行つてしまつたのか、誰も見かけた者がないつていふのよ。」

男は知らん顔で口笛を鳴らしてゐた。と、女房は口惜しがつて、

「お前さん、餘りぢやないの、一體どうしたつていふんだらう。また居酒屋へ寄つたね。いつも歸つて來ると上機嫌で饒舌をするのに、今日に限つてうんともすんとも云はずに、黙アつて坐りこんで、毒でも食べるやうに不味さうに夕食を食べてさ。それに、坊やが何うしたと一言訊くでもなし……」

すると、男はゆつたりと女房の方へ向き直り、その眼の中を眞正面に見すゑて、

「お前は背高のジャツケと久しく會はないだらうな。」

そのとき薪が一本、馬鹿にバチ／＼爆ねて爐の口の方へすべりだしたのを、女房は木履のつま先で蹴かへしながら、もぢ／＼して、

「背高のジャツケ？ 會はないわ。それが何うしたのさ。」

「先刻此家へ來てゐたと思つたがなあ。」

「そんなことがあるもんですか。」

「嘘を吐け。」男は聲高に怒鳴つた。「おれは郵便屋に聞いたんだが、郵便屋は、今朝彼奴が此家から出て行つたのをたしかに見かけたといつてゐたぜ。」

女房はいひ繕はうとして、

「あゝ、ほんに、わたしは迂濶り忘れてゐたんだよ、つまらないことだからね。」

さういひながら、肩をすほめて向うへ行きかけると、今度は男の方で荒々しく呼び止めた。

「待て、話がある。」

女房は眞蒼になつて口籠りながら、

「お前さんは、謎がうまいのね。」

と冗談でいひ紛らさうとした。

男は拳骨で女房の肩をぐいと押へつけて、

「まア坐れつてことよ。おれは長い間我慢をして来たんだが……どうせ一度は話をつけにやらねえ……さんざつばら村の笑ひものになつてさ……村の奴等は、現在おれのゐる前でひそく話しをしゃがる。おれは成るだけそんなことを信じまいとしたことは、神様が御承知なんだ……だが今度こそは了見出来ねえ。どうしても突き止めにや措かねえぞ。おい、あの背高のジャツケはお前の情夫なんだらう。」

女房はそれを聞くと、思はず跳びあがつて、

「馬鹿なことをおいひでないよ。」

「口先はどうでもいゝから、證據を出せ。おれは知つてるぞ。え、おい、知つてるんだぞ。」

男はつゞけざまに胸を叩いて「知つてゐるく」を繰り返して詰責すると、今まで抑へて抑へてゐた憤怒がくわつと燃えあがつた。彼は大きな手で卓子をぐわんぐわん叩きながら女を罵倒し、威嚇した。女はこの激しい憤りの前にどぎまぎして、云ひ譯もしどろもどろだつた。

「お前はどこまでも誤魔化してゆけると思つたんだらう。無理アねえ、おれがこれつぱかしも疑らなかつたほどのお人好しだからなア。だがおれがほんたうにそんな間拔かどうか、今にわかるぞ……そればかりぢやねえ……一體誰の子だい、あの餓鬼がさ。誰の子だい。」

「そりや餘まりだわ。餘まりだわ。」

女房はエブロンを顔にあて、しく／＼泣きながら不平を訴へだした。

しかし、男は矢庭に女の両手をひつ攫んで眞直に引きおろし、血走つた眼を据ゑ腮をぐつと引きしめて、何處までも追及した。

「誰の子だい。誰の子だい。」

女房はまた溜息をついて、

「そんならお前さんは、あの子に覚えがないつていふの？」

女房のさうした言葉とその涙に動かされて、男は我れにもあらず一寸躊躇つてゐたが、やがて少し不確な聲で、

「おれに判るもんか……まるつきり判らねえ……さア云つて見ろ……」

女房は氣が顛倒しながらも、男が急に不決斷になり、弱氣になつたらしいのを見て取ると、今度はぐつと強く出て、聲も荒々しくいつた。

「そんなことはね、お前さんのためにもわたしのためにも、取り合ひたくないのよ。」

と、男はまた痼癩が盛りかへして来た。長い間胸にこだはつてゐた憤恚が一時弛んだとしても、そ

れはやがて猛然と爆發する前提に外ならなかつた。彼はくわつと腕を振りあげ、はげしい忿激のために却つて低聲になつて、

「こらつ、正直に云へ。厭なら覺えてゐろ……おれは随分思ひきつたことをやりかねないぞ……どうしてもおれはあの子の父親が知りたいんだ……お前とおれの始末はいづれ後でつける。だが、あの餓鬼のことは今この場で聞かにならねえ。わかつたか……おれは他人の子は育てたかアねえ……おれはな、あの子に少しの地所でも残してやらうと思へばこそ、かうして寒さ暑さも厭はずに、眞黒になつて働いてゐるんだ。いゝか、わかつたか……おれはことによると人殺しでもやりかねないぞ……お前や、彼奴や、村の奴等のために、おれはもう少しで狂氣にされるところだつた……が、もう大丈夫だ……お前はおれと一緒になつたときは、キャラコの襦袢一枚しか持たないやうな態だつたが、そのくせ前々から、稻塚の蔭でジャツケと巫山戯てゐたつていふぢやないか。そして、嫁に来てから八月目にお産をしたが、お前はそのとき、牛小屋から牝牛が逃げだしたのを見て吃驚したために、月足らすの子が生れたと云つたな。おれはそれを眞にうけてゐたんだ。しかし、もう信用出来ねえ。村の奴等がおれの眼を開けてくれたのさ。あの餓鬼はおれの子ぢやねえ。もしもおれの子なら左様だといつて見ろ。おれは誰に尻をもつてつていゝかを知つてゐるんだ。さア云へ、神様の前で云つてみる。」

女房は両手で顔をかくしたなり、齒の根ががたくふるへて返事が出来ない。男は拳骨を振りあげながら、つかくと傍へ寄つて行つた。

「うぬ、賣女奴。」

その瞬間に戸口が開いて、泥まみれの木履を穿いて頭巾つきのマントをかぶつた子供が外から歸つて来たが、父親の只ならぬ見暮とその怒鳴り聲に膽をつぶした。

男は子供の顔を見ると、呪ひの言葉を中途で止めて、振りあげた拳を引こめた。そして聲もいくらか穏やかになつて、女房を押しつけながら、

「彼方へ行つて寝ろ。」

それから少年の方へ向きなほつて努めて優しい聲で、

「お前はこゝに居な。」

子供は恐るゝマントを脱り戸口の片隅で木履をぬいで、そこにちつと突立つてゐた。

男は爐ばたで兩脛を膝についたまゝ考へに沈んでゐるが、やがて顔をあげると、願で子供に合圖をした。

「いゝへ来い。」

そして少年を股の間へ引きよせ、両手でその顔を押しながら、しげくと打ち眺めた。その子の顔の中に或る面影を見出さうとして、全心全力をそこに集中した。が、そのおどろくしてゐる幼弱な體に觸ると、限らない愛撫の情がおのづから身内に沁みこんで来るのであつた。

他の男に似た面影を見出すことの餘り恐ろしさに、二度とこの子の顔を見ない方が優しだとさへも思つた。しかし或る一つの力が、どうしても視線を子の顔の方へ引きつけずにはおかなかつた。で、彼は子供の頭を押へ、股でその繊細い腰部を締めつけた——子供は両手を男の膝の上においてゐたが——そのとき男は、或る憎悪が、われにもあらず、むらくつと心中に沸きかへつた。

最初は躊躇したけれど、眞實を見極めようとする欲求をどうすることも出来なんだ。子供の眼——その凹んだ小さな眼付は、あの男にそっくりだ。その微笑してゐるやうな口元も彼男の口だ。それに前歯の少し離れてゐる歯並みといひ、取りわけ、茶褐色のもちやくくと濃い髪の毛など、あらゆる細部まで、何一つ間然したところがない。もう駄目だ。やつぱり眞實であつたか！ 女が欺いてゐたのだ。賣女奴が、姦夫の子をば亭主の食卓に坐らせてゐたのだ——

證據がそこに、絶えず叫び立てゝゐたではないか。生きた證據が眼の前に轉がつてゐたのだ。しかし彼はさうした眞實をも信じまいとして、そしてつと疑ひ迷ふべき理由を見出さうとして、自分自

身と闘つた。

男は長い間、この少年をば自分の血を分けた子供と信じてゐたものだから、親身に可愛がつて、その生長を見守つて來たのであつた。子供は彼をババと呼んで、いつも一緒に野良へ出ては、彼の傍で嬉々として遊んでゐた。他人の子だつたら、それほど愛情がうつるわけではない。かうした愛憐の情は眞に骨肉を分けた子供に對してのみ起るもので、赤の他人だつたらとても左様は行かぬものだ。して見れば、たとへこの子の眼付や、髪や、齒並や、口元が他人に似てゐるらしく見えたとしても、それは單に想像でそんな風に思はれたのではないだらうか——

そのとき、ふと、呻くやうな聲が寂寞を破つた。男は聞き耳を敵てると、その聲がだんく戸口の方へ近づいて來た。

何だか引搔く音。つゞいてウ、といふ唸り聲。

男は子供を突離すと、子供はそのまゝ爐ばたで餘念もなく、燃えてゐる薪をいぢくりはじめた。

男は窓をあけて外を覗いたが、すぐにびしやりと締めきつた。戸口の向うに大きな眞黒なものがつくまつて、鼻つ面を地面につけ、眼玉が暗がりにはぐらぐらしてゐるのを見たのであつた。

男は室の隅から鐵砲を持ちますが早い、銃身をはねかへして藥莖を二個挿しこんで、それから、

射撃するために窓を開けようとしたが、ふと、子供が銃聲に怖えてはいけなないと氣づいたので、鐵砲を一旦卓子の上において、

「おい、母ちゃんの方へ行つて、吃驚しないやうに左様いつておやり。今ババがウールトオの狂犬を射止めるからな。」

子供は此方へ振りむいた。今まで爐の前にしやがんでゐたのが、燈火を眞正面にうけてひよいと起ちあがつたところを見ると、それが背高のジャツケに酷似ではないか。似たとはおろか、恐ろしいほど似てゐるのだ。

男は憤恚心頭に發して、思はず身をかゝめて子供を手許へ引きよせたが、その瞬間にアツといつて呪ひの言葉も喉につかへた。といふのは、子供の頬つぺたの、恰度唇の切れ目のところに、鳶色の痣が一つあるのが目に止まつた。それはごく小さいけれど、背高のジャツケの頬つぺたにある痣とそつくりそのまゝだつた。しかもジャツケは、その愛嬌をばひどく自慢にしてゐたのであつた。

迷ひ心がぐわらりと崩れた。さうだ、此奴は自分の子供ぢやない。やつぱり他人の子であつたのだ——と思ふと、眼の前が急にまつ暗になつた。爐に燃えさかつてゐる火焰が胸に突き入つて、肉を灼きたゞらせるのを感じた。あまりのことに物がいへない。呪ひの言葉さへも出ない。

彼はいきなり子供へ跳びかゝつて、襟くびをひつ攫んだ。

「出て行け、もう見るのも厭だ。行きアがれ。」

少年は出されまいとして頑張つたけれども、男はぐい／＼戸口へ引ばつて行つて、颯と戸を開けると、汚い犬猫でも追ひ出すやうに、子供を外へ突きとばすが早いか、びしやりと締めきつた。

と、猛犬の凄まじい呻り——それにつゞいてひいと魂消る子供の聲が闇をつん裂いた。

男は氣拔けがしたやうに、呆然と突立つてゐた。

母親はこの物音を聞きつけて奥から驅けだして來たが、子供の姿はなくて、亭主が獨り凄じ眼つきをして戸口に佇つてゐるのを見ると、仰天して喚きたてた。

「お前さん、何をしたんだね？」

外ではまた助けを呼ぶ聲。

「母アちやーん、母アちやーん……」

「おゝ、坊や。坊や。」

女房は狂人のやうになつて戸外へ飛びだした。

石段の下に仆れてゐた子供は、顔は狂犬の牙でめちやくちやに咬み裂かれて、もう虫の息だつた。

犬はなほも獲物へ喰ひつかうと猛り狂うてゐるが、女房はそれを物ともせず、呪ひと歎きの言葉を口走りながら傍へ飛んで行つて子供を抱きあげた。

彼女は子供を卓子の上に臥かした。子供は、無惨にも喉笛を喰ひ裂かれ、呼吸は小刻みにハア／＼いつてゐるばかりだつたが、彼女はその兒の體にしがみついて、處嫌はず接吻をした——泥まみれになつた哀れな頭に、血だらけの小さな顔に、それから、ぱつくり開いたまゝ最期の呼吸に喘いでゐるその唇に——

男は床に突伏して、兩眼を閉ぢ耳を塞いで、涙に咽びながら祈つた。

「おゝ、坊や……聖母さま、ど、どうぞ坊やをお救けなすつて下さい！」

碧 眼

女は寢臺のそばに立つて、しよんほりと考へこんでゐた。病室用のだぶ／＼な被布にくるまつてゐるせるでもあらうが、何だか實際よりも痩せ細つて見えた。

あの愛くるしい顔もすっかり衰へてしまつた。眼の縁はうすく黯ずんだけれど、哀愁をたゞへた底知れぬ深さの碧眼が不釣合なほど大きく見えて、それが僅かに顔の全體を明るくしてゐるやうだ。頬は、肺病患者によくある病的紅潮を呈し、そして鼻の兩側に出來た深い凹みは、恰かも止め度ない涙のために、そのところだけ擦り耗つたかと思はせるのであつた。

彼女は、受持の醫員が傍へやつて來たのを見て、お辭儀をすると、

「おい四番、お前さんは外出したいつて云つたさうだが、本統かい。」

「はゝ。」

かすかに囁くほどの聲で答へた。

「飛んでもないことだ。お前さんは辛と二三日前に起床られるやうになつたばかりぢやないか。それに、こんな天氣に外出するとまた悪くなるよ。もう少し我慢をなささい。此院は別段不足がない筈なんだが、それとも誰か氣に觸ることもしたかい。」

「いゝえ、先生、そんなことはございません。」

「そんなら何故だしぬけに外出したいなんて云ふんだね。」

「わたし、どうしても出かけなければなりません。」

きつぱり云つて退けた。その聲は案外しつかりしてゐた。そして、問ひかへされぬ前に急いで後をつゞけた。

「今日は萬聖節でございますわね。わたし一緒になつてゐた男の墓に、今日はきつとお詣りしてお花を供けるついでに約束をしました。わたしの外には誰もお花なんか供けてくれ手がないんです。それで、堅い約束をしましたの。」

涙が一滴、眼瞼にきらりと光つたのを彼女は指で押しぬぐつた。

警員は何となく可憐さうになつて來た。そして一種の好奇心からか、それとも何か云つてやらねば

あんまり無愛想だとも思つたのか、ふと彼女に問ひかけた。

「その情人は何時亡くなつたの。」

「もう、一年になります。」

「何だつてそんなに若死をしたんだね？」

女は慄然としたやうであつた。その落ちくぼんだ胸部や、細々と瘦せた手首などが一そう慘々しく見えた。そして彼女は半ば眼をつぶり、唇をふるはせながら、

「死刑になりましたの。」

と呟くやうにいつた。

警員は暫く唇を嚙んでゐたが、

「それは可憐さうな。ほんたうにお氣の毒だね。それで、どうしても外出がしたいといふなら、出かきなさい。風邪を引かんやうに氣をつけてね。明日は歸つて來なければいけないよ。」

病院の門を出ると、ぞつと寒氣がした。

それは寂しい秋の午前であつた。こまかい霧雨が壁に降りかゝり、すべてのものが——空も建物も裸になつた樹々も、霧に鎖された遠方も——おしなべて灰色に見えた。人々は早くこの濡れた往來か

ら遅れようとして、忙しげに歩いてゐた。

彼女は眞夏からずつと入院してゐたので、衣物もそのときに着て来た、地質の薄い、色の華美なものであつた。瘦せた襟のあたりにつけたりボンが皺くちやになつたのも、殊に哀れ深く見えた。スカートも、上衣も、ネクタイも、夏の頃は晴やかに微笑したものであつた。ところが、今はすべてが灰色のうすら寒い四邊の色に對照すると、いやに寂しくうち萎れて見えるのであつた。

彼女は覺束ない歩調で歩いて行つたが、呼吸切れがするのと、頭がふらふらするので、時々ちつと立ち止まらねばならなかつた。

街を行く人々は皆なふりかへつて彼女を見た。彼女は物が云ひたけにもちくちくしてゐるやうであつたが、それも恐ろしいかして、神經的にきよとく左右に氣を配りながら歩いて行つた。

そんな風にして、たうとう巴里の半ばを横ぎつて、セーヌ河岸までやつて来ると、暫く立ちどまつて、その緩やかな、潤濁した水面をちつと見まもつた。が、錐で刺すやうな寒さに身内がぞくぞくして逆も靜然としてゐられないので、彼女は再び歩きだした。

やがてモーベル廣場からコブラン通りの方へ出ると、どうやら氣分が落ちついて来た。その邊は長く住み慣れた土地なので、見覚えのある顔もちらほら見えて来た。彼女を見て噂をしてゆく者もあつた。

『彼女がヴァンダの情婦だぜ、滅法寢れやがつたな。』

『ヴァンダつて誰だ。』

『お前知らねえのか。あの、そら、人殺しをやつた……』

彼女は終局までそれを聞くのが恐ろしさに、両手で顔をかくして足早に行き過ぎた。

とある見すほらしいホテルの前へ来たときは、もう日が暮れかけてゐた。このホテルは彼女が病氣になる以前に巢喰つてゐたところなのだ。

彼女はつかくと戸口を入つて行つた。階下は小さなカッフエになつてゐて、曖昧な娼婦達や、それらに飼はれてゐる情夫達がそこに集まつて花牌をひいてゐた。

『お、碧眼さんが歸つて来た。』

と皆んながびつくりして叫んだ。「碧眼」といふのが彼女の通り名であつたのだ。

『一杯お飲りよ、碧眼さん。こゝが空いてるぜ、サア此方へおいで。』

歓迎されたのは嬉しかつたが、もうくと煙草の煙りのこもつた室へ入ると、しきりに咳が出て呼吸が窒りさうだつた。

「いゝえ、わたし左様してゐられないの。女将さん居て？」

「あゝ彼處にゐるよ。」

すると彼女は、女将の方へ臆病らしい笑顔を向けて、

「わたしお願があつてよ、マダム。衣物を取りに来たの。これぢや寒くてやりきれないんですもの。」

「お前さんの荷物はみんな屋根部屋の方へ片づけさせておいたから、何處かにあるだらうよ。誰か見にやりませう。まア暖爐の傍へ来ておあたりよ。」

「えゝ難有う。でも、わたし左様してゐられないの。ちよいと出かけて、すぐ歸つて来るわ。」

戸口の方へ行きかけると、男の一人が後ろから冷嘲した。

「もう稼業をお始めかい。馬鹿に手廻しがいゝぢやないか。」

間もなく彼女は出ていった。一寸でも暖かい室内に入った後なので、外へ出ると寒さが一しほ身に

しみた。

墓地の近所へ来ると、墓詣りをする人々は、手に珠数だまや花束をさけて急ぎ足に歩いてゐた。或る者は眞黒な喪服をすつほりと被いで、悄然と力ない歩調をしてゐるかと思ふと、一方には華やかに着かざつて、饒舌をしたり高笑ひをしたりしながらやつて来る者もある。さういふ人々は、墓詣りと

いふことが普通の習慣となつてしまつてゐるらしい。「時」が彼等の悲哀を磨り減らしたのであらう。

舗道に沿うて、花屋の手車が一杯に押しならんでゐた。菊のちぢれた花と薔薇の房とが重なり合ひ含羞草は、その黄金色の花粉を董の束の上に散らしてゐた。墓地へ近くなるにしたがつて、石碑屋の前には、きれいな唐草模様や、くすんだ色で塗つた安物の花瓶が、棚の上に並べられてあつた。そしてもつと先きへ行くと、むぎわら菊の花環だの大きな珠数だまなどを賣つてゐた。

彼女は欲しさうな眼つきでそれ等のものを見た。何か、小さな花束一つでもいゝから買つて行きたいと思つた——墓地の片隅に、姓名の一字だも記されてないのつべらほうな土饅頭の下に横はつてゐる、あの哀れな男のために。

殺人者——そんなことは彼女にとつて何の意味もなかつた。只もう可愛い情夫、それは彼女の肉と精神のすべてを捧げた戀人であつたのだ。彼は、逆上した瞬間に人を殺めた。しかしその恐ろしい負目は、もう拂つてしまつたではないか。

今後は決して他の男と關係もしないし、今までの生活をさらりと止めて正業に立ちかへつて、眞面目な女にならう——そして、彼を一生の想ひ出として生きよう——それは、情夫が捕縛られた日に、堅く誓つたことであつた。

彼女は今、ちつと花を眺めてゐた。と、花屋が薔薇の花を突きつけて、

「花束ですか。菊はいかゞ。菫もございます。」

彼女は黙つて歩きだした。が、ふところに一錢の持合せもないと知りつゝ、やつぱり何か花が欲しかつた。何とかして手に入れたかつた——きつと花を供へるといふ約束をしたのだから。

初めは空腹と體の疲れで氣が遠くなりさうだつたが、今はそんなことも忘れてしまつて、墓場の土饅頭のことばかりを考へてゐた。せめて花束でも供へてその土饅頭を賑はしてやりたい。それには金だ。金をどうして手に入れよう。どうしたらいいだらう。

その際取るべき方法が、はつきりと胸に浮んで來た。それをしたからとて、死者に誓つた操を破ることにならうとも思へなかつた。

恰度、眞面目な職人が工場へ歸つて來ると、いきなり道具を握つて餘念もなく仕事を始めると同じやうに、彼女は機械的に髪を恰好をなほし、貧しい着物の襟をかき合せると、以前にし慣れた調子で街を歩きはじめた。

あの頃は、かうして街を稼ぐのにも張合があつた。何故つて、天にも地にもたつた一人の可愛い者であつたあの情夫が、宿のカツフェで花牌をひきながら彼女を待つてゐてくれたから——彼女はそんな

なことを思ひだしながら、腰にしなをつくつて、注意ぶかい視線を左右に投げつゝ歩いていつた。そして時々、すれちがふ男達へ低聲で呼びかけた。

『ちよいと……お待ちなさいよ……』

だが、彼女はあまりに焦悴れてゐた。男達は一眼見ると、逃げるやうにさつさと行つてしまつた。

彼女の顔は、もはや歡樂にふさはしい顔ではなかつた。體だつてもさうだ。骨ばつて、痩せこけた深い凹みが、薄い木棉の着物の上からも判然とわかるのであつた。

以前の美しくかつた時分、ほんたうに「碧眼」だつた時分には、見る人を惚々とさせたものだが、もうすつかり變つてしまつた。今は單に憫憐の對照にしか過ぎないのだ。

陽かけがだんく薄くなつて來た。ぐづぐづしてゐると、花も買へないうちに墓地の門が閉まるかも知れない。

霧雨は相變らず細々と降りつゞいて、すべてのものが灰色の陰影のなかにほかされかけてゐた。彼女の瘦せた顔の輪廓もおほろになつて、勢に燃える大きな二つの眼玉ばかりが人目をひいた。

折から、外套の襟を立て両手をかくしに突込んで、今寂しい街角を曲らうとしてゐる一人の男を見かけると、彼女はつと立ち塞がるやうにして、

『ちよいと……一緒にいらつしやいな……』

何となく、全身の切願がその聲にこもつてゐた。男はちらと彼女の方を見た。彼女はすぐに身を擦りよせたが、或る高い使命に勵まされてゝもゐるやうな眼付で、男の顔をぢつと見まもつた。

男は彼女の腕をとつた。それから間もなく、先刻のホテルへ連れこまれた。

『わたしの鍵と、燭臺をね。』

カッフエの戸口から女が性急に聲をかけると、女將が鍵と燭臺をもつて来て、

『部屋は二十三番よ。二階の三つ目の戸を開けるんだよ。』

と低聲に教へてくれた。カッフエにゐた男女が、好奇心に廊下を覗いてゐるらしい氣勢がしたが、彼女が容を連れて階段を昇りかけたときに、どつと笑ひ聲が聞えた。

暫く経つて彼女が再び階下へ降りて来たときは、殆んど暗くなつてゐた。で、あわたゞしく容を送りだしてから、また小走りに街へ出て行つた。そして最初に見つけた花屋の前で、掌に鳴らしてゐた銀貨を二つ投りだして、一番手近な花束を一つ買った。

それから、せつせと墓地まで驅けてゆくと、恰度墓參に入つてゐた人々が一團になつてぞろぞろ出て来るのに出つくわした。彼女ははつと思ふと身ぶるへがした。もう間に合はないだらうか？

門のところへ行くと、

『駄目々々、もう時間がない。』

と門番が止めた。

『お願いです、大急ぎで驅けて行つてすぐに歸つて來ます。たつた二分間……』

『ちや、行つてらつしやい。早く出なければいけませんよ。』

彼女は幾度も小石に躓いたりして、暗がりや夢中になつて驅けていつた。可成り長い道なので、呼吸がはずんで、胸が灼けつくやうに苦しかった。

辛とこのことで刑死者の墓地へ辿りつくと、彼女はそこへがつくりと膝まづいて、花を地べたに撒きちらした。熱い涙がひとりで湧いて来て、ひしと顔に押しあてた両手の指の間から止め度もなくはふりおちた。お禱りをあげたいと思つたが、その文句が頭にうかんで來ない。彼女はたゞ泣きながら大地に接吻をした。

『もし、お前さん、お前さん。』

と呼んでみた。體が綿のやうに疲れはて、手足は感覺を失つてゐたけれど、何だかほつと安心して氣が晴れ々となつたのを覺えた。

やがて彼女は起ちあがつて、また大急ぎで引きかへした。門番の前へ歸つて来たときは、微笑さへうかべていつた。

「ねえ、早かつたでせう。」

しかし、これで墓參も済んだ。戀人の傍へ行つて約束を果して来たと思ふと、またがっかりして急に寒さと疲れを覚えて来た。歩くのが漸とであつた。咳がしきりに込みあけて来るものだから、幾度か立ちどまつては、壁に倚りかゝらねばならなかつた。

辛とホテルまで歸つて来ると、轉けるやうに戸口を入つた。ホテルの連中は、例のむつとするうん氣と煙りの中でまだ花牌をひいてゐるが、彼女の顔を見ると皆んなが變に黙りこんでしまつた。

彼女は強ひて笑顔をつくつてゐた。と、隅の方にゐた一人の女が、椅子にそりかへつて嘲笑すやうに聲をかけた。

「ちよいと碧眼さん、今日の皮切りは素敵だつたわねえ。でも、厭な氣持ちがしたでせう、何ほ何でもね。」

碧眼は肩をすくめた。

「お前さん、先刻のお客、誰だか知つてゐて？」と前の女。

「いゝえ、わたし知らないわ。」

「ちや教へてあげよう。彼男はね、ル・バングよ。」

「え、何ですつて？……ル……？」

碧眼は口ごもつた。

すると、前の女はぐつと酒杯を乾してから、花牌を取りあけながらいつた。

「えゝ、ル・バングよ……あの死刑執行吏のサ。」

麥 畑

ジャン・マデックは、緩くり調子をとつてさつくと鎌を打ちこんでゆくと、麥穂は末端をふるはせ、さらりと絹すれのやうな音を立てつゝ素直に伏るのであつた。

ジャンは歩調を按排しながら、器用な手捌きで前へくと刈りこんで行つた。背ろには刈られたあとの畑が鶯色の地肌を現はし、そのところへくと小石原があつて、褐色になつた麥藁が厚く毛羽立つてゐた。

年老つた母親は、ジャンの後から腰をかゞめて、散らばつた落穂を拾ひあつめてゐるが、彼女の重い木履を引きずつてゐる足や、皺だらけの節くれだつた手や、襦袢衣物を着たその胴體だけを見ると、まるで獸が四つ足で這つてゐる恰好だつた。

太陽が地平線から昇ると、炎熱があらゆるものを押しつゝんで、田園全體が痲痺したやうになり、

そして耕地は爛熟した大きな果實のごとく、何ともいへない甘酸ばい香氣を發散するのであつた。

婆さんは落穂をひろひながら、口の中でぶつくと呟いた。

「コレ、嫁は今時分まで何をしくさるだ。何時になつたら來るかの。」

「正午には皆んなの辨當をもつて來るよ。」

婆さんは肩をゆすぶつて、

「何にしても、樂なもんぢやのう。」

「なアに何家の嬢も同じことよ。彼女はこゝへ來ても、小舎にゐても、せつせと仕事をしてゐるだ。」

「ふむ、彼様な仕事をな。」

婆さんはなほ地面を搔きながら、獨りごとのやうにいつた。

「旦那は今朝はまだこゝへ來ねえやうだの。大方彼女の傍にべたくとくつついて、手助けでもしてござらつしやるだらうさ。」

ジャンは鎌の手を休めて、

「何いふだ。」

「うんにや、何でもねえだよ。話がさ……た……」

ジャンはまた刈り進んで行つた。が、婆さんはもう一度獨りごとのやうに呟いた。

「お前の死んだ父親といふ人は、彼様な眞似大嫌ひでう。あの人が野良へ出たあとでは、わしは只の一度だつて、旦那の話相手になんかなつたことねえだよ。」

ジャンはまた顔をあげた。

「何だつておれに其様な話をするだ。」

「何でもねえがの、父親はお前なんかよりも氣が廻つてゐたつていふことよ。」

するとジャンはすつくと立ち直つて、

「な、何だつて？ そねえなこと云ふからには、何か理由があるべえ。」

「あるとも、婆さんは相變らず腰をかゞめたまゝで、『皆がお前やセリーヌの噂をしてゐるだ。何のかのと煩さくいつてゐるだよ。』

「誰がさ。」

「誰つてこともねえがの……皆ながよ……もつとも無理アねえだ、眼にあまることは見まいとしても見えるものだで。」

「出鱈目いつてゐるだ。」

しかし、婆さんは俵の打消しを聞かぬふりをして、爪先で土塊を弾きながら、

「お前のためを思へばこそ、此様なこともいふだよ。わしはお前の母親でねえか。隠し立ては厭だからう、後で怨まれるか知んねえが、云ふだけはいつておくだ。」

「皆んな出鱈目だつていふことよ。セリーヌはいゝ女房で、よく働いてくれるだ。それに、おれはこれつばかりも彼女に不自由はさせてねえだから、彼女が何でおれを袖にするもんか。」

婆さんはどつちつかずの身振りをして、

「知れたもんぢやねえわさ。」

といつたが、ふと調子をかへて、

「うんにや、わしは悪口をいふでねえ。利益を思へばこそいふだよ。彼女なんかは若い盛りでう、まだ面白い思ひがしたい年頃ぢや。土曜日つていふと、市場へ行くのに、しやれた服装もしたいぢやろ。誘惑にかゝるのは早いもんでな。それに、初めは何でもないやうに思はれるもんぢや。男の方でリボンだ、シヨールだ、櫛だ、時計の鎖だと、いろんなものを與れる。そんで貰つた女は、出物を安く買つたとか、往來で拾つたとかいふだ。それは左様かも知んねえがの……」

婆さんの一語々々がジャンの胸をるぐつた。先日女房が地主の旦那と一緒に町へ出かけて行つて、

夜になつてから歸つて来たことがあつたが、その日曜日には、彼女が木理リボンをつけ、薄紗のショールをかけてゐたのを彼は思ひだした。殊に黄金の鎖が目立つた。しかも彼女はそれを往來で拾つたといつてゐたのだ。

婆さんは例の單調な聲で話しつゝけた。

「わしは彼女の悪口などいひともねえがの、亭主つていふものは、年中嬢の傍にばかりくついでゐられるもんぢやねえだ。毎日野良へ出なけりやなんねえし、また兵隊の召集で、一月も小舎を空けることもあるべえに。」

ジャンはもう、母親の言葉なんか聞いてはゐなかつた。鎌を杖いてその上に腕をくみ合せ、何處を見るときもなくきよとんとした眠つきをして、涙もなく種々なことを思ひだしてゐた。些細な出来事までも記憶にうかんで来たが、それ等はみんな母親の暗示を裏書きする材料なのであつた。

女たらしの主人は、他の作男にはがみく小言をいふくせに、自分にだけ特に優しく目をかけてくれる。それといふのも、女房が婀娜女なせるにちがひない——さう考へて来てふと思ひだしたのは、もう一週間経てば軍隊の方へ一ヶ月も召集されて、その間留守にせねばならぬことであつた。

そのとき、耕地の端れの大木の下から人の呼び聲がしたので、ジャンはふと顔をあげると、黄金色

の麥穂の上から、彼の女房の上體がちらと浮きあがつた。と思ふとその背ろの數歩離れたところに、つば廣の帽子をかぶつた赭ら顔の主人が、太短いステッキを振りながら畑の間を歩いてゐるのが見えた。

「晝食だよう。」

晴々した聲がひゞきわたると、麥畑の處々からほつ／＼起ちあがつた作男等は、皆んな木蔭に集まつて来て、やがて晝食をはじめた。

その中で、ジャンは獨り黙りこくつて麵麩を割いてゐると、

「どうしたんだ、マデック、いやに沈黙してゐるぢやないか。」

主人が聲をけると、

「お前さん、氣分がわるいんぢやないの。」

と女房も聞いた。

「うんにや、お日様にひどく照りつけられたせるだよ。小舎で休んだらえ、かも知んねえ。」

すると主人は莞爾して、

「うむく、それがよからう。」

晝食を終へると皆んなが晝寝をした。少し涼しくなるまで骨休めをする習慣になつてゐるのだ。ジャンはしかし、眠らなかつた。腹ん這ひになつて頬杖をついて、ぢつと考へこんでゐた。二時が鳴ると、作男等は起きだして仕事にかゝつた。そよとの風もない黄金色の麥畑に、さつきさつくと刈り込む節調的な鏝の歌がまたつゞいた。

皆んなが仕事をやつてゐる間、主人は長々と寢をべつて、眠さうな聲でジャンの女房を呼んだ。

「おいセリーヌ、お前縫針を持つてゐるかい。」

「ござりますよ、旦那さま。」

「そんならこゝへ来て、わしのブルーズを繕うてくれ。乳牛は皆んな牧場へ放してあるし、あれ等を牛舎へ入れるまでにはまだく間がある。おゝ、こゝも暑くなつて来たぞ。わしは林檎の樹の下へ行つてゐるから、お前も束ねが済んだら彼處へ来てくれないか。畦を歩くんぞ、麥を倒すと可けないからな。」

男女は竊み笑ひをした。ジャンは注意してゐたので早くもそれを見て取つた。そして彼は何か物にいひさうにしたが、そのまゝ黙つて首をうな垂れて自分の持場の方へ歩いて行つた。

婆さんが小舎へ歸つてしまつたので、今度は女房が彼の後について来た。

女房が束をしめあげたとき、彼は振りむきもしずに聲をかけた。

「お前は先刻旦那の仰しやつたことを聞いたかね。」

「あゝ聞いたよ。」

「そんなら、何でぐづぐづしてゐるだ。」

「今行くよ。」

かゝんだまゝに、亂れた後れ毛を掻きあげてから、両手を腰へあてゝ、派手な裾著の下でくるつと胴體をひねると、彼女は矢車菊を一本唇に啣へて、畦つたひにすたゝ歩きだした。

彼女の姿は海にでも入るやうに、次第に草の中へかくれて行つた。そして彼女の林檎の樹のところまで全く見えなくなつたとき、ジャンは再び刈り方をつゞけた。

彼はしかし、午前中のやうな落ちついた輕快さを失つてゐた。性急に進んだかと思ふと、突然手を休めたり、また思ひだしたやうに遣りはじめたりするのであつた。うつ向いて、口を堅く結んで、額にはむづかしさうな八の字をよせてゐた。

婆さんに聞いた言葉の一つくが、胸の中で新酒のやうに醗酵して来た。頼頭のあたりがづきんづきんして、總身が憤恚で酔つぱらつてゐるやうであつた。最初は半信半疑だつたけれど、今の先目撃

した事實によつて、それが間違ひのない、しかもいよく確かなことのやうに思はれて來たのだ。彼は前へくと刈り進んで行つたが、何だかあの林檎の木蔭で女房と主人が笑ひ交はしたり、接吻したりしてゐる容子がまさまさと眼に見えるやうな氣がした。全身の力を腕にこめてぐんぐん刈つてゆくと、後ろには麥穂の束が續々とところがり、そして、鎌に喰はれたあとの畑が急に廣々となつて見えた。彼は血氣旺んな時分でさへ、こんなに仕事の捗つたことがなかつた。

「おうい、一日で刈り仕舞ひにするかよう。」
遠くの方から、作男の一人が聲をかけると、

「さうかも知んねえ。」

とジャンは腰ものばさずに答へた。

やがて、かの林檎の樹から數メートルのところまで進んで行つたとき、彼はふと手を休めて、聴き耳をたてると、そこにひそく話が開えた。それは確かに女房の聲で、

「厭……あの人に見つかるかと大變よ。」

「しつ、彼はまだ向うの端れにぐづぐづしてゐるんだよ。こゝまで刈つて來るには、半時間も間のあ

ることだ……どれ、もつと傍へお寄り。」

ジャンは陽に炎けた顔を眞蒼にして數秒間立ちすくんだが、屹度思ひ定めた風で再び刈り進んだ。しかし今度は歩調をゆるめて、音を立てないやうに靜かに鎌を捌きながらやつてゆくと、もう少しでかの林檎の樹の下へ出ようとするたん、ふと接吻の音が聞えて來た。

ジャンはすつくと起ちあがると、物すごい形相で鎌を振りあげたが、その刃先が陽にきらめくよと見る間に風を切つて打ちおろされた。きやつと消魂る叫びと、もに宙に飛んだ二つの首級がもんどり打つて地面へころけ落ちると、さらさらといふ音がして、折れた麥穂を鮮血に染めた。と、眞紅になつた鎌が高く投げだされた。

ジャンは鎌を投げ棄てると、血染めの兩手を振りながら叫んだ。

「誰か來てくれい。人がゐるとは知らねえで、おらアどえれえことをやつたぞ！」

乞食

夜は刻々に暗くなつてゆく。

一人の老ほれた乞食が、道ばたの溝のところに立ちどまつて、この一夜を野宿すべき恰好な場所を物色してゐる。

彼はやがて、一枚のあんべらにくるまつて身を横へると、小さな包みをば枕代りに頭の下へ押しこんだ。そのあんべらは彼にとつて殆んど外套の代用をなしてゐるものであるし、またその包みは年中杖の尖にぶらさけて持ちあるいてゐるのである。

彼は飢と疲れでがつくりと仰臥になつたまゝ、暗い蒼穹にきらめく星屑をうち眺めた。

街道は森閑と茂つた森にそうてゐて、人つ子一人通らない。鳥はみな塙にかへつてしまつた。向うの村は大きなどす黒い汚點のやうに見えてゐる。老乞食はかうした寂しい場所にちつと寝ころんでゐると、何だか悲しくなつて来て、喉に大きな塊りがこみあけて来るのであつた。

彼はまるつきり両親といふものを知らない。元來捨て見だつたのを、或る百姓に拾はれて暫く育て

られたが、また捨てられてしまつた。それで、子供の時分から路傍に物乞ひして辛と生命をつないできた彼は、生きてゆくことの辛苦を厭といふほど嘗めさせられたのである。それに、日蔭ばかりをくぐつて来たものだから、世の中については悲惨といふことの外には何も知らない。長い冬の夜は、水車場の軒下で明かすのだ。彼には、物乞ひをする恥と、むしろ死にたいといふ望み——再び醒めざる眠りにおちたら如何に樂だらうといふ懼れがあるだけで、その外に何の考へともない。

世間のすべての人が彼に對して情なくも疑りぶかいのだが、一等困るのは、皆んなが彼を怖がつてゐるらしく思はれることである。村の子供等は彼の姿を見ると逃げ隠れるし、犬どもは彼の汚いほろ服に吠えつく。

それにも拘らず、彼は他人に對して悪意といふものを持つたことがない。貧苦のために痴鈍になつたとはいふものゝ、元來樸訥で優しい氣象を彼はもつてゐるのである。

彼は今うとくと眠りかけたが、ふと向うから馬の鈴の音が聞えて来た。顔をあげると、燈りが一つちらりと街道を動いて来るのが見える。彼はほんやりその燈りを見つめてゐると、やがて一臺の

大きな荷車と、それを牽いてゐる一頭の逞ましい馬がはつきりと見えて来た。その荷馬車は非常に高く荷物を積んでゐて、街道一杯にふさがつてゐるやうだ。そして一人の男が鼻唄をうたひながら馬の傍を歩いてゐる。

唄は直きに杜絶えた。と、道が登り坂になつて、蹄鐵のはけしく石に觸れる音がする。馬子はびしやり／＼と鞭をあてながら、尖り聲で馬を叱りとばしてゐる。

「それつー しつかり！」

荷が重いものだから、馬は満身の力をしほつて、頸が精一杯に前へのびる。二三度立ちどまつて膝を折りさうにしてはまた起ちあがる。そしてその度に、肩のあたりから後脚へかけておそろしく緊張する。

そのうちに曲り角へ来て馬車はぱつたりと立ちどまつた。馬子は車輪に肩をあて、兩手で輻を押しながら、

「それ、畜生、レクかり！」

と一層はげしく呶鳴る。馬はあらゆる筋肉を緊張めて懸命に前へ牽きださうとするけれど、車臺は微塵も動かない。

「こらつー しつかり！」

馬は、重荷のために後退りするのを防がうとして、蹄にこめた満身の力でふるへながら、脚をひろげ、鼻息をふう／＼喘ませてゐる。

そのときに馬子は、溝の縁に半身を起してゐる乞食を見つけて聲をかけた。

「おい大將、手を貸してくれないか。こん畜生がどうしても動かうとしない。こゝへ来て一緒に押してくれ。」

乞食は起きあがつた。そして、その弱い力のありつたけをふり搾つて後押しをやつた。

「こら、よいしよ！」

馬子と聲を合せて怒鳴つた。けれども徒勞だつた。

乞食は直きにくつたりと疲れてしまつた。それに、馬が可憫さうで堪らなくなつた。

「少し息をつかせておやりよ。これぢや荷が重過ぎらア。」

「重いことがあるもんか。此馬意久地がねえんだ。我がまゝをさせると癖になるから駄目だよ。さあ畜生、しつかりしろ！……大將、石を一つ拾つて来てくれ。車が退らからねえやうに止め石に使ふんだ。そして斜かけに登らせよう。」

乞食は大きな石を一つ拾つて来た。

「かうするんだ。」と馬子はいつた。「おれが後押しをやるから、お前は馬の頸を左の方へ向けて、鞭で脚をうんと引ばたいてくれ。さうしたら動くだらう。」

鞭で打たれる苦しさ、馬はもう一度はけしい努力をやる。蹄鐵で小石を蹴るたびに火花が散る。

「その意氣、その意氣。」

斜かけに牽きださうとして、馬がうんと一つ踏んばつたので、馬子はべたとばかり、止め石を當てるために車臺の下へかゝんだ拍子に足がこつた。と同時に馬がたちくと後退りをしたものだから、馬子はアツ！と叫んで打倒れた。

彼は仰向けになつたまま、今にも胸へのしかゝらうとする轡をば、両手で精一杯に支へてゐる。肱がその重さで地面へ喰ひこみ、顔面はひきつり、眼はつり上つてゐる。

彼は苦しい聲をふりしほつて、

『馬を前へ出してくれ。おれはもう轢かれさうだ。』

乞食は、見なくても、想像でその状態がわかつた。そこで彼は轡を引張つたり、鞭でひつ叩いたりして一生懸命に馬を出さうとするけれど、拗ねた動物は却つて膝を折りまけて、どたりと横つ倒しに

なつた。と、車臺が前のめりして、轡棒が地面にくつついた。

カンテラがひつくりかへつて燈が消えた。

あとは寂然たる夜の闇で、何の物音もなく、たゞ馬の鼻息と、もに馬子が呼吸づまるやうな聲で、

『馬を出せ、前へ出せ。』

と喚いてゐるだけだ。が、乞食はどうしても馬を起ち上らせることが出来ないものだから、断念めてしまつて、今度は馬子の方へ行つて彼を救ひ出さうとした。しかし馬子は、もう一二吋で體へ觸れさうになつてゐる轡をば両手にこめた満身の力で僅かに支へてゐるけれど、今に精根がつきると轢き殺されるのだ。とても身動きなど出来るものでない。それは自分にもよくわかつてゐた。だから乞食が屈みかけたのを見るとあわてゝ怒鳴つた。

『おれに觸つちやいけない……觸つちやいけない……それよりも早く村へ驅けて行つて、おれの家へ知らせてくれ……リユシャつていふんだ……村の右側の、つつかけの家だ……早く助けに來いといつてくれ……まだ十分間は支へてゐられさうだ……早く……早く……』

乞食は夢中になつて驅けだした。丘を登つてまつすぐに村の方へ驅けて行つた。村ではどの家もみな鎧戸が締まつてゐて、街道は眞暗で、人つ子一人通らない。犬どもは彼の驅けて來るのを見るときは

けしく吠え立てた。が、彼は夢中で何も聞かず、何も見なかつた。丘の下で轢き殺されさうになつてゐる男の、おそろしい幻影ばかりが目先にちらついた。

乞食はやがて立ちどまつた。街道はそこから平坦になつてゐる。右手の突っかけに一軒の百姓家があつて、窓の隙間から一條の燈影がもれてゐる。この家にちがひない。彼は拳骨でその鎧戸をどんと叩くと、

「歸つたのか、ジュール。」

屋内から聲がする。だが乞食は息切れがしてゐるので返事が出来ない。やたらに叩くばかりだと、やがて寢臺の軋る音と、床に蹠音がした。それから窓が開いて、眠さうな百姓が燈影へぬつと顔を出した。

「歸つたのか、ジュール。」

そのとき乞食はやつと物がいへるやうになつた。

「うんにや、おれだよ。あのね……」

けれども百姓は皆まで云はせなかつた。

「手前何だつてそんなところにうろくしてゐるんだ。夜夜中人を叩き起しやがつて。」

びしやりと窓を締めきつて、

「無宿者奴、碌でもねえ野郎だ。」

その邪慳な聲と仕方につくりして、乞食はそこに立ちすくんだまゝ考へた。

「おれの用を何だと思つてるんだらう。おれは何も悪いことをするんだやなし、叩き起したつていぢやないか。奴は何も知らねえんだな、可憫さうに。」

彼はまた恐るゝ鎧戸を叩いた。

「まだぐづぐづしてゐるかッ、畜生、取つちめてやるぞ。」

屋内から今の聲が怒鳴つた。

「開けてくれ。」

「歸れ〜。」

「うんにや、開けてくれ。」

そのとき凄まじい勢ひで再び窓が開いたものだから、乞食は面喰つて跳びのいた。百姓爺が癪癪をおこして鐵砲を持ちだしたのである。

「おれのいふことが聞えねえか、乞食奴。ぐづぐづしてゐると鐵砲彈ア喰はせるぞ。」

つゞいて寢床の中から憤つた女の聲で、

『射つておやり、人助けになるよ、ほんたうに。無宿者なんか盗みでもするより藝がありやしない。盗みどころか、彼奴等ほもつとく悪いことをするんだよ。』

乞食は銃口を向けられるときよつとして暗がりへ隠れた。彼は思はず身ぶるひした。が、恐怖のため一寸の間忘れてゐた哀れな馬子のことをまた思ひ出した。今頃はあの街道で七轉八倒の苦しみをやつてゐるだらう——さう思ふと、邪慳なこの爺が堪らなく癪にさはつて來た。

たとへ食べものや寢所が欲しさに戸を叩いたとしても、牛小舎の隅の藁床へなりと寝かしてくれたつていゝぢやないか。犬に食はせる麵麴の片らぐらゐる願けてくれたつてよさうなものだ。いかにほろ服を着てをればとて、金持ちの奴等がおれを殺さうと脅かすなんて、あんまり馬鹿にしてゐるやがる——さう考へると、一種の狂暴な憤りが全身を走つた。

彼は杖で鎧戸をしたゝか叩いてやらうとしたが、ふと思ひかへして、

『いや、そんなことをやると、彼爺發砲するぜ……聲を立てると村の奴等が起きて來て、おれを半殺しの目に遭はせるだらう。おれが何をいつたつて聴くもんか……何處へ行つても手を借してくれぬ奴なんかありはしない。おれがひどい目に遭はされるばかりだ。』

彼はちよつと考へたあとで、他手を借りすにもう一度あの男を救ひだす工夫をしようと決心して、元の場所へ引きかへした。彼は狂氣のやうに驅けだした。

『あれから何うしたんだらう。あすこで、惨たらしく死んでゐるのではあるまいか。』
かうした恐怖が、彼に若者のやうな脚の力を與へた。

荷馬車のあつたところへ行くと、いきなり聲をかけた。

『おい。』

返事がない。

『おい、どうした。』

眞暗で馬は見えないけれど、嘶きを便りに行つてみると、元の場所から少し退つたところに、馬は相變らず横つ倒れになつてゐた。車臺がそれだけ後退りをしたのである。

『おい、おい。』

乞食は身をかゝめて、折から雲間をもれた月光にすかして見ると、かの馬子は兩手を十字架のやうにひろけて、眼を塞いで、口から血を吐いてゐた。そして重い轍は丁度軌道にでも載つたやうに、ぎつしりとその胸に喰ひこんでゐた。

乞食は、果敢なく死んでしまつたこの男のために、もう何の助けにもならなかつた。と、ますくこの男の両親の仕打が腹立たしくなつた。

「おれは復讐をするんだ。」

乞食はもう一度かの百姓家へ駆けて行つた。今度は鐵砲なんかを眼中におかないで、むしろ一種の残酷な歡びをもつて、先刻の鎧戸をがんく叩いた。

「歸つたのか、ジュール。」

乞食は黙つてゐた。

やがて窓があいて爺の顔が出て、再び同じ問ひをくりかへしたとき、彼はやつと答へた。

「うんにや、先刻の乞食だよ。お前さんとこの忤が街道で死にかゝつてゐるから、知らせに來たんだがね。」

すると母親のおろく、聲が爺のそれとこんぐらかつて、

「な、何だつて。こつちへお入り、早くく。」

だが乞食は帽子のひさしを眉深にひきおろして、

「騒いだつて駄目だよ。先刻おれが來たときに慌てなければならなかつたんだ。お前さんとこの忤は

な、可憫さうに、重い荷馬車を胸に載つけてゐるぜ。」

捨て臺辭をいつて、のつそりと歩きだした。

「早くく、父さん。」母親はわめき立てた。「驅けて行くんだよ、驅けて。」

父親はあたふたと着物をひつかけながら怒鳴つた。

「場所は何處だい。おい、行つてしまつちや駄目だよ……聞かしてくれ、後生だから……」

だが乞食は例の杖を背負つて、早くも闇の中へ消えてしまつてゐた。

四邊はひつそりと靜まりかへつて、答へるものとはたゞ、人聲で目をさました雄鶏が糞堆の上でけたましく鳴いたのと、頸を高くもたけて月に遠吠えする犬の聲ばかり。

青
蠅

男は、死んだ女のそばに突立つて、平然とその屍體を見まもつた。

彼は眼を細めにあけて、大理石の石板に横へられた女の白い體と、胸の只中をナイフで無残に剝られた赤い創口とを見た。

屍體はすでに硬直してゐるにも拘らず、完全な肉附の美しくさは、まるで生きてゐる人のやうだ。

たゞその餘りに蒼白くなつた手の皮膚や、紫色に變色した爪や、くわつと見ひらいた兩眼、氣味わるく齒を露はしてゐる黯ずんだ唇——それ等のものが永久の眠りを語つてゐるのだ。

石で床を鋪きつめたその不氣味な廣い室は、鳥窠まるやうな沈黙で壓つけられてゐた。屍體の傍には、今までそれを包んでゐたらしい、血痕の附着した敷布があつた。臨檢の役人たちはそのとき一齊に、被疑者であるその男の方へ眼をつけたが、男は二人の看守に護られながら、しやんと顔を擡げ、

背ろへ兩手を廻はして、相變らず傲然と突立つてゐるのであつた。

やがて判事が審問をはじめた。

「これ、ブルダン、お前は自分で殺したこの被害者を見知つてゐるだらうな。」

男ははじめて判事の方へ顔を向け、一生懸命に記憶を喚び起さうとして、死人の上に注意をあつめてゐるらしい風であつたが、

「まるつきり知らない女です。見かけたこともありません。」

と落ちついた聲で彼は答へた。

「しかし、お前がこの女の情夫であつたといふことを、大勢の證人が申立てゝゐるではないか。」

「證人の申立はみな違つてゐます。まつたく知らない女です。」

「よく考へてから答へるがよい。」判事はちよつと沈黙したあとでいつた。「われ／＼を誤魔化さうたつて、さうは行かんぞ。今日の審問はほんの形式上のもので、これでお前の裁判が決定するといふわけではない。お前は立派に教育のある男だ。寛大な判決を下して欲しいと思ふなら、こゝで自首する方が、お前の利益にいゝだらうがなア。」

「身に覺えないことは、自首の仕様がありません。」

「もう一度注意するが、強情を張ると利益にならんぞ。多分激昂して發作的に殺したんだらう。この屍體を御覽。この慘たらしい死態を見て氣の毒とは思はんか。後悔もしないか。」

「自分で殺しもしないのに、どうして後悔が出来ませう。そりや私だつて感情といふものがありますから、死者を可憫さうだとは思ひます。しかしその憫むといふ感情も、此室へ入れればこんなものを見せられると豫期したゝめに、よほど薄らいで大方貴方と同じぐらゐの程度になつてゐます。これ以上に感動しろといふのは無理なことで、もし感動しないのが悪いと仰しやるなら、この光景を平氣で見ても可い。貴方を、反對に私が告發して差支ないといふ理窟になるではありませんか。」

男は身振り一つするでもなく、まつたく自分を制しきつたものゝやうに、落ちつき拂つた口調でかういつた。峻厳な判事の訊問に對しても、この言葉で無難に切り抜けたやうに見えた。彼の唯一の對抗策は、只もう冷靜に頑強に事實を否定することであつた。

そのとき下役の一人が低聲でいつた。

「此奴は決して實を吐きません。絞首臺に立たされてまでも抗辯するでせう。」

ブルダンは、それを聞いて些しも腹を立てた様子もなく、やり返した。

「さうですとも。絞首臺に立たされたつて、私の云ふことに變りはありません。」

暴風雨を含んだ蒸著さに加へて、判事と被疑者が互ひに激昂するものだから、室内は一そう息づくしくなつて來た。この犯人はあらゆる證據にも屈しないで、飽くまでも「否」と答へるのである。西に傾いた夕日は、汚れた窓硝子を透して、そのぎらくする金色の光りを屍體の上に投げかけてゐた。

「うむ、お前はこの女を知らんと云ふんだな、しからは訊ねるが、この兇器に見覚えはないか。」

判事はさういひながら、象牙柄の大型のナイフをつきつけた。血痕がその強靱な刃先から一面に附着してゐた。

男は兇器を手に執つてしばらく眺めてゐたが、やがて看守の一人にそれを返して、血に汚れた指を拭きく、

「こんなナイフは、ついぞ見たこともありません。」

「飽くまでも否定するんだな。それがお前の豫定行動なんだらう。」と判事は冷笑して、「しかしこのナイフはお前の所持品に相違ない。不斷お前の書齋に置いてあつたもので、大勢の人が見てよく知つてゐるのだ。」

すると被疑者はちよつと腰をかめて、

「その人達はみな思ひ違ひをしてゐるのです。」

「黙れ。」判事は怒鳴つた。「他に疑はしい點がないとしても、こゝに一つ最後の有力な吟味が残つてゐる。それは外でもないが、被害者は頸部を締めつけられた形跡がある。この五本の指の痕がお前にも判然見えるだらう。しかも加害者は特別に指の長い男だといふことは、法醫學者も鑑定を下してをる。さア皆さんの前へ手を出してみろ。それ、どうぢや。」

判事はかういつて、屍體の頸をぐいと引きあげた。

成るほど、頸部の白い皮膚に、五本の指痕が紫色を呈して鮮やかに残つてゐた。大きな木の葉の形に似て、しかも末端のところは、爪が喰入つたらしく、肉が深々と掘られてゐた。

「これがお前の仕事さ。お前は左手でこの可憐さうな女の頸を絞めながら、右手で胸にナイフを突き刺したのだ。こゝで、その晩の行動をもう一度繰りかへしてみろ。頸の傷痕へお前の指をあてるんだ。さア此方へ出ろ。」

ブルダンは一瞬間ためらつた。それから肩をすほめて、憤然とした聲でいつた。

「私の指が傷痕に合ふかどうかを見たいと仰しやるんですか。合つたとしても、それが何で證據になりませう。」

彼は石板の方へ歩み寄つた。顔色は人にもわかるほど蒼ざめ、齒を喰ひしぼり、眼は張りきつてゐた。彼はしばらく靜然と立ちすくんで、硬ばつた屍體を見据ゑてゐたが、やがて自動人形のやうな動作で衝と手をのべて屍體に觸れた。

と、その冷たい、じつとりした感觸から體がぞくぞく、慄へだし、指先は座學的に緊張して、自然と屍體の頸を絞めつけるやうに力がこもつて來た。

死んだ女の硬ばつた筋肉は、男の指の壓迫によつて生きがへりでもしたやうに、頸骨から頸の尖までぐびりと動いたとたんに、物凄くむき出してゐた白齒がおのづから隠れて、口は大きな欠伸でもするやうにがつくりと開いた。と、その乾いた唇が弛んで、再び露はれた齒を見ると、濃厚なぬらぬらした鳶色の粘液が一杯に蔽さつてゐた。

役人達も思はずつとした。

ところが、このがつくりと開いた口から、謎のやうな物すごい不思議が起るのである。そもくこの口が開いたときに、墓の彼方に通ふ末期の聲にも似た一種の音響を發したが、直きに舌が捲かれて咽喉へ塞へたので、その音響はばつたり止まつた。

すると突然に、何ともわからぬ一種の音——蜂の巢のそばで聞く羽音のやうな音がした——と思つ

てゐるうちに死人の黯すんだ口腔の中から、羽のぎら／＼光つた大きな青蠅が一匹、ついと飛びだした。

この青蠅といふ奴は、納骨所に發生て、あの糜爛した屍體を喰つてゐる奴で、何とも形容の出来ない厭な生物の一つだが、此奴が今女の口腔から飛びだすと、微かな羽音を立てながら、恰かも近づくと者を警戒でもするやうに、一しきり屍體の周囲を飛びまはつてから、やがてちつと羽を据ゑてゐるが突然ブルダンの蒼ざめた唇めがけてまっすぐに飛んで行つた。

ブルダンは吃驚して拂ひのけた。けれどもこの怪物はしつこく舞ひ戻つて來ては、その有毒な肢を踏んばつて一生懸命に彼の唇に縋りついた。

ブルダンは呀といつて跳び退いたが、眼は狂ほしく釣りあがり髪は逆立ち、兩手をひろげてぶるぶる顫へながら、まるで狂人のやうになつて叫んだ。

「白状します……實は私が殺つたのです……私を彼方へ連れて行つて下さい……早く連れて行つて下さい。」

フエリシテ

彼女はフエリシテといふ名前だつた。貧しい女で、美人でもなく、若さも、う失はれてゐた。

夕方、方々の工場の退け時になると、彼女は街へ出て、堅氣女らしい風でそゞろ歩きをした。ときどき微かに歩調をゆるめたかと思ふと、また元のやうに歩いて行つた。

他の子供等が裾にからまつて來ると、彼女は優しい身振りでそれを避けたり、抱きとめたりした。そしてその母親たちには莞爾やかな笑顔をむけた。

彼女は元來饒舌や騒々しいことの嫌ひな性分なのに、かうして雑鬧の中へ入つてゆくのは、そこでは他から勘づかれないで男達の合圖に答へることが出来るからであつた。一體にさうした愼ましい風なので、刑事達も特に彼女を大目に見てくれたし、近所の人々も出會へば簡単な挨拶を交はすぐらゐるの好意はもつてゐた。

彼女は全くの獨り暮りで、格別楽しみもない代りに大した苦みもなく、さうした果敢ない職業にも拘らず、ごく自然な從順さと淑かさをもつてゐた。だから誰一人彼女を蔑む者もなかつた。彼女だつて以前は人並に贅澤もしたかつたゞらうし、歡樂に惚れもしたゞらうが、今はそんなことはすつかり斷念めて、只もう生きてゆくだけで満足してゐるのであつた。

ところが或る晩——街には終日雨が降りつゞいて、濡れた歩道の上に夜の幕が落ちかゝつた時であつたが、そろ／＼家へ歸らうとしてゐると、一人の男——「旦那」と呼ばれさうな男がふと彼女に聲をかけた。

「今日は、フェリシテ。」

「今日は、ムツシウ。」

「あなたは僕を覚えてゐるでせう。」

「え、／＼。」

彼女は單にお愛嬌のつもりでいふと、男はすぐにつけ加へた。

「厭な雨ですね。傘にお入りなさい、さア腕を組みませう。」

彼女はいはれるまゝに男と腕を組み合せた。さうして兩人は、人通りの絶えた街を相合傘で歩いて

いつた。フェリシテはこんなところを他に見て貰へないことを、少し残念にさへ思つた。

男はやさしく話しかけてゐた。街燈の下へ來たときにフェリシテはふと相手を見ると、齡は四十五六、好男子ではないが、少し陰氣くさい、人の好さ／＼な顔で、何だか見かけたことのある人だと思つた。

やがて宿の前へ來ると、彼女は立ちどまつて、

「こゝですわ。」

「もう遅いから駄目。それに、僕は友人から晩餐に招かれてゐるんですがね、お忙しくなければ、談しながらそこまで送つて行つて下さいませんか。」

フェリシテはびつくりした。しかし非常に嬉しかつた。男の口の利き方が、堅氣の立派な婦人に話しかけるやうな調子で、いかにも優しく丁寧だつたからである。

「いゝえ、ちつとも忙しいことはありません。閑でございますわ。」

二人はまた歩きだした。途々、男は自分の生活について少しばかり——それも重大な方面ではなく——職務のことだとか、役所の時間だとか、毎晩食事をする小さなレストオランのことなどを話してくれた。彼女は黙つて聞いてゐた。人からそんな風に親しく話しかけられたことは、ほんたうに久し

ぶりだつた。が、彼女は何だか極りがわるいやうな気がして、自分自身のことは何も話さなかつた。やがて或る街かどへ來ると、男は歩調をゆるめて、

「これが友人の家です。一しよに歩いて貰つてほんたうに愉快でした。えゝと、今日は火曜日なんですが、あなたは土曜はお忙しいですか。」

「いゝえ。」

「お邪魔でなければ、五時頃ちよつとお禮に行きますよ。左様なら、フェリシテ。」

「左様なら、ムツシウ。」

フェリシテは自分の部屋へ歸つたが、それから毎日ちよいく思ひだしては「あの紳士は程のい、人だ。」とおもつた。

約束の土曜日には、例日とちがつて一步も外出しに、暖かい室で靜かにその人待ちまうけてゐると、五時頃に、彼は菓子を手土産にもつてやつて來た。さうして二人の向き合つた食卓には、ちよつと律儀なブルジョワらしい気分がたゞよつた。

七時になると彼は歸つて行つたが、何だか時が大變早く過ぎたやうな気がした。

次の土曜日にも、彼は訪ねて來た。それからといふものは、土曜日ごとに必ずやつて來た。そして

今ではそれが二人の間の約束のやうになつてしまつたのである。一週に一回、土曜日の、その時刻になると、ムツシウ・カシユウ——女は蔭で彼を思ひだす時でさへも必ずムツシウといふ敬稱をかぶせるのであつた——は、極まつて菓子の包みを提げてやつて來た。

二人は語り合つた。彼女は單に話のきつかけのために、自分の許に起つたことをごく簡單に聞かせたりした。男の方では主に役所のことを話してくれた。女が自分の職務にも興味をもつてゐてくれるらしいので、同僚の姓名を教へたり、やがて給料の昇る話などもした。ときん、新聞を讀んでくれることもあつた。フェリシテはその新聞記事でさまざまな事象の説明を聞きながら、その人が何でも心得てゐるのにひどく感心した。

土曜の晩ごとに靜かに語り合ふといふことが、今では一つの習慣になつてしまつた。彼女は毎週土曜日の來るのを待ちに待つて、その二時間をば慰樂として過すのであつた。彼女はまつたく親身に男を待遇した。或る晩、男が足がびしよ濡れになつてやつて來ると、彼女はすぐに美しく刺繡をおいたスリツパをこしらへた。そして次の土曜に彼が來たとき、その綺麗なスリツパがちやんと暖爐のそばに揃へてあつた。一體がそんな風だつた。

やがて春が來て、また夏が來た。二三度、穏かな晩に、二人は人目に立たぬやうに少し遠方の小料

理店へ出かけて行つて一緒に食事をしたこともあつた。

「わたしはあの人に惚れてゐるだらうか。」

彼女は時折自分に問うてみたが、男の少し陰氣な、好人物らしい顔を見ると、やはり戀してゐるのではないと自ら答へる外はなかつた。只もう彼を待ちまうけることが大きな喜びで、傍に彼のゐてくれることが非常な幸福であり、そして自分がさうした紳士の話相手であると思へば、ひそかに誇りを感ずるのであつた。

長年の間目的も前途もなく、その日々を單調に暮らして來た彼女にとつて、この土曜日ごとの二時間といふものは眞に懐かしい安息だつた。一週間のくさくさする思ひをば、土曜日にしんみりこの人と談が出來るといふ希望で僅かに慰めてゐるのであつた。

かうして二年は過ぎた。それは彼女の一生涯のうちで最も平和な二年間であつた。男はいつも「今日は、フェリシテ。」と挨拶しながら入つて來て、歸るときは極つて、「また來週の土曜日に。」といひ残した。

只の一度も爭論などしたことはなかつた。さうした交情は、彼女にとつては恰かも終身年金の支拂をうけてゐるやうなもので、それが突然に終りをつけるといふやうなことは夢にも思へなかつた。

ところが或る晩、男は常よりも早くやつて來た。それはまつたく珍らしいことなので、フェリシテはびつくりした。

「今日は、フェリシテ。」

戸口を入ると男はすぐにさういつたが、例の簡単な挨拶ながらその日は妙な調子で、聲もすつかり變つてゐるやうであつた。

彼はもつて來た菓子のお包みを卓子においたまま突立つてゐると、

「さアお掛けなさい。」

フェリシテは椅子をすゝめた。男はその椅子に腰をおろして暖爐の方へ脚を投げ出したので、彼女もいつものやうにスリッパを出しかけると、彼はやさしくそれを押しつけて、

「今日はさうしちやゐられない。それよりも、お前に話さねばならぬことがある。フェリシテ、僕はもうこゝへ來られんやうになつたよ。實は結婚をするのでね。いゝ齡をして極りのわるい話だが、しかしこの齡になると、やはり自分の家庭といふものをもつて、身の廻りの世話をしてくれる者がゐてくれないと困るんだ。」

フェリシテはうつむいて黙つてゐた。

「僕は最近二年間痛切にそれを感じるやうになつたが、そのことが泌々わかつたのも實はお前のお蔭なんだよ。僕は毎土曜日にこゝへ来てお前と談をするのが楽しみだつた。いつも暖爐のそばにスリツバを揃へておいてくれるお前の親切が身にしみたのさ。ねえ、フェリシテ、お互ひの齡になつちや、もう色戀の沙汰ぢやないんだね。たゞ甘やかされて、少し我儘がしてみたいといふだけさ。ね、さうだらう。」

フェリシテは黙つてうなづいた。自分のためにも男のためにも、その考へを承認した。今日男が入つて来たときの様子から彼女が漠然と豫感したことを、彼はつひに云ひだしたのだ。この二年間、土曜日ごとに語り合つたことは、男にとつては要するに家庭といふものゝ影像であつたし、彼女にとつてはそれの幻覺に過ぎなかつたのである。

男は間斷なしにしゃべつたが、フェリシテは上の空で聞いてゐた。やがて男は黙りこむと紙入から百フラン紙幣を一枚とりだして、

「これでいゝ着物でも買ひなさい。」

さういつて、その紙幣を彼女にくれた。

しかし、これは特別のお情といつてよからう。よしんば無斷で来なくならうと、何も與れなから

うと、彼女の方から不足はいへないわけだ。まして男は最後まで彼女に好意をもつて、大切にしてくれたのである。彼はフェリシテの兩頬に接吻して、

「では左様なら、フェリシテ、これでお別れだ。お前も達者で暮らなさい。」

さういつて彼は歸つて行つた。フェリシテはまた獨りほつちになつた。

やがて時計が五時半を打つた。彼女は、

「街へ出ようか。」

と思つたけれど、何だか疲れを感じておつくふだつた。それに外は急に雨が降りだして、人々はその夕立の中を駆けてゐるらしかつた。

暖爐の火もいつの間にか消えてゐた。彼女は椅子に坐つたなりで、男がおいて行つた青色の紙幣を幾度もひつくりかへしてみた。

そして機械的にあたりを見廻はしたが、その視線はかの刺繡したスリツバから、卓子の隅に寂しくおかれたまゝになつてゐる菓子子の包みへおちて行つた。

やがて六時が鳴ると、

「かうしちやゐられない。出かけよう。」

しかし彼女は、起ちあがる力もなく、やはりぢつと坐りこんでゐた。間もなく夜だが、暮れなやむ黄昏の光線が微かに仄めいて、開けつばなした窓からは冷いしぶきが床へ吹きこんでゐた。彼女は急に捨てられた孤獨を感じだした。

「やつぱり街へ出なければならぬ。」

窓に肘をついて、六階の上から、何を見るときもなく何を考へるときもなく、ほんやり街を見おろしながら獨りごとをいつた。

「あゝ厭だ……厭だ……」

そのとき、すぐ下の五階から晴れやかな笑ひ聲が聞えて來た。階下の家族は幸福だつた。その主人は昨日、ムツシウ・カシユウの勤めてゐる役所に大變い、口を見つけて採用されたといふことだ。彼女はそんなことも話題にするつもりだつたのに、ムツシウ・カシユウは自分の云ひ分が通るとさつさと歸つて行つたものだから、その噂をする暇もなかつた。そして突然獨りほつちになつた今は、さうした世間話をしたくも、もう相手がないのであつた。

「あゝ厭だ。この先どんなに厭な思ひがつゞくことか。」

日はとつぷりと暮れてしまつた。背後から濕つほい暗と小さな室の寂寞が肩の上へ蔽被さるやうな

氣がして、思はずそつと窓から顔を出した。ふるふる瓦斯の灯にちら／＼してゐる街は、何だか自分から逃けてゆくやうに見えた。

「あゝ厭だ。」

彼女はほつと溜息をついた。そして無雑作に、何の未練もなく、殆んど何の氣なしに半身を突きだして首を垂れると、呀！といつたなりその六階の窓から跳び降りた。

彼女は「至福」を意味するフェリシテといふ名前であつた。それなのに、若くも美しくくもない、貧しい女だつた。

ふみたば

作家のランチエは、黙つて、大きな卓机から一束の手紙を取り出した。その文束は眞紅なりボンで結へてあつた。

「あなたは、これが要るんですか。どうしても取りかへさうと云ふんですか。」

彼はおろ／＼聲でいつた。が、マダム・ヴァンクールは何もいはずに肯づいてみせた。

「かうした要求が男の心にどんな傷手を負はせるかといふことが、あなたに解りませんか。」

ランチエはもう一度哀願してみたが、女は返事もしないで、たゞ手をのべるばかりであつた。

「僕も悪かつたけれど、そんなに虐めなくなつていゝぢやありませんか。成るほど僕はちよつと不實なことをした。あなたが憤るのも無理がない。だから僕は散々謝罪つたでせう。足りなければ何回でもお詫します。しかしあんなことのために全然愛想づかしをして、前々からの手紙まで取り返すとい

ふのは酷い。つまり僕はあなたの愛を失つたばかりでなく、あなたから踏みつけにされるのですね。それに……」

「もう澤山、愛なんてことを二度と仰しやらないで下さい。」

彼女の聲は少しも潤ひのない、冷淡なものであつた。

「そんなら、あなたは僕といふものを全然信用しないんですね。僕がこの手紙を利用して何か悪事でも企らみはしないかと思ひなうせう。だから返してくれなんて云ふんでせう。」

彼は、女に劣けない程度に冷静を装つたつもりだけれど、その文束を持った指先が無残にふるへてゐた。

しかし女は彼の言葉を耳にもかけない風で、

「とにかく返して下さい。」

とせがんだ。それでランチエもつひに断念して、抽斗をびしやりと閉め、それから腰をかゞめて、

「ぢやお返ししませう。」

女は文束を取り戻してしまふと、ほつとしたやうに相好を和らけて、やつと緊張してゐた態度をゆるめた。そして一しきり室の中を見廻はしたが、さすがに過去二年間の楽しい思ひ出を胸に喚びおこ

してか、深くも感慨にうたれた風であつた。

それは惱ましい瞬間だつた。

ランヂエはもうがっかりしてぢつと額を押へてゐた。が、女は早くも元の冷靜に立ちかへつて、優しくしかし妙に冷酷を押込んだ口調で、じゆん／＼と辯解をはじめた。

彼女は今大きな椅子の肘掛けに手をおいてゐるが、以前の彼女は入つて来るなり焦かしさうに、その椅子へ手提袋や暖手套を投げだしたものであつたのだ。

『わたしは、何も貴方に對して悪意をもつてゐるのではありませんよ。貴方だつても左様でせう。けれどもわたし達の關係は、どうせ永くつゞけてゆくことの出来ないものなんです。ね、ですから、今のうちにお別れする方がいゝと思ひますの。今に他の女がわたしと入れ代つて、此室へせつせと通つて来るでせう。そして、わたしの坐つた席へその女が坐つて、わたしがしたあらゆることをその女がするでせう。さアさうなると、わたしの手紙が此室にあると劍難です。わたしの名譽だつて危いわ。いゝえ、貴方が何處へ隠したつて駄目。結局嗅ぎ出されるにきまつてゐますからね。ですから、よく考へて御覽なさい。貴方だつて、大切な記念だから返せないとか何とか仰しやるけれど、ほんたうは單に、自尊心を傷つけられるのがお厭なんぞでせう。』

ランヂエは慌て、反抗するやうな身振りをやつた。けれども彼女は笑つて、

『いえ、いえ、それに違ひありません。わたしは貴君のお心がよく解つてゐます。何でもないことです。貴方だつて後になつて考へると、やはり、あんなものは返していゝことをしたと思ひなされるでせう。もう邪魔者が来なくなりますからね、みつちりと御勉強なさいまし。かうした經驗をお書きになると、また素晴らしい創作が出来になりますわ。だけど、わたしなんかつまらないのね。今に貴方の御作を読んで、第一番に泣かされるのはわたしよ。』

『僕は、あなたのその涙かたつた今欲しい。』

すると女は、ふと闕際に立ちどまつて、

『そんなことを仰しやるけれど、わたしだつて、宅へ歸つてどんなに泣くでせう。』

悲しさに聲を曇らせたが、直きにまた冷靜になつて、

『とき／＼宅へもいらして下さい。これまでどほりに歓迎しますわ。』

しかしランヂエは黙つて首をふつた。

『いゝえ、ちよい／＼来て下さらないと困るわ。ぱつたりお顔が見えなくなると、人がまた變な噂を立てますからね。』

「そんなら伺ひます。」

それから一週間の間、ランチエは室にばかり閉籠つてゐた。夜眠れないので朝寢坊の癖がついた。もしや彼女がひよつこり訪ねて來はせぬかと思つて、ときどき窓に立つた。今にも戸口の呼鈴が鳴りさうな氣がして、空しく耳を澄ましたことも幾度だつたか知れない。またときどき、かの手紙の移り香が仄かに残つてゐる抽斗を開けてもみた。

次の一週間もそんな風に過ぎて行つた。今に女から電話ぐらゐるかゝるだらうと心待ちに待つたけれどそれもかゝらないで早くも一ヶ月経つた。何だか氣になつて來た。幸ひ、ときどき訪問すると約束をした言葉があるので、彼女の接客日ときまつてゐる木曜日に、勇氣をふるつて出かけて行つた。客間には二三の先客が來てゐた。マダム・ヴァンクールは、ランチエの顔を見ると、

「まアお珍らしい。この頃はすつかりお見限りですね。」
白ばつくて小言をいつた。

「延引ならない仕事がありましたので、つひ御無沙汰しました。」
とランチエも調子を合せた。

彼が來たゝめに一寸途切れた主客の會話が、またつゞけられた。それがランチエには耳新らしいこ

とばかりで、しかも自分が招待を受けなかつた此家の盛大な晚餐會のことなどを、面白をかしく話してゐるのを聞くと、自分だけが除け者にされてしまつたといふ感じが、犇々と胸へ來た。

マダム・ヴァンクールは、ランチエが黙りこんでゐるのを見て、

「大そう沈んでゐらつしやるのね。どうかなさいまして？」
皮肉に問ひかけると、彼は一生懸命になつて辯解をはじめた。

「この頃は書きつゞけですからね。何時間も卓子に獅嚙みついた後では、かうして親しいお友達の前へ出て、何だか頭がぼうつとしてゐるやうです。」

「きつと、お書きになる小説の中の人物と一緒になつて、泣いたり笑つたりしてゐらつしやるんでせう。」

さういつて彼女は笑つた。

「まアそんなものですが……」

「結構な御職業ですね。客の一人が口を出した。愉快でせうな、御自分でお創造になつた世界の中に生きてをられるといふことはね。」

「それがさ、他で考へるほど愉快なものぢやありませんよ。」

『でも貴方は健筆家であるらしやるから、ほんたうに結構ですわ。』
とマダム・ヴァンクールは、や／＼笑ひながら妙に皮肉ないひ方をした。
ランヂエは一寸考へこんでゐたが、やがて眞面目くさつた口調で、

『いや、どういたしまして。今やつてゐる仕事なんか筆が溢つて仕様がありません。實は大變不幸な出来事が突發して、仕事の上に大打撃をうけたのです。一體今度の作は、手紙小説の形式で行かうと思つて書きはじめたのです。もちろん有りふれた型ですがね。しかし僕の場合に限つて立派に成功する望みがあつたのです。といふのは、僕はそのモデルとして傑作ともいふべき戀文を澤山もつてゐるからです。ところが申し上げるのも變なお話ですが、その婦人が僕を捨てゝしまつたんです。いたい戀文などは、貰つた當人以上の者にとつては一向値打のないもので、その當人だつて時が過ぎると何の興味も感じないものですが、僕が貰つたその戀文といふのは清新そのものといつていゝくらゐで、いつ讀んでも感動させられます。僕があれだけ感動したんだから、一般讀者の胸に響かんといふことはありません。その手紙の署名と日附を變へて、ちよい／＼加筆しただけでも、熱情的な、すばらしい戀愛小説が出来ます。その手紙を書いた婦人は、何も名文を書かうなんていふ野心からでなく、只もう感情を有りのまゝにさらけ出したものですがね、實にすばらしい傑作です。その女は僕の

今度の手紙小説を讀んだら、おそらく自分で自分の天才に吃驚するでせう。ところが實に残念です、もう一息といふ時になつて……』

『氣が差して書けないと仰しやるんでせう。』

とマダム・ヴァンクールが訊いてみた。

『いや正直に告白しますが、決してそんなわけではありません。實はその婦人が手紙を返してくれといひだして、僕が大切にしている文束を引奪るやうに取つて行つたのです。それで僕の小説は、どうしても結末のつかぬものになつてしまひました。』

可成り時刻が経つたので、客はほつ／＼歸つて行つた。

最後に居残つたランヂエも暇をつけて、仄暗くなつた廊下へ出ると、マダム・ヴァンクールがそつと追かけて來て早口にいつた。

『明日、お宅へ伺ひますわ、あの手紙を持つてね。』

ランヂエは外套の襟を直しながら、怪訝さうに彼女の顔を見まもつた。それから懇懇に腰をかゞめて、彼女の手に接吻をして、

『折角ですがね、マダム。あの話は、あなたの手紙のこちやありません。』

暗中の接吻

「御免なさい……御免なさい……」

女は膝まづいて哀願してゐた。男は少しやさしい口調になつて、

「起ちなさい、もう泣かんでもいい。おれにも缺點があつたんだからな。」

「いゝえ、貴郎、飛んでもない……」

女が口ごもりながらいふと、男は首をふつて、

「お前と別れたのが悪かつたんだよ。お前はおれを愛してゐたのだからね。尤も、おれだつて初めはこんな風に考へる餘裕もなかつたさ。あの當座、硫酸で顔を灼かれた痛みがひどくて、それから盲になつて、おれの一生は恐怖と死のほかにも何にもないといふことが初めてわかつた時分は、今とは似ても似つかぬ考へに囚はれてゐたんだ。誰だつてあゝした苦しみの最中には、急にあきらめがつきやし

ないからな。だが盲になつて不慮の間に閉ざされると、眠つてゐる人のやうに、却つて物事がはつきり
と見えて来て、氣が靜まるものだよ。この頃おれは肉眼が見えない代りに、心眼で物を見るやうにな
つた。おれたちが住まつてゐたあの家が見える。昔の平和な日が、お前の笑顔が、眼前にちらつく。
さうかと思ふと、別れた晩のお前の寂しさうな顔が見える。裁判官はあゝした事情を知らないものだ
から、たゞお前がおれをこんな不具者にしたといふ點に重きをおいたんだね。だから、おれは法廷へ
出て詳しく説明をしたのだよ。裁判官は無論お前を禁錮にするつもりだつた。さうするとお前は、何
處ぞの監獄でじりく〜と老い朽ちる外はなかつたんだ。しかしお前を何年牢に入れたつて、おれの視
力はかへつて来やしない。ところで、おれが證人席についたとき、お前はびく〜ものだつたらう。
おれがきつとお前の罪狀を洗ひさらひ申し立て、こつ酷くやつつけはしないかと思つてね。だが、
おれにはそんなことは出来ないんだ。」

女は両手に顔をうづめて、涙にむせびながら、

「貴郎は何てやさしい方でせうね。」

「おれは公平だよ。」

彼女は歎歎あけながら言葉をついだ。

「後悔してゐます。わたしは何といふ恐ろしいことをしたんでせう。それなのに、貴郎は裁判官にわたしの放免を願つて下さつたのね。そして今もこんなに優しくして下さるんですもの。わたしは恥かしくて穴にでも入りたいくらよ……濟みません、ほんたうに濟みません……」

彼は、女がしやべつたり泣いたりするのを黙つて聞いてゐた。椅子の背へ仰のけに頭を凭たせ、腕掛けに手をおいたまゝ、何の感動もないやうな風で耳を傾けてゐたが、やがて女が静まるのを待つて問ひかけた。

「お前はこれから何うするんだい。」

「わかりません。わたし大變疲れてゐますから、四五日ゆつくり休みたいんです。それから勤めに出ます。また賣り子か、衣裳屋の生模型の口でも探しますわ。」

「お前は相變らず美しくいだらうな。」

それを訊いたときの男の聲はこはばつてゐた。

女は答へなかつた。

「お前の美しい顔が一目見たいなア。」

彼女はなほ黙りこんでゐた。

男はちよつと身ぶるひして、眩くやうにいつた。

「もう晩になつたやうらう。電燈をつけてくれ。眼が見えなくても、四邊が明るいと思へば氣持がいゝものだ。お前はどこにゐるんだい。暖爐の傍に？ そんなら手をのべて御覽。そこにスキツチがあるから、ひねつておくれ。」

盲ひた眼瞼の奥には何の變化も感じないけれど、女の唇からアツといふ驚きの聲がもれたので、彼は電燈がついたのを知つた。女は自分の罪業の跡をば初めて電燈の下にまざくと見たのであつた。

男の顔は、白い條痕をなしてゐる間に、赤い溝が交錯し、額に黒ずんだ髪が灼きついてゐて二タ目と見られぬ物凄しい形相だつた。

彼が法廷に立つて女のために放免を哀願つたときは、女は被告席にうづくまつたつきり泣き咽んでゐて、彼の顔を見上げる勇氣もなかつたが、今日あたりにこの物すごい形相を見ると、堪らなく厭な氣持がするのだ。

しかし男は格別怒つた風もなく、低聲で、

「どうだ、凄顔になつただらう。まるで昔の面影があるまい。おや、お前もう遅けるのか。」
女は聲をふるはせまいと努めながら、

「遁けるもんですか。こゝに、ぢつとしてゐるわ。」

『さうかい、そんならもつと此方へお寄り。顔が見られない代り、せめてお前の手に觸つてみたいな。もう一度そのふつくりした手に觸らせてくれないか。極まりがわるいけれどお願ひだ。一寸でいゝから手を握らせてくれ。盲といふものはな、觸つただけでも、奇態にさまざま思ひ出がかへつて来るものだよ。』

女は顔をそむけて、手をのべると、男は彼女の指を嬉しさにいぢくりながら、

『おゝ、可愛い手だ。ふるへなくてもいゝよ。嬉しい仲であつた時分のことを思ひ出させてくれ。おや、おれの與つた指環をはめてゐないね。どうしたんだい。おれは取りかへした覚えはないが。お前も「これはわたし達の結婚指環にしませう。」つて云つてゐたではないか。何故脱つたの。』

「だつて、極まりがわるいんですもの。」

『いゝから箆めてゐなさい。ね、きつと左様すると誓つてくれ。』

「では、左様しますわ。」

男はしばらく何か考へこんでゐたが、やがて落ちついた聲で、

「外はもう眞暗だらう。そして大變寒いね。盲になると寒さが身に沁みるぞ……お前の手は暖かい。」

が、おれのはまるで氷だ……盲は癪がいゝつていふが、おれなんかはまだそれほど鋭くなつてゐない。

追々鋭敏になるだらう。おれは驅けだしの盲で、いはゞ幼稚園の子供みたやうなもんだからな。」

女は男に手をまかせたまゝ、ほつと溜息をして、

『おゝ神様、神様……』

男は夢の中で物をいつてゐるやうな調子で後をつゞけた。

『お前が来てくれたので、こんな嬉しいことはない。お前さへ承知なら、いつまでも一緒にゐて貰ひたいんだが、しかしもうそんなことは出来やしない。今後おれと同棲するといふことは随分辛いことだからな。それに、おれたちのやうに嬉しい思ひ出をもつた者は、成るだけそれを壊さぬやうにそつとしておく方がいゝのだ。おれの顔はもう見ても慄然とするだらう？』

女はそんなことはないと言つたが、男はいつと皮肉に笑つて、

『嘘をつけ。おれは前に、情婦から硫酸をぶつかけられた男を見たことがあるが、その顔といつたら二度と見られたものぢやなかつた。女たちは彼に逢ふと顔をそむけたよ。それでも彼は自分の顔が見えないものだから、厭がる人をつかまへては話しかけてゐたつけ。おれも今はその男と同様なんだ。え、さうだらう。長らく同棲したお前でさへも、厭がつてふるへてゐるんだからな。おれはよくわか

るよ。お前はいつまでもこの顔を思ひだして魔されるだらうが、それを思ふとおれは悲しい……もうこんな話は止さう。ところでお前はすぐに勤め口を探すといつたね。それについてお前の計畫を話してくれないか。もつと傍へ来いよ、おれは耳も少し遠くなつたんだ……で、どうだね、今の話は。』

二人の肱掛椅子が、殆んど觸れるばかりに引き寄せられた。女はむつつりと黙りこんでゐるが、男は吐息をして、

『あゝ懐かしい匂ひがするね。おれはもう一度この匂ひが嗅ぎたさに、お前の使ひつけの香水を買つてみたが、どうもしつくりしなかつた。お前がつけると、髪や肌の匂ひと調和するからいゝんだね。もつと此方へお寄り。今歸つて行くと二度と来てはくれまいから、せめて匂ひだけでもたんのうさせておくれ。お前はふるへてゐるね。この顔がそんなに怖いのか。』

『わたし、寒いよ。』

『なるほど、薄着だな。外套も着て来なかつたやうだね。もう十一月だよ……外は曇つて、じめ／＼して、寒いだらう。大層ふるへてゐるね……おれ達の舊の家は暖かくて、氣持がよかつたな。お前も思ひだすだらう。あの時分は、抱きよせるとお前は恍惚とおれの肩へ顔をかくしたりしたもんだが、今ぢやおれに抱かれたがる女なんか一人だつてありはしない。もつと傍へお寄り。そつちの手も握ら

せてくれないか。左様々々。ところで、お前はおれが會ひたいといふ言傳を辯護士から聞いたときに、どう思つたの。』

『来なければならぬと思ひました。』

『そんなら、まだおれを愛してゐてくれるんだね。』

『それは愛してゐますわ。』

と彼女は思ひきつて一呼吸にいつてのけた。

『そんなら、別れの接吻をさせてくれ。厭でもあらうが、ね、接吻だけでいゝんだよ。歸りたければ歸してやるからね。いゝだらう？ ね、いゝだらう？』

女は思はず後退りをした。しかし、さうした心が恥かしくもあり、男のことを思へば氣の毒にもなつて、その切なる頼みを無下に拒むわけにも行かなかつた。それで彼女は眼をつぶつて、男の肩へ額をよせた。

が、ふと眼をあけたとき、男の醜惡な顔がすれ／＼に迫つて來るのを見ると、ぞつとして急に抜けださうと身もだえした。けれども男は一層強く彼女をひきよせて、

『歸りたいか。お待ち、お前はまだ沁々おれの顔を見ないだらうが、よう／＼見て御覽……唇を貸して

……もつと思ひきつて前へ出せよ……どうだ怖かアないか。」

『おゝ苦しい。』

と女は呻いた。

『さうぢやあるまい、怖いんだらう。』

『おゝ苦しい、苦しい。』

すると男は低聲になつて、

『しつ、聲を出すんぢやない。静かにしろ。おれに捉まつたが百年目だ。これ、じたばたしたつて駄目だよ、腕力ならおれの方がすつと強いんだ。』

と左の手で女の両腕をぐつと押へつけたまゝ、右手で上衣のかくしから一つの小壘を取りだして歯で栓を抜いた。

『うむ、硫酸だよ。顔を仰向けろ……左様々々……今にわかるぞ……おれたちは飛びつきり似合ひの一対になるんだ。お互ひつこだ……はゝア、ふるへてるな。おれがお前の放免を願つたのと、今日こゝへ呼びよせた理由が解つたらう。美くしいその顔をおれと揃へにしてやるんだ。さアお前も化物になれ、おれと同じ盲になれ……あゝ、痛むさ、そりや猛烈に痛むさ。』

女が哀願しようとして口をあけると、

『こら口を開いちや可かん。閉めろ……殺さうと云やしない……殺してしまつちや、刑罰が軽すぎるからな。』

腕で女の體をしつかと押へつけ、その口を手で塞いで、硫酸をたらくと額に、眼に、頬に滴らした。

女は死物ぐるひに藻掻きだしたが、男は離さばこそ、なほ舐と締めつけて、

『そら、もう少しだ……おれを噛んだな、此女奴。噛んだつて平氣だ……どうだ、痛いか……地獄の責苦だらう。』

さうして徐々と薬液を滴らしてゐるうちに、突然、

『やツ、おれの手にもかゝつた。』

と叫んで女を突離した。

女は床にころがつて、それから絨毯の上をのたうち廻つた。顔は眞紅な襦袢をひろけたやうになつてゐた。

男はすつくと起ちあがつて歩きだした。一度女の體に蹴躓つたが、やがて手さぐりで電燈を消す

と、四邊はたちまち眞の闇にとどされた。
失明した男女の體內も今はそのやうな闇であつた。

ペルゴレーズ街の殺人事件

列車は夜闇の中をひた走りに走つてゐた。

私の車室にゐた三人の乗客——老紳士と、若い男と、ごく若い女——は、誰も眠らなかつた。若い女がとき／＼若い男に何か話しかけると、男は身振りで答へるばかりで、またひつそりと沈黙におちた。

二時頃に、速力を緩めないで或る小さな驛を素通りした。驛燈がちらと車窓をかすめると、やがて車體が轉車臺のところだがた／＼跳つたものだから、うと／＼しかけたばかりの若い女は、その震動と音響で目をさました。

若い男は、手套をはめた指先で窓硝子を拭いて外を覗きこんだが、驛の時計も、ランプも、驛名札ももう闇にかくれてゐた。

「ジャック、こゝは何處なの。」

女が慵い聲で訊くと、若い男は懐中時計を出してちよつと考へて、

「判然わからんがね、時間からいふと、もう直きにボンタリーエだらう。」

「否、まだなか〜ですよ。」と老紳士が口をはさんだ。『まだトンネルも越しませんからな。』

若い男はお禮をいつた。女は溜息をついて、

「ほんたうに、この汽車は何て長いんでせうね。わたし些とも眠れないのよ。せめて新聞でも買つておいて下さればよかつたのに。」

「失禮ですが。」

老紳士はさういつて、幾枚かの新聞を彼女の方へべた。

彼女はしとやかにそれを受けて、莞爾した。若い良人はお禮ごゝろに巻煙草の函を老紳士の方へさしのべて、

「一本いかゞですか。」

「難有う。」

その若い男は三十ぐらゐの苦味ばしつた細面の好男子で、きりりと引緊つた體格に、粹な服装をし

てゐて、眼付はごく柔和で、殊に細君を見るときの眼ざしが優しかった。

細君は夢中になつて新聞に読みふけてゐるらしくつた。若い男は迂りおちた膝掛を直してやつて、細君の眼が疲れぬやうに、ランプの蔽ひをおろしてから、ちよいと彼女の手を撫でて、

「これでいゝだらう。」

細君は莞爾した。そこで若い男は老紳士の方へ向きなほつて、

「どうも難有うございました。この汽車は長くて、辛いですね。殊に家内は夜汽車に慣れないものですから。」

すると老紳士は愛想よく答へた。

「この季節は夜明けが遅いもんだから、ヴァロルプへ着いてもまだ暗いのに、彼驛では税關の手續きがあるので、三十分間の停車です。貴方がたは多分伊太利へいらつしやるんでせう。」

「いや、瑞西へ出かけるところです。家内が少し健康がわるいので、醫者から山へ轉地しろと云はれたものですから。しかし山が寒くて此女が困るやうでしたら、湖水の方へ降りるつもりです。此女はよほど大切に保養せねばならんです。それに私もこの頃過勞れてゐるので、ゆつくり靜養したいと思ひます。」

若い細君は、新聞を続けざまに皆な読んでしまつてから、
 「何もありませんわ。私の大好きな記事を書いてくれないんですもの。わたしは小説なんかよりも、
 あの事件の後報を待つてゐるのよ。」
 良人は肩をすほめて、

「あの事件の何處にそんな興味があるのか、不思議だね。」

「何處つて、全體が面白いのよ。巧妙な殺人——謎の事件——素的ぢやありませんか。」
 すると、老紳士も我慢がしきれないといつた風でその話に口を出した。

「あなたの仰しやるのは、ベルゴレーズ街の殺人事件のことです、マダム。」

「え、あれは面白い事件ぢやありませんか。」

「實に面白いですね。」

「そうれ御覽なさい、この方も同じ御意見よ。」

男は眼を伏せたなりで新聞をひろけて、

「一體どうした事件だつたかね。」

「あら、貴郎も新聞を読んだくせに。先晩劇場の幕間にあんなに詳しく讀んだではありませんか。そ

れに今朝だつて發つ前にも……」

すると男は新聞を手から落して、呆れたやうに細君の顔を覗きながら、

「こら、お前は氣でも狂つたか。僕は讀まないといつたら讀まないだよ。」

と如何にも素氣なく、殆んど亂暴な口調でいつた。彼は見たところ柔和で優しさうだが、決して細君の口答へを許しておくやうな、お目出度い亭主でなかつたに違ひない。それに、先刻あんなに優しかった碧眼が急に険しくなつて來たので、私ははらくした。と、彼もすぐ私の驚きに氣づいたらしく、氣をかへて去りけなく云ひなほした。

「あ、わかつたよ。遊び女が自分の家で、夜中に短刀で殺されたとかいふ事件だらう。」

「夜中ぢやない、眞晝間よ。」

と若い妻君が訂正した。

「晝間だつたかね。賊は金や寶石を攫つて行つたんだらう。さらにある事件さ。」

「どういたしました。もつとく不可思議な事件ですわ。」

「お前の怪事件好きには降参だよ。」

彼は歎息して、また「タン」紙を讀みつづけた。

若い細君は老紳士の方へ向きなほつて、
 「その不幸な女が兇行に遭つてゐる最中に、誰か戸口へ訪なつただらうといふ説もありますが、どうも左様らしいですわね。」

「あなたは、何うしてそれを信ずるのですか。」

「ごく簡単なことでございます。といふのは、賊が入つたにも拘らず寶石類が一つも紛失してゐません。箆笥の上には高價な指輪が二つと、ダイヤ入りのブローチが一つ、元のまゝに載つてゐて、陳列ガラスの中の骨董品にも手を觸れた形跡がなく、室の中は整然となつてゐたさうです。きつと犯人は突然戸口に人が来た物音に驚いて、獲物を取込む暇もなかつたのでせう。ですからあの犯人は、大した得にもならなかつたのです。」

しかし老紳士は首をふつて、

「ところが、大儲けですよ。あんな大儲けをした殺人事件は、この數年來ありませんな。おまけに賊は悠々と行つて除けたのです。それは私が保證します。」

「そんなら、何故寶石を盗らなかつたでせうか。」

「それは賊が利口な奴で、貨幣や紙幣は無難だが、寶石類は所持してゐても賣つても足が付き易い」

と考へたからです。當節は電信や電話といふものがあつて、犯罪者も迂濶出來ませんよ。例へば海上で無線電信をかけると、犯人は法律で引渡しを禁じられてゐる安全な國へ上陸する前に捕縛されますからね。」

「けれど今度の犯人は、早速足がつかないやうに要領して、抜け目なく立廻つたんでせうね。」

「それは左様ですとも。結局捕まりつこありませんな。」

老紳士はきつぱりと云ひきつた。私はもう黙つてゐられなくなつて、

「ところが皆さん、それが怪しくなつて來ましたよ。」

とつひ口を迂らしてしまつた。若い細君はびつくりした風であつた。老紳士は新聞の蔭からじろりと私の顔を見て、

「私はこの事件の關係記事を全部読みましたがね、と彼はいひだした。『非常に注意して、新聞を十種も読んでゐるが、そんなやうな報道は一つも載てゐないぢやありませんか……』」

「その筈です。今私がいつたことはごく最近に發見したので、明日にならないと、世間へは知れないんです。」

すると若い細君は熱心に乗り出して來た。

「貴方は新聞社の方でらつしやいますか。」

「いや、奥様。しかし情報は詳しく知つてゐますよ。私は警察の囑託醫として最初の検證にも立會ひました。そのときは——あの兇行のあつた室が暗かつたものですから——短刀で胸を一突きに刺られたのが致命傷といふことだけ判つたのですが、屍體を屍體置場へ運んでから、私が改めて檢べると、左の乳房の下に、可成り大きな一種の汚點を發見しました。茶褐色を帯びてゐて、恰度人間の手型を捺したかと思はれる汚點です。そこで私はその汚點を寫眞に撮つて、種板を補力して焼付けてみると、果して手型に相異なく、しかも長い華奢な手で、あらゆる細部が、髪や線や指紋の一つも缺けないで、はつきりと現たではありませんか。」

「それは警官が屍體を持ち上げるときに、觸つたのでせう。」と老紳士が反駁した。「警官なんか一般に手型をはめてゐないんだからね。疾しい者でなくても、そこに餘りきれいでない手の痕がくつつく筈です。」

新聞を讀んでゐた若い良人はそれ見るといひたけに笑ひだした。しかし私は憤りもしなかつた。醫者のことなら何でも馬鹿にして、殊に鑑定人を嘲ひたがるのが彼の癖らしかつた。そこで私は單につけ加へた。

「人間の眼に見損ひがあつても、化學は間違ひつこありません。その汚點は正しく血痕だつたのです。極めて稀薄だけれど、血で附着した手型に相違なく、殊にそれは、事件の發見以來その家に入入した何人の手にも適合しません。それに、血に汚れた濡れ手拭が一本、化粧臺の傍に捨て、あつたのを發見したので、それを手がかりとして容易に兇行當時の様を判斷することが出来ます。即ち犯人は兇行を終へると、鮮血に染まつた右手をその手拭で拭いてから、去り際に、被害者が完全に締切れたか、止めを刺す必要がないかを確かめるために、彼女の心臓の部分に手をあてゝみると、鼓動がまつたく停止してゐるものだから、すつかり安心して、入つた時と同様に音もなく出て行つたといふわけだが、氣の毒にも、彼はこの手型のこと氣附かなかつたのです。その血が執念ぶかく女の皮膚へねばりついでゐるわけで、要するに彼は迂濶にも自分の仕事の上に明瞭な、疑ふ餘地のない署名をしてしまつたのです。」

三人の乗客は、呆氣にとられて聞いてゐるが、

「珍らしいこともあるものですね。」

若い細君がまつ先に感心すると、良人もその後について、

「實に不思議ですね。」

「ところが指紋だけぢや心細いね。」老紳士は頑固につぶやいた。「同時に人相や風采を突きとめない限り、それは空理空論の満身に過ぎないでせう。私が犯人なら枕を高くして眠りますね。」

「今晚だけはね。しかし明日は駄目です。今いつた手型の寫眞が明日あらゆる新聞に載ります。さうするとこの手は、佛蘭西中は無論のこと、二日後には歐羅巴全體に知れわたりますからね。犯人は一生涯寝ても起きてても手套を離さないといふ決心をしなければ、必ずこの手から發覺します。それが厭なら男らしく自分で手首を截斷するんですね。何故つて、この手は種々なる特徴があつて、専門家が見ると容易に判別が出来るばかりでなく、もう一つ、誰が見ても判る目印があります。それは無名指の尖から、手相見の謂はゆる生命線の基點へ走つてゐる一條の創痕なんですがね、實に鮮やかなもので見まいとしても目につくのです。それで大變不吉なお話だが、もしもその犯人がこの車室に乗つてゐるとすれば、奥様なり、諸君なり、私なりが直ちに彼を認めて、次の停車場で警官に捕縛させることが出来るわけです。」

「おゝ。」

若い細君が呻いた。二人の男は思はず手套をはめた自分達の手を見た。

「その寫眞はほんたうに明日發表されますか。」

若い男が問ひかけた。

「われ／＼が向うへ着くと、その寫眞が新聞に載てゐるわけです。」

と老紳士もつゞいて訊いた。

「いや、寫眞は今夜渡したのですから、早くても明朝の巴里新聞でなければ載ません。」

若い細君もひどく氣になつて來たらしく、少しもぢ／＼しながら、

「早く見たうございますわ。」

「わけないことです。鞆の中に一枚もつてゐますからお目にかけてませう。これですよ。」

彼女が寫眞を手にとると、良人は肩ごしに覗きこんだ。老紳士も、

「御免なさい。」

と割りこんで來て、三人は額をあつめてその寫眞に見入つた。彼等が緊張した顔をして熱心に見つめてゐる様子は、まるで、實物の手が眼前に現はれたやうな風だった。しかしランプが暗いので、私はその細部を説明で補足しなければならなかつた。

「この白い條を御覽なさい。鮮やかなもんでせう。さてこの條は……」

「何だか鬱陶しいぢやありませんか。少し開けませう。」

若い男がさういつて車窓をあけると、老紳士は額を拭きながら、
『これは、大助かり。』

私は説明をつづけた。そのとき、汽笛がけたましく鳴つたと思ふと、車輛の響きが急にひどくなつた。私は一段と聲を高めたけれど、ごう／＼たる音響に壓されて話が通らない。

『このトンネルを出てからお話ませう。騒々しくて聞えはしない。』

すると老紳士は自席にかへつたが、若い細君はちつと例の寫眞を見つめてゐた。

『どうも鬱陶しい。』

彼女の良人は再びさういつて、昇降口の方へ衝とかゝみこんだ。

と、妙な物音がした。叫び聲のやうでもあつたし、ぜい／＼いふ瀕死の喘ぎのやうでもあつた。われわれ三人が同時に顔をあげたところを見ると、皆にそれが聞えたらしかつた。

列車は一分間、トンネルのこの物音につままれながら駛つてゐたが、やがてその音が静まると、空氣も軽くなつたやうに思はれ、車室に侵入してゐた蒸気も散つて行つた。

列車はトンネルを出きつて、再び濶い空の下を走つてゐたのである。私は説明を續けようとしてふと若い男の方を見ると、彼は自席のところ倚りかゝつて窓の外へ腕をぶら垂けたまゝ、眞蒼な顔を

してゐた。何だかは氣狂じみた眼付で私達を、殊に細君の方をきよろ／＼と見てゐた。

『御氣分が悪いんですか。』

私がさういひながら支へようとした途端に、彼は前方へつんのめつた。そのとき私は、彼の右腕の端に血みどろなものを見た。めちやくちやに碎けた肉と、骨と、血でどろ／＼になつたものがぶら垂つてゐたのである。

『あつ、大變、』老紳士が叫んだ。『トンネルの柱でやられたな。手首がない！』

若い細君はぎよつとして起ちあがつた。

私はいきなり負傷者の服の袖を引裂いて、出血を防ぐために自分のハンケチでその腕を緊束つてやつた。彼は眼を開いたが、怖々して、その視線は肩から不氣味な傷へ下つて、それから、そこに立ちすくんでゐる若い細君の方へ狂はしくこびりついた。

細君はやがて坐席へ腰をおろしたが、齒の根も合はぬほどふるへながら、無言で、怪我した良人をひしと抱きしめた。

突然、今の老紳士の叫びが私の耳にかへつて來た。『手首がない！』

私は床に落ちてゐた寫眞を見た。と、負傷者も私のその視線をたどつて、それからちつと私の顔色

を覗つた。

私はまた「免訴を確實にするためには、彼は手首を截断する外はあるまい。」と先刻自分でいつた言葉をおもひだした。

嫌疑とそして確信が、同時に私の頭にうかんで来た。けれども、その際私はそれを口へ出す勇氣もなかつたし、そんな氣持にもなれなかつた。

われ／＼はたゞ黙然として夜の明けるのを待つた。

ヴァロルプではまだ暗かつたので、ローザンヌ驛へついでから怪我人を降した。

その後、私は絶えて彼の消息を聞かない。あのときに彼は生命が助かつたかどうか不明しない。しかしベルゴレーズ街殺人事件の犯人が、つひに捕まらなかつたといふことだけは確かである。

老嬢と猫

その老嬢は毎朝、町の時計が六時を打つと家を出かけた。

それは最切の彌撒を聴くために、近所の教會堂へ出かけるのだが、彼女はまづ注意ぶかく戸じまりをしてから、どの頁も手垢によごれて隅がぶよ／＼になつた、古い祈禱書をしつかと抱へて、小急ぎに街を通つてゆくのであつた。

教會堂へつくと、殆んどから空きな脇間の祈禱臺に膝まづいて、両手を組み合せ頭をふり／＼、牧師の聲に合わせて低聲でお祈りをした。そして勤行がすむとさつさと歸つて行くのだつた。

彼女は痩せ面で、いかにも片意地らしい額の、顚顚のあたりはもう小皺だらけのくせに、凹んだ眼の底には、或る不思議な情熱が燃えてゐるやうであつた。

彼女は靜かに珠數の珠を算へながら、鋪石に蹠音一つ立てないで歩いて行つた。傍へ寄ると何とな

く香や濕つた石の匂ひがした。長年教會へ通ひつめてゐるので、納骨堂や祭具室の冷たい匂ひがその衣類にまで浸みこんでしまつたのであらう。

彼女は獨りほつちで、郊外の家に住まつてゐるが、そこには流行おくれの調度をならべ、壁に先祖達の古い肖像畫だの、神聖な繪像などを懸けつらね、年老つて瘦せこけた灰色の牝猫が唯一の伴侶で彼女はそれをブセットと呼んでゐた。

この猫は、終日寝そべつて居眠りをしながら、蠅の飛ぶのをほんやりと眺めたり、時たま起ちあがつては、風で窓硝子へぶつつかる落葉を狙つたりして、日を暮らしてゐるのであつた。

この老猫と老嬢は、お互ひに理解し合つてゐた。何方もかうした隠者くさい生活が好きで、長い夏の午後なんか、錠戸を閉めて、窓布をおろした室の中に寂然と引籠つてゐた。街は危険だらけのやうに思はれて恐ろしいからであつた。

人がその小路を通るとき、老嬢は錠戸の隙間から、寢音の遠くなるまで覗いてゐるのが常であつた。猫はまた猫で、他の猫がやつて來ると、頭を伸ばし三本足で延びをして、ひよいとはぐれてしまふ。さうすると他の猫は手持不沙汰に戸の前へしやがんで、大きく頭を振りながら、自分の體を舐めずり廻はしたり、或はあわて、換氣窓から迂るやうに逃げだすのであつた。

この老猫のブセットだつて、曾ては、靜寂と動かぬ樹々すらも戀に浸つてゐるやうな生温かい晩など、他の牡猫のおほろな影が屋根のあたりにちらほらすると、庭の方へ顔をつき出して聲を合せながら、その切なる誘ひに興奮した體をしきりに椅子の脚へすりつけたりしたこともあつたものだ。そんなとき、老嬢はブセットをいきなり自分の室へ押しこめて、窓から他の猫を憎さげに怒鳴りつけた。

「しつ、彼方へ行け、彼方へ行け。」

すると鳴き聲ばかり聞えて、影は一瞬間ちつとしてゐるが、再び動きださうとすると、老嬢はまた錠戸をしめ窓布をおろし、寢床へちまこまつて、猫をば夜具の下へかくして、外の聲を聞かせぬやうにして、そして眠つかせるために頭を撫で、やるのであつた。

老嬢はさかりといふことを考へるだけでも癢にさはつた。自分の處女性を誇りとしてゐる彼女は、苟りにも純潔でないものは悉く嫌つた。肉の機能といふものは、人間ばかりでなく、獸をも墮落させる惡魔の道具としか思へなかつた。戀人同士が手を取つて月夜にそゞろ歩きをしたり、夕暮の空を眺めにかへる鳥が連がつて飛んだり、夫婦鳩が巢の縁で嘴を觸れ合ふところを見てさへ、彼女は眞赤になつて憤つた。

ブセットも以前は綺麗な猫で、毛並がつやくして丸々と肥つてゐたので、近所の人がよく口をかけたものだ。

「お宅の猫を貸して下さいな。うちのと交尾はせると、きつとい、仔が出来ますわ。」
だが老嬢はブセットをしかと抱きしめ、顰めつ面をして拒ねつけた。
「嫌です。大切の猫ですからね。」

さうしてゐるうちに、ブセットはだんく醜くなつた。痩せた體がますます落ちて行つた。おまけに、この僧院らしい生活の感化によつて、本能といふものを全然忘れてしまつたやうであつた。はげしい情熱も次第に鎮まつて、しまひには牡猫等の執拗い誘ひ聲に身悶えするやうなこともなくなつた。

ところが或る夏の晩、ブセットは肱掛椅子の上に寝てゐたが、ふと焦々しく起きあがつて、暗がりをつそりく歩きはじめた。外では、他の猫等が桶の中できりに呼び聲を立てゝゐた。ブセットは足をのばして爪で絨氈を引つかき、尻尾で自分の横つ腹を叩いてゐたが、突然、夢中になつて半開きの戸口から驀直に庭の方へ駆けだした。

牡猫等のそばへゆくと、長い間眠つてゐた本能が目ざめて來た。ブセットは口を開け、爪で瓦を搔

きむしり、牡猫等と一緒に跳び廻りつゝ、彼等が呼ばば聲を合せ、彼等がふざけて噛みつくと、甘つたれて嬉しさに鳴き立てた。

この騒ぎに眼をさました老嬢は、びつくりして寢床の上に取りきなほつた。戀といふものがこれほど勝ちほこつた叫びをあけてゐるのを、彼女は曾て聞いたことがなかつた。彼女はブセットを保護すべく、いきなり寢臺から跳びおりたが、肱掛椅子の上に猫がゐない。

「ブセットや、ブセットや。こゝへ來い、こゝへ來い。」

いつも呼ぶとすぐに驅けて來るのだが、その晩に限つて答へがない。老嬢は、手さぐりで戸が半開きになつてゐるのを發見して、ぎよつとした。賊が忍びこんだかといふ恐ろしさよりも、猫が逃げてしまつたのではないかを恐れたのである。

暗がりでもツチを擦ると、小さな蒼い焔がちよろ／＼と燃えた。

「どうしたんだらう……はてナ……ブセットや……」

呼びながら、そのマツチで蠟燭を點したが、同時にアツと怒りの叫びをあげた。

ブセットが其室に見えないのだ。

やがて、草花の匂ひのぶん／＼する庭へ出て行つた老嬢は、青白い月光を浴びながら、夢中になつ

てブセットを呼びつゝけた。

屋根の上では、ブセットはすつかり落ちついて、相手の牡猫の横つ腹へ肩をなすりつけてゐるが、そのとき如何にも馬鹿にしたやうな風で、ちらと老嬢の方を見つつきり、體をのぼし、首をふりながら、平氣で巫山戯つゝけた。

翌くる朝の六時に、老嬢が彌撒に出かけるときになつても、ブセットは姿を見せなかつた。

勤行が済むと、老嬢は例の珠數たまを數へることも忘れて、大急ぎで歸つて來た。昨夜のことが氣がかりなので、教會堂へ行つても上の空で起つたり膝まづいたりして、彌撒もろくろく耳に入らなかつたのである。

家へ歸つてみると、ブセットは椅子の上にごつすり寝こんでゐて、呼んでも耳すら立てなかつた。

老嬢は嚇然となつて、いきなりブセットの首つ玉をつかんで床へ叩きつけた。と、猫は驚いて一瞬間ちつと竦んでゐるが、やがて一つ欠伸をして、背中を盛りあげ、またしやがんで暫く眼をぱちくりさせてから、ぐつたりと腰をまけると、そのまゝ亂次なく睡こんでしまつた。

それからといふものは、老嬢はこの猫をば穢れたものゝやうに毛嫌ひした。猫が寄つて來ると足で蹴つとばして、

『彼方へ行け、彼方へ行け。』

と叱りつけた。

或るときは、憤りで眞蒼になつて、瘦せた指でブセットを掴みあげてその眼をぢつと睨み据ゑてるかと思ふと、だしぬけに地面へ叩きついたりした。そればかりでなく、ブセットが通り路にまごまごしてゐると、つかまへて、頭といはず、肩といはず、殊に横つ腹を厭といふほどひつぱりたい。

彼女はかうした折檻によつて一種の兇暴な、そして神聖な歡びを感ずるのであつた。が、猫はそれに對して些しも反抗する氣色がなかつた。

さういふことが六週間もつゝいた。そして老嬢は成るだけ近所の人達を避けるやうにした——恰度愚かな子の噂を聞くことすらも恐れる母親のやうに。

ところが或る朝、常よりも激しく責め折檻をして、横つ腹を手ひどくひつぱたくと、ブセットが矢庭に跳び起きて、脚をあけ、毛を逆立てたので、

『おや、わたしを引掻く氣だね。こいつ奴。』

と身構へをする暇もなく、猫は主人の顔を目がけて跳びつきざま、兩頬へ深々と爪を立てた。

老嬢はアツといふ悲鳴と、ともに、血塗ろの顔を押へながら自分の室へ逃げこんだ。